
天空への階段

tukasin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天空への階段

【Nコード】

N4464I

【作者名】

tukasim

【あらすじ】

幾多の屍を越え辿りついたのは

地獄だった。

迷宮『エンドレス』、その最上層の最上階を抜ければなんでも一つ願い事が叶えられる…という一つの都市伝説があった。

そこに憧れる人がいた。

それに縋る人がいた。

そこを目指すものがいた。

それはパンドラの箱物と分かっていたとしても…。

ある時、ある少女の呼びかけで数千人もの人が集まり、攻略に乗り出したが…帰ってきたのは三人だけだった。

舞台はそれから1年後のお話です。

第零話 『一年前の出来事』 (前書き)

次の話を期待している方すいません。こないだいていた過去話を投稿しました。それではどうぞ。

第零話『一年前の出来事』

（…四十九階）

一番上にいけば願い事を何でも一つ叶えてくれる…そう言う言い伝えがあった。

入る前は数千人居た。その表情が皆晴れやかで、皆が皆希望に満ち溢れていた。

だが…今は、百八十度表情が違い絶望に満ち溢れていた。

あんなにいた人も、今じゃ九十人に減り、三グループに分かれて…百三十階段を次々に上っており、その男深紅も一番少ない中立派、二十人のグループのリーダーで、重い足取りで上を目指していた。その誰もが無傷とは言えず、中には支えて貰わなければ、歩くことさえままならない者も居た。しかし引き返すのはもはや無理だった。上を目指すしか道はなく、たとえ僅かな可能性でも五十階にいるだろうエリアボスを倒すしかなかった。

それでも尚、眼には輝きがあった。

俺が皆を守るんだ。その男は生き残っている精鋭九十人の中でも最強の部類に入り、残っている人達の希望だった。

私が深紅を守る。傍らにいる少女ソハネは、もはやその男以外目に入っていないく、密かに決心をする。次第に五十階が見え、最初のグループの人達が歓喜の声をあげているのが聞こえ、男と少女も急

いで階段を上り五十階についた。

そこにはエリアボスが居なく、見えたのは、死んでいったもの達のために、とうとうここまでたどり着いた事により涙で見上げている者や、怪我をしているのも忘れ、周りと抱き合って喜びを爆発させている者、その中で二人の人物がこちらに気付き駆けよってきた。

「深紅さん、ソハネさんとうとうやりました。私達本当についたんですね」

「そうだ、とうとう着いたんだ。やったぜソー、ようやく終わったんだ」

「やったねクー。本当についた」

話している内に徐々に感情が爆発しソハネと手を繋ぎ、くるくると回っていた。それをくすくすと話しかけた女を笑っていた。

「ハハハア、この魔王と歌姫にかかれば、ジョウロよりちよるいもんだあ」

そう言っている割には、致命傷は無いが、その男が一番傷が多く、四十人のグループを途中から引つ張り、この階層で一番体を張り、それを芳賀にもかけず、口は悪いが仲間思いな男だった。

それを知っている女は心深い笑みで。

「そんな事ばかり言っていると、寒い男だと思われますよ」

と、心の中で思っている言葉と別の言葉を紡ぐ。何故なら彼は嫌

うからだ、感謝の言葉を。

一度彼女が言ったら『できればやめてくれ：なんか感謝の言葉を言われると湿っぽくてむずむずすんだ。それに俺たちや仲間になっただんだけ：まあソハネや深紅は思ってくれてるかもしれないけど、他の奴らはわかんねーけど、少なくとも俺はそう思ってたんだ。お前はどつなんだ。仲間を誘ってくれた：様』と茶化す様に言われたが、目は真剣だった。『私は当然仲間だと思ってますよ：様』：と茶化し返し、以来彼女は彼の前では感謝の言葉を口にしなかった。

「こりゃ〜一本取られたな」

と、苦笑し、自然な流れで彼女の肩を抱こうとしたが、第三者によつて手を振り払われる。

「いつも言ってるだろう、貴様が触ると高貴な：様にカビが移ると、フェリ、深紅、おめでとう。お前ならここに着くと分かっていた。後は欲に溺れた憐れなグループだけだ」

割り込むようにして彼女の横に立ったその男に全員が苦笑いを浮かべる。その男も又、負けず劣らず無数の傷が付いていた。

そのグループは残りの三十人でリーダーの女は、入ってきた時と今じゃ性格がだいぶ違い、今回の五十階まで、第一グループと第二グループは交互に入れ変わって交互にモンスターと戦っているのに対し、第三のグループは何もせずただ後ろから付いてくるだけだった。あるのは願いを叶えるという欲望だけ。仲間の死などもはや何も心に響かなかった。普通の人物もそのグループにわいるにはいるが、二、三人程度で、後はそういう人物だった。

それも無理はないと深紅を初めここにいるメンバーは思っている。
この大規模遠征で数えきれないほどの仲間の死を目にして狂っても
何らおかしくはないと。

「着いた…ようやく…治せる…待っててね…」

いつの間にか第三のグループが到着しており……そして上から声
が聞こえた…破滅と絶望の原因を招く声が……。

↓ 本当の地獄はここから

だった

第零話『一年前の出来事』（後書き）

良いところで終わってすいません。

どこかの部分で必ずこの話の続きを書きたいと思います

第一話『始まり』（前書き）

遅れてすみませんようやく、ここまで来ることができました。
前々から書きたかった迷宮物に挑戦しようと思います。
頑張りますので今回もよろしくお願いします。

尚前作は11月中に一旦下げさせていただこうかなと思います。
それではどうぞ。

第一話『始まり』

人はふと気付いた時に空を見上げる。

それは夜空に瞬く星空だったり雲一つない青空だったり、どんよりと曇った空だったり。

だけどこの世界には空は存在しない。あるのは、いつからできたか分からない偽物レプリカの空と…上の都市の大地。

上の都市に行くのには方法は一つ、中心部にある下の都市と上の都市を繋ぐ、何時からあるか分からないダンジョンの様に広くタワーの様に高い…『エンドレス』と呼ばれるものが。

その中はモンスターと呼ばれる凶悪な化け物がいて、普通の人では到底敵わない。

さらに上の階に行くにつれモンスターも強くなる。

しかしこれで終わりではない。現在確認されている、人が住めるような都市型の大地は四つ。まず下から順に、始まりの大地「ムーア」、第一都市「ヒート」、第二都市「ウォール」、第三都市「マシーリ」。しかしその上にも大地は続いており、その上の都市…ひいては本当の空を見た人がいるかどうかは定かではない。

ブーン。

ハエが数匹ソイドの額にくっついては離れ、その音で目が覚める。

ここは底辺の底辺。いつ壊れてもおかしくない木造建物にクモの巣や虫がそこらじゅうにあり、藁で作った寝床が申し訳程度に置かれている。それ以外は何も無い本当に最底辺の『宿屋』。

寝ていた男：ソイドは髪はぼさぼさ、髭は伸ばし放題、来ている服もボロボロと、浮浪者と言われても何らおかしくない、そんないでたちであった。

今日も行くか。ソイドの瞳は寝ぼけているわけでもないが虚ろで、最低限の服装に着替え、ただ生きるためだけに中央の上と上とをつなく階段『エンドレス』へと向かう。そうソイドは上の階を目指すもの、冒険者だった。

冒険者という者は誰でもなる事ができ、『ギルド』と呼ばれる依頼管理所に行き、簡単な講習を聞いた後登録すれば、エンドレスに入る事が出来る。

ギルドとは、仕事の斡旋場で、冒険者達が自分にあつた依頼を探し受付に持つていく。主な仕事内容は上の都市までの商人や市民の護衛。モンスターの討伐や部位の回収、時々エンドレス内に現れる宝箱の中身の奪取などのエンドレス内の依頼から上の階にある品物の買い付けや家までの品物の宅配などのお使い依頼まで様々ある。上の階に行くにつれ難易度や報奨金は上がる。

さらに、決まったパーティーや団体はコミュニティ登録し、解散や脱退するまで、エンドレス内にはコミュニティメンバー内ではパーティーを組めない代わりに、リンクと呼ばれるイヤリング型の通信装置を全員に配布し、メンバーが増加するとそのつど配布する。余談だが、一番多いコミュニティ『ゴッド・ザ・スカイ』は数千規模の人数がいるという。

エンドレスは、エリア毎に色が違い白、赤、青、黄色の順になっており、階数は各エリア共通で五十階。一日毎に階の構造が変わり、最終階にはそれまでの階より遙かに上回るエリアボスがあり、倒されると、構造が変わるまで出現しない。普通の敵は三十分毎に同じ場所に現れる。

周りの人から避けられ、奇異の目で見られても、ソイドは全く気にしていないく、ゆったりとしたスピードで目的地である『ギルド』に向かう。

相変わらずいろんな人種がいるな。ソイドは髪越しにちらちらと見る

ここに集まる人種は様々で、小さい者は五〇？ほどのホビット族、大きい者は三mほどのミノタウロス族とエレファント族。数え切れないほどの人種がいて、人種など関係なく力こそすべて、それがこの世界だ。

歩く事十分、『ようこそギルドへ』と二階全体に覆いかぶさるようにできた馬鹿でかい看板に縦幅四mほどの両開きの扉が見えるが、営業中扉は開いている。

入口と出口で二つに分かれており、今日も外まで列をなし、ソイドは最後列に並ぶ。

ソイドは虚ろげな目でぼろろと…とする事1時間、ようやく中に入る事が出来た。

入ってすぐの所にある三つに区切られた所にある内、左側の、紙の番号の書かれた紙を取り、空いている待合席に座る。中は現代で言う銀行と同じ様な作りで窓口は三つ。

正面から見て左側は冒険者申請退会窓口。主に初心者が冒険者登録をする窓口で、緊張に強張った顔の者が多い。というのは、体の一部や機能が損傷し、ギルドから『強制引退』になるものが多い。自分で退会しにくる物は限りなく少なく、年に二件ほど。しかし自分の力に限界を感じている者が多いが辞めない…というか辞められない。

理由は三つある。一つ目はお金。最初のエリア限定の依頼こそお金は少ない者の、ムーアーヒート間をまたにかける様な依頼は一カ月、エリアボス討伐依頼などは、一年間暮らせるほどの金額が手に入り、それ以上の依頼は言わずもなだった。

二つ目は仲間や家族。冒険者の大多数はコミュニティに所属しており、家庭を持っている者も少なくない。だから、仲間の為家族の為、限界を感じながらも続けている者も多い。

三つ目は未練。限界を感じながらもあがいている人や、エンドレス内で出来た思い出や、大切な者を失った人、前者はまだいいが、後者は『世捨て人』と呼ばれ蔑まれている…。

右端の窓口は、コミュニティ新規作成やコミュニティメンバーの追加脱退受付窓口。コミュニティは冒険者四人で仮登録、十人以上から正式登録でき、百人以上の規模になると拠点を申請でき、千人以上だと、村を作る事が出来る。最大コミュニティ、ゴッド・ザ・スカイは、マシーリに王国をたてたとか…。

そして、中央の窓口でありソイドも用がある窓口。そこは依頼の受付で、自分に合った依頼を見つけてくれる。この世界にはレベルという概念が無い。モンスターから力を吸収する事も無いため必ず自分の限界は訪れる。エンドレスは五階単位でモンスターが変わり、例えば一〜五階はモンスターが増減するのみ、六階からモンスターが変わり、そこをクリアすると、依頼が増える…という仕組みになっている。これを『ファイブウォール（五階の壁）』と言われている。

待つ事一時間ようやくソイドの番が来て腰を上げた。

第一話『始まり』（後書き）

一週間に一度の更新を目指して頑張っていきたいと思います。

第二話『出会い』（前書き）

何とかできたので、投稿しました。
それではどうぞ。

第二話『出会い』

またあいつか……。思わずソイドは嘆息する。名前はフーラ。身長は百六十センチそこそこ、女性、中肉中背、エンドレスを中心とした街『ムーア』に集まっている約半数のヒューマン族。白のローブを纏いそこそこある胸にギルド職員の証である刺繍が入っている。大人しそうな顔立ちで優しく温厚で普段はめったな事で怒らず、向日葵のような笑顔で癒されると冒険者からは一位二位を争うほど評判はいいが、ソイドに対しては別で、他の人が見たら別人かと思う位百八十度表情が変わっていた。

「一階常連ダメダメ、肥ダメ野郎、上に行く意気地なし冒険者失格のソイド様、本日はどのようなご依頼をお望みでしょうか？」

表情を全く崩さず、内心でめんどくさそうに思うソイドは。

「…いつもの」

とだけ言う。

「いつものと言われても分かりませんね、こちらの依頼でしょうか」

毎度毎度懲りないな。ソイドは大きく溜息を吐く。最初に出す依頼は毎回決まって『新エリア探索依頼』。それは今ある依頼の中で最高峰の依頼と言われ、当然トップクラスの人達に出す依頼で、今のソイドにとってどう見ても似つかわしくない依頼。最初のフーラが言った通りソイドはここ一年一階にいる最低ランクの依頼、『スライム討伐依頼』しか行っておらず、貰える金額もたかが知れている。しかしそれでもソイドは構わなかった。なぜならソイドは……。

「……スライム討伐いら」

右を向き、いつもの言葉を言おうとして、ソイドはここ一年誰にも見せたことがない驚愕の表情で、受付をする人物達を見る。登録申請は朝一番、昼、夕方の三回のみで、その後固まって、三時間程講習を受け、明日からエンドレスに潜ることができる。

そこにいるのは十五人ほどの人達で、人数自体は平均ぐらいだが集まった人物の内数名が際立っていた。服装は、ムーア中心部にあるただ一つの養成学校『レキントン』の学習服を身に纏っていた。

十二歳〜十六歳まで通うことができる学校で、主に魔法や戦闘の基礎、エンドレスに行くための様々な知識を教えられる冒険家と普通科の二種類あり、学園の許可が下りればエンドレスに潜ることができるが、滅多に許可が下りない。それでも毎日ギルドに来るソイドは年に何組か見たことがありさして驚かない。

だがある一人の少女を見た瞬間ソイドの鼓動が震える。意思がある、透き通った大きな蒼い瞳と綺麗に手入れされた蒼い髪。身長は百五十半ば、少し華奢な体から魔法使いと予測される。その顔が…なければ。

まさか…。似ていた…限りなく…あいつに…。

「ちょっと聞いているのですか」

フーラに呼びかけられるまで、ソイドの思考が戻らなかった。

「今居る新規冒険者の講習依頼あるか」

と、ソイドはいつも違う依頼にする事にした。講習担当者は依頼された冒険者が担当することになっていたが、一週間前に決まっております。

「無茶苦茶な事言わないでください。すでに決まっています」

案の定フーラに拒否される。だが今回の依頼に対してソイドは諦める気がなく。

「頼む」

真剣な表情でフーラを見つめる。今まで見たことがないソイドの表情にフーラは息を？む。

「ソイドがやる気をだすなんて、理由聞いていいですか」

フーラの問いかけに再度少女のほうを見。

「…約束がある。だからこの依頼はかならずやりたい」

決意を言葉に乗せる。フーラもソイドの視線を追い、目を見開き、ソイドの理由が分かった。

「全く、貴方は無茶な事ばかり言いますね。こちらのやってほしいことは聞かないというのに。分かりましたよ、私に任せてください」

フーラはため息をつくが、その顔はどこか嬉しそうで、十分位で差し替えを完了し依頼書をソイドに渡す。

「迷惑かけてすまない」

ソイドは依頼書を受け取り、新規冒険者達の方に歩を進める。

「俺が講習担当のソイドだ」

それが、彼女とソイドの最初の出会いだった。

第二話『出会い』（後書き）

次は一週間以内に何と書きあげて投稿したいと思います。
誤字脱字や感想等お待ちしております。

第三話『講習1』（前書き）

何とか一週間以内に完成しました。
それではどうぞ。

第三話『講習1』

それから、ギルドの近くにある新人訓練場に行く間ソイドに話しかける人はいなかった。当然と言えば当然である。外見からしてまづ薄汚く、子供や大人、市民や商人等冒険者とわずある意味有名なソイドは嘲笑や馬鹿にするネタにされこそすれ、積極的に話しかける奇特な人は滅多にいない。

その間ソイドは、ある少女に注意がいつていた。

「これで私も」

ソイドが注目していた少女、ネールは少し緊張した面持ちで歩を進めていた。体は普通に動かせたが、幼いころから病気で十五歳までしか生きれないと言われ、日々を一生懸命生きてきた。

十二歳で学園に入り十三歳で一学年三千人ほどの冒険科クラスで個人成績トップ五十、十四歳でトップ十入り。十五歳で亡くなると分かっていたので、パーティーに入って迷惑かけるわけにもいかず、試験で最低限組むのみ。

そして…今は十五歳。忌まわしき病気は奇跡的に治った…とお医者さんが言っていたが、ネールは何が起こったか分かっていた。きつと……姉が行ってくれたのだらうと。

ネールには二歳年上の姉がおり、第三都市『マシーリ』に住んでいる有数の冒険者で、月に一回は私達の元に帰って来た。そして…あの日、最後に帰って来たあの日、姉は言っていた、『ネールの病

気、必ず私が治してあげる。だから待ってて……と。

あの日以来姉は帰って来ず、私はトップ五に入り、その三人で構成していたパーティに入る事になった。四人組となつて学校側の認可をとり、今日ここに居る。居なくなつた姉を探すために。

新人訓練場は、教室と同じぐらいのスペースに長机と椅子が設置されている講習室とその奥にグラウンドの様な実習場がある。まず講習室に入り、全員着席したのを確認すると、ソイドは担当員の机の前、新人冒険者の前に立ち、口を開く。

「まずは自己紹介だ。先ほども言ったが、俺の名前はソイド、今日の講習担当者だ。最前列の右から順番に横順に紹介してくれ」

先ほどまで陰口をたたいていた新規冒険者は、嫌な顔せず次々と紹介していった。理由は、この講習会で一定の評価をもらえれば、より良いコミュニティに入りやすくなり、反対に評価が悪いと、しばらくの間何処のコミュニティにも入れない場合がある。結果は翌朝ギルド掲示板にて張り出される。

採点をつけるのは、ソイド……でわなく、隣に居るギルド職員で、実はフーラだったりする。なんでここに居るんだ。ソイドは疑問に思う。普通は秘匿性のため仮面を着用しそれ専門のギルド職員が出るのだが、今日に限って有名なギルド職員が出てきた。

周りからも、『ギルドの癒し姫』『笑顔の虐殺姫』『天空十二神』などの単語が聞こえてくる。結論からいえば全部本場で、昔はトップ十二に付けられる名称、天空十二神として最前線で戦っていた冒険者だったが、とある理由により現在はギルド職員をやっている。

当時その戦い方からついたあだ名が笑顔の残虐姫。

そんな人物がいるので、緊張し上擦った声で自己紹介が続き、やがて学園生達の自己紹介の番になる。

「俺様様の名前はガラド、天空王になる男だ、そんなでもって願いは一つ最強の力を手に入れる事、がははあゝゝゝ、俺様様にとりいるのは今のうちだぜえゝゝ」

その男は岩のように硬い皮膚にヒューマン族より二回りほど大きな肉体、そしてごつい顔、俗に言うオーク族と呼ばれる種族である。尤もこんな性格のオーク族は珍しいが…。

又、これは噂だが、エンドレスの最上階、本物の空を見た者は願った事がある冒険者はいないとされている今では、夢のまた夢の話である。

第三話『講習1』（後書き）

すいません、残り三人の紹介については次回になります。
感想等宜しくお願いします。

第四話『講習2』

「我は鬼神鬼華、志望動機は強いものと戦えるからじゃ、我に敵なすものは、剣の錆にしてくれろ」

そうやって鬼華は剣に手をかけ、ネールが止めに入りその場は収まる。

鬼族で名字付きか。ソイドは少し驚いた表情で鬼華を見た。体格はヒューマン族と同じだが、力はオーク族などには及ばないが数段上でしかも素早い。特徴は頭部の左右に角があり、踵は丸みを帯びているのではなく尖っていた。

目の前の鬼華も例外ではなく、腰ほどある赤髪を一つにまとめ三？ほどの角を両端に生やし、フーラを好戦的な視線で見ている。名字付きとは、天空十二神を多く輩出し、エンドレス攻略に多大な功績を与えた者や家系に与えられる。ちなみに今名字が与えられている家系は三十ありその内の十二の家系の人間が天空十二神であり、鬼神家の人間も天空十二神に入っている。

その安っぽい挑発をさらりと受け流したフーラに対し鬼華が暴れるというひと悶着があったが、今は自己紹介の続きに移っている。

「私の名前はネール・アルスタインです。私の目的はある人物を探すことです。そのためなら命すらかけます」

まっすぐな瞳で、やや緊張した声でネールが自己紹介を終えた瞬間、講習室全体が殺気で絶対零度に陥る…そんな感覚が新規冒険者を襲う。

命をかけるだと。その殺気を出したのはソイドであった。久しくなかった感情の爆発。驚いたが、それを止める気配はさらさらなかった。そう、ネールはソイドの逆鱗に触れたのである。

「訂正しろ」

低く威圧的な声色で眼光は鋭く、真っ直ぐにネールを射抜く。余りの恐ろしさに周りのはがくがくと震え、ガラドや鬼華ですら顔を青くしていた。だがネールだけはその視線を真っ向から受けてなお平然とし。

「訂正しません。私は命をかける覚悟でここに来ました」

かつとなりソイドは言葉を発しようとした瞬間、フリーラがネールの頬を叩いた。

「貴方自分勝手すぎやしませんか。貴方を救うためにどの位死者を出したか、貴方は分かっているのですか！」

ソイドの時ですらここまで怒らない、そんなフリーラの姿に、ソイドの怒りを冷え冷静さを取り戻し、フリーラの肩に手を置き、元の場所に戻った。

「自己紹介は終わりだ。十五分間休憩後説明を始める」

と言い、ソイドとフリーラは教室を出た。

空いてる部屋にひとまず移動したソイドとフリーラ。長い沈黙の後

「ごめん、我慢できなかった。」

最初に声を発したのはフーラだった。か細い声で言い、唇を噛み締める。

「いいさ、フーラが言わなかったら多分俺が言っただろう」

でかかった言葉はフーラと同じような内容で、ソイドが感謝しこそすれ怒る謂れはなかった。何故ならある決定的な一言を滑らそうとしていたからだだった。

「それにしても、ネールって言ったっけあの子、あの事知らないのかな、知っていたらあんな事…ごめん、ソイドにはつらい話だったよね」

「気にするな。それよりフーラから見てあいつはどうだ」

誰の事を言っているのかすぐに分かったフーラはしばし考える。その顔はギルド職員の顔ではなく、冒険者の顔。

「戦っている姿を見たことないから憶測だけど、十五人の中である学園組四人が別格ね、でも現段階では、四人パーティーでムーアエリア四十階つてとこかしらね、最も良いコミュニティに入れば、同行者しだいでウォールエリアはさすがに無理だけど、ヒートエリアぐらいなら一週間もあればいけそうだし短期間で強くなるけど、彼女達の目的を果たすには到底無理ね」

これは私情が入っていない客観的な意見で、どのコミュニティに入っても、どんなに強くなっても、どう足掻いても彼女たちの願い

を叶えるのは無理な話である。何故ならある出来事が起こってから、トップクラスの冒険者達の大半は上を目指そうとしない。理由は簡単で死にたくないからだ。

「現実を分からせれば、自分の無力さを知るだろう」

「……ってまさか」

呼び止める声を見殺し、ソイドは講習室に向かった。

第四話『講習2』（後書き）

感想等募集中です。

次の更新はたぶん一週間以内には投稿できるかなと思います。

第五話『講習3』

「お姉ちゃん、やっぱり何かあったんですね…皆さんどう思います？」

ネールが思案気な顔をし、鬼華とガルドの顔を見渡しそう問う。

お姉ちゃんのことを聞いても誰も教えてくれなかった。親も友達も知人も。鬼姫ちゃんと会った時にも聞いたが、『すまない、我は知らぬ』と言われ、天空十二神である父や母や兄等に聞いて調べてくれるとも言っていたが、私の親と同じで、硬く口を閉ざしているらしい。そして今日会ったフリーラさんの一言。自分勝手なのは百も承知なんです。周りの人が冒険者になるといった時、反対し悲しそうに顔をしていた事も、自分の我儘で強引にここに来た事も。それでもお姉ちゃんの行方を知りたかった。でも、今日言われた言葉『貴方を救うためにどの位死者を出したか』と言う言葉。ねえ、お姉ちゃん、何があったんですか。

「俺のフィアンセには悲しい顔を似合わない、あの能無し試験管め、『一階のソイド』と言われる事だけある屑だったな」

ネールの肩に気安く手を掛けたのは四人の内の最後の一人、クラント・カーヴァル。ヒューマン族で金髪のロン毛にキリッとした二重瞼の眼、モデル顔負けの長身スタイル。現天空十二神の一人が居るカーヴァル家の三男で、その美貌から女なら誰でも自分になびくと思っている節があり、甘やかされたため自分より弱いと思う者に容赦無く、権力に弱い。その二面性を上手に使い、同じく天空十二神の一人が居る、アルスタイン家の三人姉妹の次女ネールとつい一週間ほど前に許婚関係になったばかりだが、ネールにはひどく嫌わ

れている。

又、一階のソイドというのはソイドの蔑称でソイドがムーアエリア一階の依頼しかない事からそう言われている。

クランツさんには困ったものです、論点が違いますしおそらくソイドさんは。

「がはは、おそらくそいつは違うぞ。俺様様でもビビったわい、こりや戦闘演習が楽しみだ」

「余りの殺気に我も寒気がしもうした。これは戦闘演習が楽しみだわ」

既に講習など頭の先に無く、早くも講習の後に行われる戦闘演習に目を向けている鬼華とガラドの戦闘狂二人が、ネールの心の中を代弁するように言い、クランツを押しつける形で割り込む。この二人もカーヴアルの事が嫌いで、親の意向で渋々パーティーに入れている。

「やはり、そう思いますよね。おそらく二人とも事件について何か知っている事でしょう。ですが、話してくれるとは思えません。悪印象を持たれてしまいましたから」

口ではそう言っているもののネールは全く悲観していなかった。何故なら策があるからだ、今までの話してくれらるまで待つより早くうまくいけば数時間後に真相が分かる…そんな策が。それにはネール一人では無理で、鬼華やガードの力が必要。ネールは真剣な表情で二人を見るが。

「がはは分かっているってネールの譲ちゃん」

「我也分かっております。どれほどネール殿が姉殿の事を心配しているのか分かっているゆえ…全身全霊協力しまするわ」

「もちろん俺も手伝うぜ。報酬はどうしようかな。デートがいいか…それとも」

二人は言われなくても分かっていた。それから克蘭ツは置いていて三人は作戦について話し合う。

奇しくも同じ時間、同じ選択で正反対の結果を求める両組の姿があった。

「まず、冒険者になるにあたり覚えておくことが一つある。それは何だ？ネール」

ソイド達が教室に入り、講習会が再開し、ネールに質問する。それは当てつけかと周りの人物は思ったが単純に名前を覚えているのがネールしかいなかったのが正直な話である。

「知識ですか？」

戦闘演習の事で頭がいっぱいなネールは、あまり考えず思った事を口にする。それを咎めたりはせず、席番号を言い違う人に答えさせたが、どれもソイドが思っている答えと違っていた。

「全員不正解だな。知識ならこの講習会で教える分だけでも充分で、全部忘れたとしてもコミュニティの先輩達により良い事を教えて貰

える。仮に自分達でコミュニティを作るなら売ってる本でも充分だ。戦闘に関しては嫌でも慣れる…出なければ死ぬ。仲間に関してはその運と情報分析だ。誘われたコミュニティに入る前のある程度情報を仕入れ自分にあつたコミュニティに入るのが一番の得策で後は運だ。自分達で作るなら戦闘演習を見学し直接スカウトしろ、それでもはずれを引いたら運が悪いが目が腐っていた事にでもしておけ、そんなに慌てる必要もない。肝心な事は引き際を見極める事だ。冒険者の多くが引き際の見極めを誤り死に至っている。仲間が何とのおつと危険を感じたら逃げる。特に50階に行き、ムーアエリアボスが居たらすぐ逃げる。勘違いする馬鹿が多い、ムーアエリア死亡件数の約四割がそれにあたる。上のエリアに確実に行きたかったら、ギルドにエリアボス討伐依頼を出すか、お金がなければ月一回のギルドが出す同様の依頼が出るまで待つ」

そこで一旦ソイドは言葉を区切り、周りを見るが誰も彼も聞いちゃおらずある者は上の空、ある者は聞いているふりをしてうんうんと頷くが隠れて寝ているもの、いびきをかいて豪快に寝ているもの（ガルド）等々。

大切な事は教えた、後は何処で死んでも俺には関係ない。ソイドはそう考え次の話題に移る事にした。

第五話『講習3』（後書き）

感想誤字報告等絶賛募集中です。

次話は講習の続きで、その次の話で戦闘演習に移りたいと思います。

第六話『講習4』

「知っていると思うが、戦い方は大きく分けると三つあり、闘気を操り敵を倒す職、マナを操り魔法を使って倒す職、両方を用い倒す職。前二つは一点特化型、後者はバランス型とも呼ばれる。どれに適正があるか知りたかったら、ギルドに言えば測定器を貸してくれる。他にも特殊なものがあるが、そいつらは家でできつちりと教えて貰っているだろうし割合させて貰って個別の説明に移る。まず闘気についてだが、基本となるのは三つ『力气』、主に前衛職が扱う気で、力が増大する気。『速気』、主に後衛職であるアーチャーや、アサシンなどの者が使う気で、速さが増す気。『技気』、畏や宝箱の構造から解錠、敵の察知、シーフやトレジャーハンター等が使う気で、自分の意思を持たせる気：闘気を使うやつは常識的な事だがここまで分かったか？」

ソイドはやや殺気を込めて全員顔を見渡す。寝てた者はビツクと起き、しきりにうんうんと振り子の様に頷き、考え事をしていた者は何事かとこちらを振り向き、それにも関係なくぐうぐう寝ている奴もいる。

「言っておくが、もう審査の対象に入っているんだ。聞かない気がないならそれでもいいが、内申点は言わずもがな最悪になっているだろうな」

隣のフーラは意味ありげな笑みで、新規冒険者達を青くさせ、学園生達は血相かいてガルドを起こしにかかり、全員が聞く体制に入ったのを確認するとソイドは説明を再開する。

「魔法職はマナには色があり、それを取り込み、具現化する者で、基本系統は五つ、火水土風木。それぞれのマナの増減は土地によって違うが、大抵は存在する。魔法職の者は基本系統なら全部使えるが、必ず得意不得意がある。これは闘気にも言える事でさっき言った測定器で調べられる」

ソイドは周りをちらりと見る。全員若干血走った眼で真剣に聞いている。さっきのが聞いたな。無言でフーラと目を合わせ、感謝の意を乗せて、小さく頷く。聞いてくれなくてもいいが、聞いてくれるにこした事はない、それにソイドだけではここまで聞かせることは無理で、フーラのアシストがあつてこそだった。

「次にエンドレス内の事についての説明だ。冒険者を志す者なら誰でも知っていると思うが、五階毎にモンスターは変わり、まず新規冒険者、最初の壁は六階クリアだ。一ヶ月未満の新規冒険者死亡件数の約半数が六階で亡くなる。自分が敵わないと思ったら逃げろ、自分が勝てると感じたら、強い者を伴っていけ、そうすればまず死なないだろう。エンドレス内には、行けば分かると思うが、転移装置が存在し一、六、十一、十七と五階毎に設置されており、それが自分の最高階なら帰還後自動的に、これから渡すERエンドレスリングに記載される。尚転送装置で帰還しなければ記載されないので注意しろ」

ソイドは教壇机からリングが入った袋を手に持ち。

「取りに來い」

取りに來た順に渡す。好戦的な学園生達だ。ソイドは手渡す時に向けられた視線に内心苦笑を洩らす。学園生達で最初に來たネールは純粹で意思がある目を、続いて鬼華とガルドは好戦的な目を、カークは憎々しげな目をソイドに向けていたのである。まあソイ

ドはどこ吹く風で反応を示さずにリングを渡したのだが。

リングは横幅六？の腕輪型で、特殊な素材を使用し縦幅半径30センチほど伸び、腕にフィットする。腕輪の中心に赤と黒の二つのボタンがある。全員にいき渡り座つたのを確認すると、リングの説明に移った。

「使いたい時はまず赤色のボタンを押す」

ソイドは自身が装着しているリングの赤色のボタンを押す。するとリングが光り十五型テレビほどの画面が飛び出し。

「現れた画面は他人に見られないよう反対側から見えず、赤ボタンを押し続ければ縮小もできる。戻す時はもう一回赤ボタンを押せ。画面の中は

個人情報

パーティー情報

パーティー申請

クエスト情報

EM (Early mail)

の五項目が現れる。個人情報は、名前、年齢、性別、出身地、職、所属コミュニティ、最高到達階等のプロフィールが表示される。職業の所は空欄で、タッチパネル方式になっているから、職業ボタンを押し自分になりたい職業を記入しろ。パーティー情報は仲間の名前と職業が表示し、特定の人物の名前を押せばより詳細な情報が見える。又パーティーリーダーは特定人物の脱退もここでできる。パーティー申請は、押せばコミュニティのメンバーが表示され、特定の人物を誘える。クエスト情報はギルドで申請したクエストの情報が見れる。EMは、手紙の電送番だと思ってくれていい、押せば、来た手紙を見れる受信覧、手紙を書く送信の二つが現れ、送信を押

すと、パーティー申請と同じくコミュニティのメンバーが表示され、送りたい人物の名前を押し、書きたい言葉を書き送信する。「画面を切りたい時は黒色のボタンを…やめろっ！」

説明の方に注意がいつていて油断していたソイドの、普段の冷静さを失った怒声が聞こえるが、既に遅くそのまま放置していた画面の個人情報部分をフーラが押し。

「えっ…むっぐ」

素の顔になり間抜けな声を出したフーラの口をソイドは塞ぎ、素早く画面を消し。

「十五分後演習場に集合しろ」

足早に教室を後にした。

第六話『講習4』（後書き）

すいません、ようやく次話戦闘パートに入ります。

少し遅くなるかもしれませんが、できるだけ一週間以内を目指して頑張ります。

第七話『戦闘演習1』（前書き）

あらすじが長かったので、変えてみました。
それではどうぞ。

第七話 『戦闘演習1』

「どうして」

画面を押ししたのは興味本位ではなかった。ソイドの正体は知っているし、…ではなかったが、ネールの姉ホーネリアの起こした一つの奇跡についての、天空十二神を含め極一部にしか知らない詳細は知っていた。だが知らない事も多数ある。ソイドが帰って来たと同時に名前を変え、あんな生気の無い表情ではなつた理由、ソイドが言った通り本当にマシーリのエリアボスにやられ、帰還してきたのかを。そして…それ以来起こつた不可解な出来事とソイドのムーア一階依頼。それを知るために、仲間や両親に猛反対を受けたが天空十二神を辞め、ギルド職員となつて色々世話を焼き、探っていたが分からず、本来故意に他人の個人情報を見るのは天空十二神でも処罰の対象となり、勝手に触るなど言語道断。厳罰を覚悟してでも、フーラは知りたかつた…だつて彼女は…。

そういう意味で二人は似ているのかもしれない、そこに居るか居ないかの違いはあつたが。

頭の中がごちゃまぜで、色々な意味を込めた、フーラの『どうして』の言葉。その大半を理解していたソイドは軽く溜息をつき。

「本当はお前を巻き込むつもりはなかった。だからお前に嘘を教えた。あれを知られたからには、本当の事を教えなかつたら、お前は納得せず、どんな事をしてでも、調べるだろ？」

ソイドの問いに、フーラは、ソイドの目を見てゆっくりと頷いた。

「これを知ってるのは十人に満たない。知ったら、もう後戻りはできない。それでもいいのか？」

「知りたい…知りたいよ。もう知らなくて苦しい思いをするのは嫌だから」

それはフーラの心の中にあつた叫び。内容が内容だけにあまり言いたくなかったがソイドは目を瞑り、数秒、数十秒と目を閉じたまま何かを考え、ゆっくりと目を開けた。そこにはもう迷いは無く。

「今日の夜九時、…まで来てくれ。全てはそこで話す」

それから、ソイドは皮のプレートを着け皮のズボンに着替え、そこを出た。

ソイドが六十畳ほどのグラウンドの様な硬い土の演習場についた時には、既に中央に新規冒険者全員が並んでおり、外壁を囲むようにして作られた観客席には多数のコミュニティに所属している人達が、真剣な眼差しで新規冒険者を見つめていた。普段より多いギヤラリーを気にもせず、淡々と歩き、フーラの隣、新規冒険者達の前立つ。新規冒険者達の服装は、ソイドと同じような格好をしていてそれぞれが何らかの刃引きした武器を持っていた。

「これより実技演習を行う。内容は俺と戦ってもらう。全員で戦っても構わないし、個別で戦ってもいい。五分時間を与える、それまでに決めてくれ」

実技演習はそれぞれ講習担当者が内容を決め、ソイドは作戦を聞かないよう観客席の方に歩き、ネール達は囲むようにして作戦会議を行う事にした。

「どっするよ」

「決まってるだろ全員で囲めばちよろいもんよ」

「あの根無しソイドだろ。俺一人でもちよろいぜ」

「へっへっへっ抜け駆け駄目だ。俺らの見せ場が無くなるだろ、さっきの言葉でムカついてんだ皆でぼこぼこにしようぜ」

学園生達を除く人達は全員でソイドを倒す方針を固め、話を進めている中、ネールを目配せし、あらかじめ決めていた、作戦に移る事にした。

実技演習がそれなら手間が省けました。ネールの作戦はソイドと対戦することを想定とした物で、違う演習なら最後にネールが提案する予定であった…どんな事をしてでもソイドと対戦し条件をのませるために。

そして5分が経過し、ソイドは武器を持たずに、新規冒険者が整列した場所より十メートルほど離れた場所で止まり、中間にフーラが立つ。

「これより実技演習を行います、それでは始め！」

声と同時に、前中後衛十一人が一斉に前に進み、ネール達学園生はソイドの戦い方を見るため、後ろに下がった。

第七話『戦闘演習1』（後書き）

すいません、本格的な戦闘は次回からになります。
一週間以内には投稿します。

第八話 『戦闘演習2』

最初にソイドの目の前に来たのは戦士風の男。片手斧を持ち。

「一番目貰った！」

勝ち誇ったかのように、声を張り上げソイドめがけ振り下ろす。が、ソイドに届く事は無くそのままうつ伏せになって倒れた。その間ソイドがした事は、指を弾くのみ。だがただ単に、指を弾いた訳ではなく、そこに、ピンボールほどの大きさの放出系闘気『闘気弾』を載せ、相手の額に当て、脳を揺さぶり気絶させたのである。又放出系闘気は力気の派生型で、ムーアエリア突破時に、第二エリアヒートで行われる中級講習会時に教わる。

一人目が倒れた事により、一瞬冒険者達の足が止まる。それだけでソイドには致命的な隙ができたように映る。まだまだ甘いな…とそんな隙をソイドが見逃すわけはなく。

「八連弾」

ソイドは高速で指を弾く。闘気弾八連続ヴァージョン。狙いは四人の魔術師と奥に居る四人の学園生達。まず四人の魔術師に当たり、先ほどの戦士と同じように気絶する。続いて、闘気弾は数秒もしないうちにネール達の目の前に来るが、先に風のシールドを張り、ネール達に当たる前に消えていった。約一名はシールドを張ってもらえず気絶したが。これで気絶したら全力で冒険者になるのを阻止しただけだな。しかし…とソイドは思う。五分間あげた意味を誰も分かっていないだろうと。

普段のネールならば気付いたであろうが、今は少し冷静さを失っている。目の前に答えがあるからそれも無理からぬことではあるが、それを試験官や見に来たコミュニケーションの面々が見逃すわけもなく、フーラは全員に大幅なマイナス点をつけ、観客者の半数は見る価値は無いと判断し帰路に着いた。

「これで演習を終了とする」

もう一回八連弾を放ち残り三人となった所でソイドは演習終了の合図を出した。

「何故ですか、私達はまだ気絶していませんが？」

と、不服そうに申し立てるネールに、ソイドはため息をつく。

「お前ら何で五分間あげたのか気付かなかったのか？ その顔は気付いてないようだがら言つてやる。五分間で全員が協力し連携するための作戦時間であり、それを評価するための戦闘演習だ。最低でも前衛中衛後衛を分け、攻撃すると思つたんだがな…全然なつて無い、特にネール達学園生、お前等は最悪だ。俺と対戦したいかどうか知らないが、自分達のグループは前に出ないで情報収集とは、良い御身分だ。これがもしダンジョン内だったら他の奴等全員死んでる。そんな奴らに背中を任すコミュニケーションなんて居ると思うか？」

ソイドの言うとおり、コミュニケーションとは仲間であり、絆であり、戦友である。仲間を見捨てる者をコミュニケーションに誘うかどうかと言われれば否である。いるとすれば同じように仲間を駒と扱う最低なコミュニケーション。

ようやくそれに気づいたネールは一瞬にして血の気が失せる。それもそのはず、目先の事を考えすぎるあまり、普段気付く事も気づかず、冒険者失格の烙印を押されたと同意の事をしてしまったからである。後悔しても後の祭り、良いコミュニティに入って早く上に行く…という当初のネールの計画は大きく崩れたのである。しかも上に行く時間が大幅にかかり、困難になるというおまけつきで。

「嵌めましたね」

そこまで気づき、ようやくソイドの意図が分かったネール。彼女が考え付いた通り今回の演習はネール達を嵌める為に行った演習であり、『全員で戦っても構わないし、個別で戦ってもいい』と言えば、ソイドの噂を考えてネール達以外が良い成績をとろうと我先に攻撃しに来るのは目に見えているし、短時間でのソイドから見たネールの性格を鑑みれば、八割の確率で、今回の様に相手の手の内を探るため後ろに下がるのは分かっていた。

全ては冒険者を諦めて貰おうと考えたソイドの作戦であり、成功しても尚感情の読めない無表情でネールを見つめ。

「俺に当たるのは筋違いだ。そう考える時点でお前は冒険者には向いてない。さらに良いコミュニティには入れない、諦める」

と非情なる宣告を突きつけた。

第八話『戦闘演習2』（後書き）

次回更新時に、もう一つの小説の方を一旦下げさせていただこうと思います。

お気に入りにしてくれた方々申し訳ありません。

その分こちらを頑張っていきたいと思います。

今回は第一章の序盤の山場です。一週間以内で出せればなと思います。

第九話『戦闘演習3』（前書き）

すいません、前々からいつていたもう一つの作品を一旦下げさせて
いただきました。

お気に入り登録してくださった方々、楽しみに見てくださった方
々申し訳ありません。再投稿は未定ですが、必ずお知らせしたいと
思います。

その分こちらを頑張りたいと思いますので、宜しく願います。
それではどうぞ。

第九話 『戦闘演習3』

「諦めると思えますか？」

キツと睨めつけるようにネールはソイドを見る。それは子供が反抗期に見せる反発に近かったが、それだけでなくとも諦められるはずはなかった。ネールにとって冒険者になるのは必然であり、姉を見つけることが目的であり、他の事は二の次だった。仲間の命すらも、本来、優しく誰にでも気遣える性格なのだが、姉が行方不明になつてから影を潜めている。

聞いた話と全然違うな。そんなネールの宣言を冷たい目線で聞いていたソイド。実は昔、ネールの事はホーネリアから聞いていて、会う前は幸せになる事を願っていたのだが、今は後悔している、ネールを助けた事を。

「何でお前なんかを助けたんだらうな。こんな事なら…」

それは自然とソイドの口からこぼれ落ちた言葉。それもそうだろう、今日初めて会ったネールと、親交のあったホーネリア。どちらを取ると言われれば、間違い無くホーネリアを取るだろう。それこそ十人いれば十人とも同じ事を思うぐらいに。

その言葉を聞いたネールは、疑惑から確信に変わり、獲物を狙う鷹の様に目つきは鋭くなる。

「やはり姉さんの事を知っていたんですね。でしたら教えてください、い、姉さん何処行っただんですか」

「お前の両親も言ってると思うが、一切教える気はない」

間髪いれずにネールの言葉を拒絶するソイド。

「そうですか。だったらこうしませんか？　これから対決して私達が勝ったら、教えてください」

ガラドと鬼華に目配せし、ネール自身も戦闘態勢に入る。その提案はソイドも願ったりで。

「良いだろう。こちらが勝ったらどうする」

と、ソイドが勝った時の条件も戦闘する前に聞きだす。無論勝った時にこちらの条件が無かったと言わせないためだ。

「冒険者を辞める以外なら何でも良いですよ」

と、前衛ガラド、鬼華、後衛ネールと逆トライアングルな陣形を組み、いつでも戦闘できる隊形になる。

ちらりと横を見て、フーラが居るのを確認する。確認したのには理由があり、ギルド員が見守る条件付きの戦闘で条件を破れば、何らかの制裁が加えられる。

「一ヶ月エンドレスに行く事を禁止する。それでいい」

ソイドが条件を述べた瞬間、条件が成立し。

「ギルド員フーラにより、条件付きAA（adventurer VS adventurer）戦闘を開始します」

フーラの宣言後、最初に動いたのは、ネール達。鬼華が自慢のスピードを生かし地を這うような体制で駆け走り、ソイドの足に狙いを定め、木刀を薙ぐ。目的は機動力を削ぐため。短時間の戦闘演習で鬼華から見たソイドの特徴は、速力が高い事。最初にソイドの前に出た戦士風の男の間合いを見切り、闘気弾で気絶しなかった時のために、男が振り下ろした斧の範囲外、一步ほど後ろに下がったのを見てそう思ったのである。それ以降一步も動かなかったので、鬼華以外は誰も気付かなかった。逆に速さに自信がある鬼華だからこそ気付いたと言える。

確かに速いであるが、私に敵う筈が無い。人一倍速力に自信がある鬼華はそう思った。しかし上には上がいる。

さすがは鬼速と呼ばれる鬼神家、だがまだまだ甘い。ソイドは鬼華の狙いを看破し、薙ぐほんの少し前に、前方に飛び、右手で鬼華の左肩を掴み、スピードを利用して回転膝蹴りを頭部にくらわす。鈍い衝撃音とともに、鬼華の意識が途絶える。

「がっはあはあはあ、俺様様の攻撃をくらえ、豪力斧！」

鬼華を倒す時死角となつて見えない絶妙なタイミングでガラドはジャンプし、力を限界まで出し、新米冒険者で人間族なら両手を使っても扱えないであろう、巨大な斧を全体重を載せて一回転した後振り下ろす。遠心力も加えられ、刃止めされているとはいえず、くれば、良くて骨の二、三本、当たり所が悪ければ死ぬ。その位の威力の攻撃であるが、ソイドからしてみれば、『なかなかいい攻撃だ』ぐらいで、たいして焦った様子もなければ、顔色一つ変えてない。

唯、眼前に迫りくる斧に手を添えるように上げただけ。その手が
今まさに斧に触れようとしていた。

第九話 『戦闘演習3』 (後書き)

後二話程続きそうです。

第十話 『戦闘演習4』

「なんだとお！」

いつもの豪胆な笑いは無くガラドは驚愕な顔をしていた。ガラドは見た目通りの力自慢で、力だけなら学園内ではナンバー1を誇る。冒険者になってもそれなりにいけるとガラドは思っていた。その自信がもろくも崩れ去った。目の前のソイドにより。

ソイドはいとも簡単に斧を掴み、何事もなかったかのように、平然としていた。普通だったら原形を止めないほど、骨がぐちゃぐちゃになる。その位の威力だったのにも拘らず。

さらに、300キロはあろうガルドと200キロほどの斧をもちあげたまま。

「お前程度の冒険者はごろごろいる。出直してこい」

ソイドは手を離し、空いていた左手でアップパーの様に鳩尾を殴り上げる。力気により増加された拳を受けたガルドは、吹っ飛び。体制を整えられないまま観客席に激突した。

「がはあ」

コンクリートでできた観客席が、ガルドが衝突したと同時にクレーターの様に割れる。その瓦礫に埋もれ、ガルドは痙攣したまま意識失った。

戦闘が始まってから5分と経っておらず、早くも大勢は決したかのように思われた。少なくとも周りには。だが、残っている二人にはそんな驕りは一切ない、優勢と思われるソイドでも。

仲間を捨て駒にして魔術を完成させる、そこまで最低だとは思わなかった。もし鬼華やガラドにシールド魔法や防御力増加魔法を使っていたのなら、気絶せずに済んだだろう。先ほど忠告したはずなのにも拘わらず同じように仲間を見捨てる。今回の場合、相手の了承があったとしてもソイドにしてみれば許せる事ではなかった。

ネールの方を見れば既に攻撃魔法の詠唱が後半部に差し掛かり、その規模からして強力なものだと分かる。魔術師と前衛職が戦闘した場合、大部分が前衛職が勝つ。理由は簡単で、魔術師が魔法を使う前に、前衛職が倒してしまうからである。高位の魔術師なら短縮魔法や無詠唱魔法を使えるが、大抵は初言句（炎よ、水よ、風よ等）、事象句と呼ばれるほどのぐらいの規模かどういう形にするのか…というイメージを述べる句で、これが一番長い。最後は対象句で、どういふ対象に魔法を当てるのかを述べる句。この三句を述べなければ魔法は発生しない。

だが魔法を発生すれば、形勢は逆転し、魔法使いが圧倒的有利にある。それは魔術の耐性が無いからだ。両方とも持ち合わせているものだったら、何とかなるが闘気しか使えない場合、魔法への抵抗力が無く、どんなに弱い魔法でも大ダメージになる可能性が高い。それは、魔法使いにも言えて、純粹な魔術師には闘気の体制は無いが防御魔法があるだけましである。最もそれは中級者までの話で高位者には防ぐ手だけはある…今のソイドの様に。

ネールの行動に対しソイドは切れていた。こんな激しい感情がまだ自分にあっただのかと驚く位に。

一方ネールは勝利を確信していた。

「…敵に向けて発射せよ」

水でできた竜のときき出で立ちをした者がネールの後方に突如出現し、咆哮と共に幾千物、五十センチ程の尖った形をした竜の鱗がソイドに向けて発射される。それはネールが自信を持っている魔法であり、水魔法の中で血族にしか使えない魔法。

何故なら、竜はイメージでは無く加護精獣で、アルスタイン家しか使えない。それは血族刻印が関係している。

血族刻印とは、産まれた時から存在する加護の証で、背中の頸部辺りに紋様が現れ、現天空十二神の中で血族刻印を持っていない人はおらず、歴代の中でも、非血族刻印者で天空十二神まで上り詰めたものは数える程しかない。現在確認されている刻印の数は六十八。その中で有名所の刻印は、アルスタイン家の水竜「リーヴァ」、鬼神家の鬼神「坐武麓」、アルベルト家の雷獣「ボルツ」、カーヴアル家の女神「アテルナ」などがある。刻印の模様が鮮やかになればなるほど、加護が強いとされ、反対に加護が弱い者は、ぼやけていたりみすばらしく見えたりする。

刻印の加護があれば一部のステータスが大幅に増加し、たとえばネールが刻印いしているリーヴァなら、治癒と水魔法の強化であり、何事も問題なく過ごせたのは加護のおかげである。そう、ネールは十年に一人と言われるほど加護が強く、普通の刻印持ちなら五分もの長い詠唱で短縮化や無詠唱化できない刻印魔法を三分に縮めるほどに。

圧倒的なリーヴァの迫力に普通なら驚く事だが、ソイドは平然と

している。何故ならソイドは知っていたからだ、ネールより強い加護を持った者がいた事を。

そういえば同じような事があったな。迫りくる竜の鱗を前に昔の事を思い出し、ソイドは自嘲気味笑い…呟く。

「レーニャ」

過去に思いを馳せながら、ソイドは自身の勝利を確信した。

第十一話 『戦闘演習5』

（四年前）

『奇跡の日』と称され、二年後の『大変革』と呼ばれる、普段は五年に一人変わるかわわらないかの天空十二神に六人も的人物達が変わった。その人物達は四年前新規冒険者で講習会に参加していて、最後の演習内容は、二つに分かれての集団戦闘だった。

ランダムに別けられ、ソイドとホーネリアは別々に分かれた。ネール達のように短絡的な攻めで、次々と戦闘不能になる事は無く、両者とも、魔法使いが、防御魔法を使い、その間前衛中衛が守りを固め、相手の隙を見つけるとそこを突く、本来パーティーで行われる基本的な陣形であり、仲間の命を第一にした戦い方。

さらにソイドチームは、ソイドの俊足に闘気を織り交ぜた攻め、今回の最年少ソハネ・ジルバーグの転移術、カミュ・シーベルトの堅固な防御魔法。ホーネリアチームは、まずホーネリアの破壊力のある魔法に刻印防御魔法。ガラハルドの全てを揺るがす、破壊力のある攻撃、ジヨシユネ・ワルサーの針の穴を突くような、闘気と魔法を使った銃裁き。ここ何十年を見ても、一番ハイレベルな戦闘演習で、大将のソイドとホーネリアが指示を出し、攻防が入れ替わる。特に六人の新規冒険者にコミュニテイの面々はくぎづけとなる。それもそのはず、ソイド達の実力は既に新規冒険者の枠を超え、中の上クラスの冒険者と同等レベルで、しかも全員が十代で発展途上。何処のコミュニテイも欲しがるのは当たり前だった。

戦いは長期化していたが、一人また一人と減っていき、両チームとも五人となった所で、このままでは埒があかないと感じた大将の

二人は、チームメイトを引き下がらせ大将戦に持ち込む。

「さすがは…ね、でも私負けないから」

「俺こそ負けねえよ、ホーネリア」

両者睨み合った後、不意に笑いあい、そして口を開く。

「…リーヴァ・ホルティンク・ニードル…」

「…レーニャ」

本来ならソイドが速攻すれば決まっていたであろう…ホーネリアがネールと同じ魔法を一分に縮め、倍近い攻撃力を有していたのだが、それでも十分な時間だった。にもかかわらずソイドは待った。純粹にどちらが上かソイド自身も確かめたかったからである。

そして……。

結果として演習は引き分けに終わり、その一週間後、後世にまで語り継がれるであろう伝説のコミュニティが誕生した。

時は現代に戻り、ソイドが呟くと同時に闘気の渦が自信を中心に巻き起こり、旋風となり周囲に暴風のように撒き散らす。放出系力気技『レーニャ』、力気を爆発的に放出する事により使用者の中心に闘気の渦が巻き起こり、両手を広げ、手に闘気を集め放出する事により、台風のように周囲に吹き荒れる。

両者の技がぶつかり合い…膠着する間もなくネールの魔法が吹き

飛ばされる。四年前よりも数段強いソイドのレーニヤとホーネリアの魔法よりも劣るネールの刻印魔法。どっちが勝つかは目に見えていた。

その余波でネールはふっ飛び、二回転三回転と地面にバウンドした後、壁に激突する。意識は失わなかったものの、華奢なネールは骨の何本かは折れていて、息をするのにも苦しかった。絶対に負けるわけにはいきません。ネールは横たわった体に鞭を打ち、動かすごとに激痛が奔るのにも歯を食いしばり耐え、ふらふらと立ち上がり杖で体を支える。立ち上がって勝てるはずがないのにも拘わらずに。理性で立ち上がったわけではなく、明確な意思や目的のため、根性で立ち上がった。そこにあるのは、冷静さではなく本能。

立ち上がったネールをただじつとソイドは見ていた。

「根性だけは認めてやる。だがそれだけで、何でもできると思うな、自身の実力を知れ。言っても聞かないだろうがネール、お前は静かに暮らせ。それが…」

「あああああ！」

「聞いてないか…いいだろうう引導を渡してやる」

ネールが行ったのは命削魔法。文字通り命を削り、体を瞬間に治癒し、魔力の密度で周りの空気が歪む。これがネールの奥の手、自身の魔力を三倍近く増加させるが、徐々に生命力が奪われ、理性もなくなる。言わば戦闘狂状態になり5分も維持すれば、一週間はベットの中央だ。

ソイドは無視された事についてはあまり気にしていなかったが、

命削魔法を使った事については解せなかった。冒険者の間では命削魔法は敵味方問わず襲う事や、その後の処理などから忌み嫌われ、暗黙の了解で禁止されていた。学校でも当然その事は教えられネールも知っていた。だがネールは使った、自分の信念のために。しかし周りから見たら、そんな危ない人間はコミュニティに入れないのは当然で、今日の事は瞬く間に噂として広まり、コミュニティ入りはもはや絶望的だった。逆にそんなことも考えられないほどネールは追い詰められていた。

止めに入ろうと動いたフリーラを左手で制し、ソイドが右手を十字に切る。

「レージュ」

ネールが魔法を放つより早く技を放ち、ネールの意識を刈り取った。

「勝者ソイド」

高々にフリーラは勝者の名前を呼び、ソイドはふうーと息を吐き、新規冒険者講習会は幕を閉じた。

第十一話『戦闘演習5』（後書き）

やっと講習会終わりました。

次回新キャラ登場します。それとちょこっとだけ、エンドレスに入ります。

第十二話『エンドレス』（前書き）

何とか年内に更新できました。

いつもより少し少なくてすいませんですけど、それではどうぞ

第十二話『エンドレス』

ここ最初の都市と言われるムーアには五つのエリアが存在する。

北東

学園都市で、十階建てで横幅一キロはあろう巨大な学園、寮や地下ダンジョン等がある。

北西

富豪街と呼ばれ、数多くの豪邸が建ち並び、上級冒険者達の別荘や、家族達が住んでいる家、高級宿があり、極少数ではあるが本人が住んでいる場合もある。

南西

商人や農民、職人達等普通の非冒険者達達の住居や中級〜新規冒険者の宿や家がある。

南東

俗に言うスラム街や隔離地域で夢に破れた者や浮浪者、社会不適合者が住み、ソイドも住んでいる場所。一部外に出てきているが、南東部分の詳細はこの街の誰も知らない。

中央

エンドレスがあり、その周りを武器屋、防具屋、道具屋等、冒険者関連の商店が軒を連ね少し離れた所にギルド、新規冒険者講習場、酒場、飲食店、市場等がある。

時刻は午後四時（時間は地球と変わらない）、演習場で後処理を済ませたソイドは、ギルドへ行き本来の依頼『スライム討伐依頼』を受け、商店等によらずエンドレスに向かった。エンドレスの前には衛兵二人があり、一般人、特に子供が入らないよう見張っていた。エンドレスの外見は半径五十mほどの円形、例えて言うならピサの斜塔の様な形。それが遙か高くまで聳え立っていた。入口はギルドと同じような作りになっている。

「冒険者リングを見せてください」

いつも通り一語一句間違えない衛兵の言葉に、無言でソイドはリングを見せた。

「確認しました。無事の帰還をお祈りします」

その言葉とともに、ソイドは中に入った。

（エンドレス内部）

エンドレス内部は外見よりかなり大きく、一空間五十畳ほどで扉で一つ一つ区切られている。一階の部屋数は四つと少なく罫は無いが階数が増えるにつれ徐々に部屋数が増え複雑化し当然トラップがある。普通そんな構造だったら倒れるが、エンドレス内部は空間増加魔法が使われているらしく、本来の形は外見通りであった。

ソイドの目の前には五十センチほどの、緑色のスライムがふよふ

よと行ったり来たりと移動していた。

「…すまない」

ぼそりと呟き、ソイドは闘気弾をスライムに当て、そのスライムは破裂する。その残骸の一部を特殊な瓶に入れる。一階では一部屋につき一匹で大多数はスライム、約一割程度の確率で身長1mほど土色の皮膚にとげとげの根棒と兜を持ったコブリン、身長30センチほど、鋭利な刃に紫青の翼をもったバット達が現れる。

他の部屋を回り、合計三回スライムを倒した後、二階に上がる『昇階の間』と呼ばれる階段がある部屋に移動した。そこは何処の階でも共通でモンスターが現れない。階段の右横には1mの台座の上半径50センチほどの大きな水晶があり、これが転移装置と呼ばれるものでリングを着けた手で触れると、入口の部屋まで転送される。

ソイドはそこである人物を待っていた様で、壁にもたれ掛かるようにして座る。時々二階に上がる人が来て、ソイドの事を軽蔑、嘲笑、訝しげに見ていたが無視し待つ事三十分、待ち人が扉を開いた。

その人物は、人間族で百五十センチそこそこ低く、膝まである洗練された美しい黒髪に可愛らしい大きな蒼い瞳、ネイルと同じ学園のローブを着ている。眉は少し吊り上っていて、怒っているようだった。

名はソハネ・ジルバーグと呼ばれている者だった。

第十二話『エンドレス』（後書き）

これで今年の更新は終わりです。
来年もよろしくお願ひします。

第十三話 『転移の巫女』

「遅い」

ソハネはリスの様に小さな唇を少し尖らせ非難の視線をソイドに向ける。ソイドから遅れるから、終わったら連絡するとのメールをもらったが、自分との約束が蔑ろにされて嫌だった。例え原因が分かっていたとしても。

「悪いな」

ふてくされていたソハネの姿に微笑ましく感じ、これ以上へそを曲げられてはあれなので頬が緩むのをなんとか堪えソイドは頭を撫でた。ネイルが見たら別人かと疑うぐらいの優しげな表情で。

「子供じゃない」

口ではそう言っている者の、ソハネは頬を朱に染め、目を細め嬉しそうな表情をしていた。それからソイドは今日あった出来事を話した。

「実力もないくせに大ほら吹き」

それがソハネの感想だった。ソハネはとある事情で一年休学しているため、一つ年が違うが、ネイル達と同じ学年の同じクラス。十五歳クラスのトップ五に入っているが、実力はネイル達と比べ物にならないぐらい強い。それもそのはずソハネは学生の域を超え天空十二神の一人で『転移の巫女』、『本偽多重分身』と呼ばれている。

ちなみにトップ五の順位は、一位ソハネ、二位ネール、三位鬼華、四位ガラド、五位クライツとなっている。

「約束を破る事無いと思うが、ソー一つ頼まれてくれないか」

ソーとはソイドがつけたソハネの呼び名。AA戦で一ヶ月間エンドレスに潜るのを禁止されたネール達。違反すれば無期限停止処分もあるので、それを破る事は無いだろうとソイドは思っているが問題はその後。ネールの行動を鑑みれば一ヶ月後即エンドレスに入るのには目に見えているし、そのまま死ぬのも目に見えている。普通の冒険者なら勝手に死んでも自分の責任で知った事ではないとソイドは思っているが、ネールは例外で死なすわけにはいかなかった。どんな事をしてでも。だからその策をソイドはソハネに伝えようとしたが。

「分かってる。私が学校で戦う。そして完膚なきまでに叩きつぶす」

既にソハネは分かっているらしく軽く頷き、座っているソイドの上に、体をよりかかる様に座った。

「ご褒美先」

「仕方ないな」

ソイドは苦笑し、目下にあるソハネの頭を優しく撫でる。ソハネが満足するまでその体制は続き、時々この部屋に来る冒険者達はソイドの方を見て、顔を青ざめそそくさと上の階へと進んだ。理由はソハネの機嫌を損ねると大変な事になると知っていたからだ。もう一つの呼び名『気まぐれ転送娘』をソハネに聞こえないよう小さな声で呟きながら。

数十分その状態が続き満足したのかソイドから離れる。

「まだ駄目？」

何回も何十回もソハネが言った台詞。そしてソイドが返す言葉は決まっていた。

「すまないな。今は無理だが必ず戻って行くと約束する」

「ん」

その返答に満足したのか小さく頷き、ソイドの背後に回る。

「そろそろ時間。みんな待ってる。おんぶ」

「子供じゃないのでは無かったのか？」

ソイドは少し意地悪する様に片目を細めて、ソハネの方に顔だけ向ける。

「ん」

ソハネは瞳を潤ませ眉を寄せ唇を前に出し上目遣いでソイドを見る。ソハネのこの顔を見ると、ソイドは断れなかった。

しょうが無いな。ソイドはため息を一つ吐き屈み、手を後ろに伸ばした。

「優しいソイド。大好き」

ソハネは満面の笑みでソイドに覆いかぶさり、二人は目的の場所まで移動を始めた。

第十四話『会議』

エンドレスを出たソイドとソハネ。時刻は午後六時、毎日変わらず夕方と夜の境界線の様にゆっくり闇が支配する中、二人の影が重なっている。そう、おんぶは継続中で、ソイドがソハネを背負っていた。

「そろそろ降りろ」

と、ソイドの何度目かの問いかけにも。

「やだ」

ソハネはギュツとソイドの襟部分を掴んで離さない。普段のソハネは甘えん坊な性格では無く、ポーカーフェイスを崩さない、冷静さと節度をもった人物で学校では『冷徹人形』などと影では呼ばれている。だがソイドの前では百八十度性格が変わり甘えん坊になる。それでも今日みたいに人がいるところでは、こんなにくつつかない。

だが今日は幾分事情が違う、少なくともネールの心情では。理由は、学園が休みで約一週間ぶりに朝から会う約束をし、気分良く家を出ようとした時リングが震える。リングが震えるのはメールが来たこと知らせる証。内容は『ネールが新規冒険者になるので講習依頼を受けた。すまないが遅れるので行ける時間になったら又メールする。』という物だった。ネール達が教室で冒険者になると言っていたのを思い出し、ソイドの理由を知っているソハネは仕方ないとは思いつつも、ネール達に若干殺意を抱きつつ、苛々した時間を過ごし、発せられた冷氣から人は寄り付かなかった。そんな感じでしょう

やくソイドに会えた時、籠が外れて今も暴走中だった。

やれやれ。ソイドは内心苦笑しつつ、非が自分にあるのであまり強くは出れなかった。それに、ソハネには絶対に言えない事だが、心が温かくなる感じがしていた。あの事件で凍てついた心を溶かす様に。

その後夕食を取った後（その時はさすがに離れていたが、席は向かいじゃなく隣に座っていた）、約束の場所ギルド所有の会議場の前に来た。建物はマシーリから発見され、開発した鉄筋コンクリート式の三階建てで部屋数は一階十六、二階八、三階四の全部で二十八。一階は小会議室で六人ほどが座れるスペースに折りたたみ椅子と机、二階は中会議室で十二人、三階は大会議場で二十四人ほどが座れる空間がある。

ガラス張りの片開きの扉の取っ手を押し、中に入り正面のホテルのフロントの様な作りの所に居る受付嬢に向かって歩く。ちなみにソハネはソイドの背中で寝息を立てている。

「ソイドとソハネだ、忘れ去られた彼方は何号室だ」

「少々お待ちください」

受付嬢は名簿票を見て、題名と名前が合っているか確認しチェックを入れる。

「三階三〇〇一号室です。既に皆さんお待ちしております」

「ありがとうございます」

ソイドは礼を言い、横にある階段を上り、三〇〇一号室の前に立つ。扉に鍵は無く、代わりに、すぐ横に黒い台座がある。ソイドはソハネを起こし、二人は台座の上にリングを触れさせると、赤くなっていたドアノブの中心が青に変わる。ソイドはドアノブを回し中に入った。

中には既にフーラを含め二十人もの人達が居て、一斉にソイドの方を向いた。

「ちよつとソイド、幾ら義理妹さんと仲がいいからって、名立たる皆様の前でそれは無いんじゃないの」

腕に抱きついているソハネを見て、フーラの非難めいてたが、緊張しているのが分かる、縮こまった上擦り声から始まり、会議が終わったのが三時間後だった。

それからソイドは途中で寝てしまったソハネを家まで届け帰路に着く。ようやく長かった一日が終わりを告げた。

第十四話『会議』（後書き）

ようやく第一章序盤が終了しました。

中盤戦は主にネール視点です。分かっている人がいるかと思いますが、学園編です。

ここでは、ダンジョンを出そうかなどと思っていたり…。

それではこれからも宜しくお願いします。

第十五話『夢』

私は今夢を見ている。夢と分かるのは何度も見ている光景だから。

（一年前）

「お姉ちゃん待って」

ホーネリアが帰りの途につこうと玄関の飛び炉に手を掛けた時、ネールが息を切らして声をかける。

「どうしたのネール。そんなに慌てちゃって」

ホーネリアは振り返り、優しげな笑顔をネールに向ける。それはネールの大好きな表情で、思わず顔がふやけるが、すぐに引き締める。

「そんな顔しても騙されません。全く良い年こいて、妹に挨拶もなしで戻られるのですか？」

「あははあ、相変わらず手厳しいなネールちゃんわ」

自分の思惑がばれて思わず苦笑いのホーネリア。ネールが言った通り会わずに去ろうとしていた。会うのが辛いからだ、これから自分がする成功率が一厘にも満たない賭けに自分の命を掛ける事を。その事をネールに悟らせる事が一番怖く、最後にあつたらどんな顔をしていいか分からなかった。きつと泣いてしまうから、これが最後に見る妹の姿と思うと。どうにか声が震えなかった事にほっとす

るホーネリア。

「どうしたんですか姉さん。まじまじと私を見ちゃって」

ネールは不思議そうな顔をする。これまで何回も行ったりを繰り返してきたホーネリアだったが、こんなに正面からじっと見られたのは初めてで、若干照れながらネールは歩み寄る。

そんなネールの姿に、ホーネリアは体が震え涙が出そうなのを必死に堪え、包み込むように優しくネールに抱きつく。

「大好きだよネール」

ホーネリアは思わず言ってしまうくらい衝動に駆られるが、グツと我慢する。言わなかったのは容易に想像できるからだ、泣いて引き止めるネールの姿を。その姿を見て、強引に振りほどく事などホーネリアには無理だった。

「えへへ、私もですよ姉さん」

ネールは、ホーネリアがおかしい事に気づいていたが、それよりも嬉しさの方が勝っていた。今では後悔している、あの時気付いていれば…違う結果になったのではないかと。

時間にとつてほんの数秒にも満たないが、ホーネリアにとつてはとても大切な時間。いつまでも抱きしめていたい…けど皆もう待ってる、こんな無謀な事について来てくれる皆が。離れる時にはもうホーネリアに迷いは無かった。

「ネールの病気、必ず私が治してあげる。だから待っててねネール」

その言葉に意志を込めて、ホーネリアは今できる、最上の笑顔をネールに向ける。

「またねお姉ちゃん」

ネールも手を振り満面の笑顔でホーネリアを送る。

だが二度とホーネリアが戻ってくる事は無かった。

ネールが目を開けると、そこは自分の寝室だった。大きいキングサイズのベットにホーネリアからもらった可愛らしいぬいぐるみの数々。木でできた長さ二mほどの勉強机と一mほどの大鏡の下に小さなダンスがありお気に入りの小物など入れている。一番目を引くのは二十畳ほどの部屋の四分の一を占める衣装たんす。それがネールの部屋の全容だった。

負けたんですね私。寝起きでぼやけている頭を覚醒し、ようやくネールは、自分がどうなったのかを理解した。だが不可解な点がある。

「あれを使ったのに反動がありませんね」

命削魔法を使った次の日は、その反動で起きてから二時間程度起き上がることはできないが、今日は軽快に起き上がれる。おそらくフリーさんやギルドの医療班辺りがやってくれたのでしょう。少し考えネールはそう思う事にし、次の事に移った。

「そついえば今日お父様が帰ってきていますね、今の時間ですと執務室ですか。今日こそは教えて貰いましょう」

他の事はひとまず置いておく事にして、ネールは着替え、メイドが来る時間よりだいぶ早く寢室を後にし執務室に向かった。

第十六話 『父と娘』

執務室はネールの部屋の二部屋向こうにあり、一分もたたないうちに到着し扉をノックする。

「入りなさい」

誰が来るか分かっていた部屋の主は、威厳のある声でネールが入るのを許可する。

「失礼します」

扉を開けネールは一礼し中に入る。妹以外の家族には敬語で話しているネール。特に言葉遣いに細心の注意を払う相手は父親であり、ホーネリアに一度は譲ったが居なくなる前に、譲り受けられた現天空十二神オロム・ホルスタイン。身長一六五センチ、銀色のオールバックに貫禄がある太い眉、性格は厳格を絵にかいたような人物で、ここ一年家族や使用人で笑う姿を見た事が無い。それどころかピクリとも表情を崩さない。使用人達からは畏怖と笑いの種から『鉄仮面』などと囁かれていて、笑わしたら賞金が出るとか…。

執務室の中は、中央奥にネールの勉強机よりも一・五倍ほどある執務机、中央に商談用のテーブルと両向かいに高級なソファが置いてある。周りは見渡すと有名な美術品や工芸品が置いてある。

いつ来ても慣れませんね。それはこの部屋とオロムと両方にネールが思った事。

「座りたまえ」

書類作業をしていた手を止め、オロムはソファーに座り、それにならってネールも向かい側に座る。オロムは聞く前につっぱねる性格ではなく、まず商談でもどんな時でも、どんなに理不尽で我儘な事を言われても、相手が話し終わるまで口を挟まずじっと聞いている。最も、重い空気とオロムから発せられる無言のプレッシャーに耐えられればの話だが。

家族であるネールの場合、もう慣れたような感じでどもる事無く話し始める。

「昨日冒険者の申請をしてきました。講習会では、姉さんの知り合いと思われるソイドさんと、フーラさんが担当でした。そこで聞いた事でお聞きしたい事があり、お父様の所に来ました。私のために大勢死んだとはどういうことでしょうか？ 姉さんはそのことと関係しているのでしょうか？」

まるでネールが言った内容を知っていると云わんばかりにオロムの表情に歪みは無く、それがかえって謎をよんだ。

帰って来たのは昨日夜なものにも拘わらず知っている？ いえ、知っているはずはないです、いつも通りの時間なら、帰ってくるのは深夜、酒場に寄ったのなら分かりますが、父はそういう所は嫌いですし、元天空十二神のフーラさんと知り合いというのは考えられますね…そこから情報が漏れたのでしょうか。重要なのはオロムの言葉であり、ネールは自己完結し父親が話すのを待っていたが。

「言える事は唯一つだ。ソイドさんに謝り、命を大切にしてください」

やはり知っていたのですね。疑惑が確信に変わったネールだが、

又一つ謎ができた。フリーラさんになら話は分かりますが、自分を傷つけた相手に謝るのは些か疑問ですね。それに父がさん付けするのは対等と認めた相手です。ソイドさんは父より大分年下ですし、自分が負けてこう思うのは失礼ですが、周りから悪評があるソイドさんの事を父が対等とする理由が分かりませんそれに…。

オロムの言葉をネールは理解できなかった。普通娘であるネールが気絶するまで傷つけられたと聞き、怒りこそすれ謝るのは論外。にも拘らずオロムはネールに謝るよう指示する。それにソイドの事を、対等の様に扱う。それはネールを含め家族や使用人達が知っている中で十人に満たないぐらい希少な存在。

結局謎が多すぎてオロムの真意が分からなかったネールだったが、オロムはもう話す事は無いと席を立ったので、諦めて部屋から出る事にした。

第十七話 『二人の朝食』

時間も早いので、ネールは少し体を動かした後、使人が呼びに来たので朝食を取るため大広間へと向かった。大広間は上に大きなシヤンデリア、長さ20mもある長テーブルに椅子が五つ、料理の数はその三倍近くある。しかしネールが来た時座っていたのは妹のアーナ・ホルスタイン唯一人。

「あつ！ お姉ちゃんおはよう」

アーナは可愛い笑顔で元気良く朝の挨拶をする。アーナはネールの一つ年下、145センチと小柄ながら、体一杯に感情表現し、肩にかかるぐらいの金髪のショートボブ、大きな瞳、笑うと猫の様な愛くるしい表情。そんなアーナは種族問わず男女問わず人気がある。又戦闘面に関しても非常に優秀で、魔術師の才能は無いが、速気と力気に才能があり、学園では同じ学年で敵は居なく、全学年でも、鬼華やガルド、最年長クラスのトップ集団を抜き、全体で4位に入る。ちなみに一位はソハネ、三位ネール、四位アーナ、六位鬼華、八位ガラド二十位クランツの順になる

「おはようアーナ」

それを笑顔で返すネール。アーナだけで良かったです。ネールは心の中ではそう思っていた。というのも、母親であるマナ・ホルスタインはホーネリアが居なくなっただけから、ネールの事を嫌っている節があり、顔を合わすと何かにつけて嫌味を言い、酷い時には『貴方なんて産まなければよかった』、『もう少し早く死んでいれば』などと毒を吐く。それも仕方ない事だとネールは割り切っている。

マナは自分の娘の中で特にホーネリアを溺愛しており、十五歳で亡くなるまで分かつていたネールには可哀想と思っていたが、あまり愛情を注がなかった。奇跡的に生きたネールと行方不明のホーネリア、怒りと憎しみの矛先が何処に向かうか分かりきった事だった。

続いてオロムは空気が重くなりすぎて食事所の話では無くなる。一ヶ月ほど前ネールとアーナとオロムの三人で食事をしたが、オロムから発せられる重たい空気のせいで、アーナはカタカタと手が震えながら食事をし、ネールも料理の味は分からなかった。

そしてもう一つの椅子は……ホーネリアの椅子だった。

「お姉ちゃんちよつと聞いてよ」昨日休みだったんだけど、アツお姉ちゃんはギルドに行ったんだよね。つてそれは置いて、もう昨日大変だったんだからあゝ、大変と言えばお姉ちゃんも大変だったんだよね、つてそれは後にしておいて、扉を開けるとニヤロとワムがいたんで三人そろつて冒険だあゝと言うのりで散歩したんだけど、ニヤロとワムもこんなとこ通れるかあゝ私がいくら小さくても無理だよゝと言うほど狭い場所を通るんで、おかげでもう誰貴方レベルの汚れで服がぼろんこおゝ。私は楽しかったんだけど使用人サン真つ赤あかあだったよゝ。まあニヤロもワムも犬と猫だから仕方ないんだけどねゝ、それからもう最悪だよゝ、強制的に風呂入りゝ三時間コースの説教ゝもうくたくたでばたんきゅゝだったよゝ」

ネールとアーナが二人の時、アーナのマシンガントークは恒例でネールは微笑みながら聞いていた。いつもありがとうねアーナ。ネールは分かっていたのだ、アーナが少しでもネールに元気になって貰おうとしゃべり続けている事を……まあ本人の性格から来るものも半分あるのだが。いつの間にかネールの暗くなった心が温かくなるのを感じていた。

それからアーナが話し、ネールが相槌を返すといういつもと変わらないスタンスで楽しい食事は終わり、学園の準備をした後ネールとアーナは楽しい雰囲気ですごい二人一緒に学園に向かった。

だがネールは知らなかった、この日どん底にたたき落とされるほど残酷の一日である事を。

第十八話『学園』

毎度の事だが、玄関から出ると、アーナを待っていたかの様に猫のニヤロと犬のワムが、ニヤー！ ワン！ と朝の挨拶と思われるものをし。

「おつはよ〜ニヤロにワム、今日も元気だね〜」

とアーナは笑顔で返す。そこからが始まりで、行く先々で動物達や色々な種族の方々に呼び止められ、その都度アーナはにこやかに話す。改めて妹の人気を思い知らされますね。ネールは少し離れた所で見守っていた。

普通なら三十分で行ける距離だが、一時間ほどかかり学園に到着する。高さ6mはあろう門の前には二人の警備員がおり、ネールとアーナは学園証を見せ中に入った。中庭の様に芝生が両側にある道を歩き、寮があるエリアを通り過ぎ、学園生達で運営している商店街を越えると、ようやく学校が姿を現す。登校するにはまだ時間が早いのであまり話しかけられる事もなく。

「またね〜お姉ちゃん！」

「またねアーナ」

二人は別れ、ネールは三階にある自分のクラスに向かった。ちなみにアーナは向かった先は一階の生徒会室で、生徒会役員だったりする。

十五 A、十五歳クラスのトップ四十人が集まるクラスで、当然ネイルもそのクラスに在籍している。ふう〜と息をつきネイルはクラスに入ると、待っていたかのように三人……鬼華、ガラド、クランツが居た。

「遅いですよネイル殿」

「がははあ遅いぞ譲ちゃん」

「いつみても僕の婚約者は綺麗ですね」

約束も何もないがまるで示し合わせたように四人が、一五歳クラス最強のパーティが早朝にクラスに集まったが、挨拶をした後、顔色はどこことなく暗い。それもそうだろう、学園の最北東にあり、冒険科の卒業資格、冒険者登録資格でもある地下百階まであるダンジョン。そのダンジョンを最年少最速タイムでクリアしたパーティで学園生達や先生達の期待も大きく、又自分達もすぐに上にいけると大なり小なり過信していた。その結果が、昨日の出来事。見事に鼻はへし折られ、一ヶ月間のエンドレス探索禁止。スタートで大きく出遅れ、学園の期待にこたえられなかった所か、これから冒険者になる学園生達に悪影響を及ぼしたかもしれず、これからの事を考えるとどうしても重い空気になる。

それでもネイルは全然諦めていなかった。

「それでは今後の事を考えましようか。当面は授業以外にもダンジョンに潜り、終わったたら私の家の訓練場で対戦形式の戦闘訓練等、いつもより二倍三倍頑張れば一ヶ月後にはきつと上に……ヒートに上がれます」

そしてすぐにマシーリにも……。それは心の中に押しとどめ、当面の目標とすべき事を述べたネールだったが、反応があまり芳しくない。仕方ない事ですねあんな事があつたんですから。そう言ったネール自身も良い反応が返ってくるなんて思っていなかった。何処となく気まずい雰囲気が漂う中。

「貴方達では到底無理」

いつの間にか座っていたソハネは無表情でそう言い、ネールの言葉を一刀両断する。

誰も気付かなかったのか慌ててそちらの方を向く。気付きませんでした、さすがは天空十二神ですね……。ですが解せません。いつもならネールや他の人達が話し掛けても、ソハネは必要最低限の事しか話さず、ましてや自分から話しかけてくる事など今まで無かった。ソハネの心情としては、ソイドに言われた事を遂行するために話し掛けただけなのだ……。。

「それはどういうことですか？」

いつもなら反論する克蘭ツは権力から沈黙し、他の皆は黙っていたので、ネールはそう言い返すが、ソハネに鼻で笑われる。

「一ヶ月禁止の悪評からコミュニティに入るのは不可能、実力も無い。一ヶ月経つても必ずエリアボスには敵わない、ないないづくし、ただどーっ提案」

「何でしょうか」

口調は丁寧ながら、心の中では提案の内容が気になって仕方なか

った。自分でも実力が無いのは分かっています、コミュニティに入れない…その言葉は避けていたんですけど、周知の事実ですしこの際仕方ありません。エリアボスについてソハネさんの言う通りだと思いますし、ギルドの依頼が出るまで待つの手ですし、自分から依頼を出すのも良いでしょうね。それよりも提案とは何でしょうか…
…気になりますね。

ネールと同じく鬼華やガルドもソハネの提案は気になり、真剣な表情でソハネを見ており、クランツはこの展開についていけずいた。

たっぷり三秒ほど時間を開けソハネは口を開いた。

第十九話 『提案』

「今日私と貴方達4人で勝負。そっちが勝つたら私が推薦状書く、負けても何もなし。好条件」

ソハネがいかにしてネール達と戦う方向に持っていかを考え、それを言葉にただけで、ネール達を思いやる気持ちなど一切なく、淡々と話す。だがソハネは忘れていた。今にも賛成の意を表明しようとしているのはクランツぐらいで他の者達は意図を計りかねている。

「お言葉ですが、二つほどの理由で断らせていただきます。一つ目は実力差です。天空十二神であるソハネ様と私達とは実力差がありすぎまして例え四人がかりでも勝ち目はありません。二つ目は負けても何もなしと言われましたが、昨日の今日ですし、私達のイメージがさらに悪くなりますし、妹が生徒会役員をしていますので、これ以上の失態は姉として防がねばなりません」

尊敬や憧れ、英雄と称えられている天空十二神全員に様をつけるのは暗黙の了解である。

勝ち目の無い試合はやりたくないですね、唯でさえ皆さん自身を失っている時ですので、尚更です。丁重に断った後半部分は建前だが、前半部分はネールの本心だった。幾らこちらにメリットがあるとしても、負けたら元も子もない。

アツ……その事抜けてた。基本ソハネは話さず（ソイドの時は例外）、話したとしても自分が思った必要最低限の事しか言わないため、良く間違われる場合があり、今回もそれに当たる。いつもなら

間違われても特に気にしてなかったが、今回はソイドの頼みなので、言わないといけなかった事を考え、数十秒間使って纏めた。

「私は魔法を使わない。戦闘場所はダンジョン百階で誰も居ない。時間は二限〜四限ダンジョン探索演習、ボスモンスターは私が倒しておく」

否定派だった鬼華とガラドの目の色が変わった。ソハネは稀代の転移系魔術師として知られているが、闘気を使ったという話は聞いた事が無い。となると残るは通常戦闘、一方こちらは制限なし。勝てるかもしれないと考えるのが普通で、鬼華とガラドも例に漏れず、こちらにリスクが無く勝てる可能性があるのならやってみよう…という気持ちになっていたが、ネールだけは、悪い予感がしてならなかった。

こんなに好条件でしかもこちらにリスクは無い…ただより高い物は無い、甘い話には裏がある…という言葉があるぐらいですから、何か必ず裏がありますね。ほんとは裏など無かったのだが理由を知らないネールに知るすべは無かった。

そんな視線を感じ取ったソハネは、最後の切り札を使うことにする。絶対にネールがのってくる案だが、ソハネにしてみればできれば使いたくは無かった。これを言えば必ず学校に居る間、いつも以上にしつこく話し掛けてくると思われるからだ。ソイド以外あまり話したくないソハネにとって苦痛でしかなかった。だが、ソイドとの約束と天秤にかけた時、どちらに傾きか、ソハネにとってみれば考えるまでも無かった。

「条件追加、そっちが勝ったらホーネリアの情報教える」

空気が軋む音が聞こえた気がした。ソハネさんが突然いなくなった日と、姉さんが居なくなった日は同じ、しかも相手は天空十二神です。ですから何回か聞いた事がありますが、無視される事が多いですし、たまに声を発しても、人形のように無表情で『知らない』の一点張りだったので、ソハネさんから姉さんに起こった事を知ってるかどうかを聞く事を諦めていたのですが、やはり知っていたんですね。こうなればネールが決められる選択肢は一つしかなかった。

「分かりましたソハネ様。その話受けさせていただきます」

第二十話『ダンジョン』

今は二限目、ネール達のクラスと一つ下のAクラスは今ダンジョンの前に来ていた。ダンジョンの左右は高地で、突き出るように洞窟の様な岩でできた入口の中に入り、少し歩くと二クラス全員が入っても大部余裕がある大空洞に着く。ネールらは奥の方に座り、作戦の最終確認をしたかったが、既に前の方にソハネが座っているという事もあり、じっと待っていた。

「お姉ちゃん華さんガラドさんこんにちは」

十四歳クラス最高位のアーナは当然Aクラスで、仲間に理を入れ、ネール達に駆け寄った。

「おちびちゃん元気だなあ」

「アーナ殿、こんにちわです」

「アーナ、どうしたのですか？」

普段こちらには来なくて自分のチームで固まっているアーナを不思議がりながら、表面上は笑顔で迎え、鬼華やガラドは張り詰めた緊張が緩まり、暖かく迎えた。

「どうしたってお姉ちゃん達こそ一体どうかしちゃったんじゃないですか、今日はいつにも増して元気ないですよ」

自分では気付きませんでした。が周りからそう見られているのですね。この後の事を考えるあまり、周りの変化に気付けなかったネー

ル。周りを見渡すとさつと目を逸らされる。

「お前等僕達をそんな目で見るな！ 殺すぞ」

「私共は見世物じゃありません。剣の錆にしてくれるわ！」

「がはは、わしもウォーミングアップしたかった所じゃわい」

既に昨日の出来事が周囲に知れ渡り、ネール達の深刻そうな暗い雰囲気や拍車を駆け、見下すような眼、嘲るような眼。英雄視していた者が、自分達と変わらない者だった。そんな感じだった。普段蔑まされた目で見られた事が無い鬼華、ガラド、克蘭ツの三人には我慢できるものではなく、たやすく沸点に達し手当たり次第襲いかかろうとした時、止めたのはアーナとネール。ネールは冷たい目で克蘭ツの後頭部に氷の刃を突きつけ、アーナは鬼華とガラドの腕を後ろに回し捻る。

「冷静になってください、これ以上私達の名を貶めるのですか」

「そうですね、理由は知りませんが皆さんらしくないですよ、幾ら噂で昨日無残に負けたからっ…ってそんな事言いたいんじゃないよ、えつと…うん…と生徒会でも噂になっていて生徒会長が爆笑…って藪蛇だった。私より弱いから大丈夫です！ あははは…はあ〜」

アーナは、最後の方は自滅して乾いた笑いになる。アーナは焦ると、毒舌になり、相手が気にしている事をスバスバ言う。冷静になって最後の乾いた笑いになるころには。

「どうせ、どうせ私はアーナ殿には敵いません」

「がはは、痛いところづくのうおちびちゃん」

相手を深く落ち込ませる事になり、アーナが必至に謝り弁明し、その後、落ち着いた面々。克蘭ツが口を滑らしたせいで、これからの事を話す羽目になり、全てを聞いたアーナは珍しく深刻な表情でブツブツと呟き。

「…すみません皆さん、皆の所に戻ります」

思案気な顔で自分の仲間の所に戻った。

それから担当の先生恒例の注意事項から始まり、十五歳クラスから最初に奥に向かう。一番目のパーティーが奥に進み、五分毎に次のパーティーが奥に進む。ソハネは一人なためソロで入り、それから二十分後ネール達が奥に向かった。

第二十一話『試練』

狭い通路を抜けると、三十人ほど囲める円形の空間と下に進める階段があり、エンドレスにあつた転移装置が中央に設置されていた。違ふのは、転移装置が各階ごとにあり、行った事がある階なら、最初の転移装置、つまりネール達が居る場所から転移可能である。又、各階にある転移装置からは、エンドレスと同じで最初にある転移装置にしか転移しない。

水晶にリーネ達は、階数が記録されている学園から配布されている指輪をつけている手で触れ。

「九十五階」

ネールが声を発すると、数秒後には全員が消えていた。

「九十五階」

九十五階にしたのには理由があり、最初からいきなりソハネと対戦すると、動きにどうしても遅れが出るし危険である。それはスポーツ等にも言える事で、体を慣らす必要がある。それに連携等の確認もしたかった事もあり、ネール達は九十五階にする事にした。

九十五階に着くと前方には扉があり、後方には上に上がる階段。

「確認します。まず鬼華さんが扉を開けて、ガラドさんが中に入る。クランツさんは遊撃で、私が後方支援」

一様に全員が頷き、鬼華が扉を開ける。

中はバスケットコートと同じぐらいの広さで、一階一部屋で、十階毎に敵が変わり、エンドレスと比べるとモンスターは弱い。ダンジョンで九十階クラスのモンスターでもエンドレスでは三十一階クラスに相当する。他にもエンドレスと違う事は、パーティーが部屋に入ると扉が閉まり、他のパーティーが入れない事や、扉が開くとモンスター復活している事。

ガラドが入った時思った事は。

「がはは、きょうはいつにもまして敵が少ないぜえ…ありゃたまげたな」

ガラドは混乱するあまり、一旦扉を閉め、全員が部屋に居るモンスターの事を考えていた。

いつもなら九十五階は十五匹出るが、今居るのは五匹。うち三匹は三mある岩でできた怪物『ゴレム』、残り二匹は、身長百六十センチ黄色のとさかと赤い鼻、肌は緑で手足はカマキリのように鋭利な『シルフィー』。

……見た事が無い敵ですね、十中八九ソハネさんの仕業でしょう。

そう本来ならここに存在しない、エンドレス四十一階クラスの敵普通ならダンジョンに来るのは不可能であるが、その不可能を可能にするのは、ソハネの転移魔法。転移魔法とは文字通り誰かを他の場所に飛ばす魔法で、エンドレス内でもこの魔法は可能であるがせいぜい普通は六階上がる位のレベルで五人も魔法を使えば魔力が切れる。だが、この魔法を使える者はコミュニティから熱烈な歓迎を

受ける。五階までなら転移魔法を使える者は何処へでも転移できるので、非常時の時高確率で転移装置がある部屋までいけるので便利である。転移魔法を使える者は百人ほどいるが中でも群を抜く強さを持っているのがソハネであり、ここからでもエンドレスのムーアエリア内なら、どの種族でもどのモンスターでも余裕で百でも二百でも転移できるという化け物ぶりである。

まるで試練だとも言わんばかりのソハネの挑発めいた行動に、若干不快な気持になるネールだったが、すぐに気を取り直し。

「いつも通りいきましよう…この階の下は何があるか分かりませんが私達の力ならきつと勝てるはずです。準備は良いですか」

少しばかり動揺していたみんなの気持ちを引き締めたネールは。

「行きましよう」

と、号令をかけ、部屋の中に入った

第二十二話 『試練2』

ネール達が部屋に入った事を感知したモンスターは戦闘体制に移る。モンスターに知能があるかどうか分からないがゴーレム達が先頭に立ち、シルフィーが後方から抜け目なく相手を狙う…という陣形を取っている。一方ネール達の陣形は、最前衛をガラド、斜め後ろに鬼華、少し離れてクランツ、最後方をネール。

「水竜リーヴァよ、加護の膜を張り、対象者達を守りなさい」

両者の距離が六mほどとなった時、ネールが持っていた球体のクリスタルが付いた杖を横にし、防御魔法の呪文を唱える。全員に水でできた薄く球型の防御膜が張られ、ネールは次の呪文に移る。その頃、ガラドと鬼華はゴーレム目掛け走り

「俺様様の攻撃をくらいやがれ」

ゴーレムが振り下ろしてきた巨大な拳に、ガラドは持っていた巨大な斧を振り上げるが、拳に傷がつかずかえってきたのは痺れるほどの手の痛み。

「はぁ！」

鬼華は自慢の速度を生かし、ゴーレムを通り過ぎ、シルフィーの胸を愛用の二尺三寸の刀剣『鬼道丸』で薙ごうとするが、鋭利な手で受け止められる。

「この、くそが」

クランツも細剣でゴーレムに突きを見舞うが、傷一つ付かない。

「水よ球となつて敵を攻撃してください」

前に居た三人は横に飛びのき、代わりに幾つもの水の塊がゴーレム達に向かって飛び、動きの遅いゴーレムに当たりシルフィーには鬼華が攻撃した方には当たったがもう一方には避けられた。ネールが放った水魔法『ウォーターボール』はそんなに高い威力は無く、シルフィーは軽く吹っ飛んだが、ゴーレムはびくともしなかった。

仕方ないですね、ソハネさんとの戦闘前にあまり使いたくは無かったのですが。普段のダンジョン九五階で出てくる敵だったなら今の一連の動きで、半数程度は撃退していた。ネールは魔力や闘気はなるべく温存してソハネとの戦いに向けたかったが、そうも言うてはいられない状況になり、やむなく作戦を変えることにした。

「皆さん闘気を使ってください」

「その言葉を待っていたぜ譲ちゃん、改めて俺様様の攻撃を喰らいやがれ、ヴァイト！」

ネールが魔法を当てて、攻撃の矛先を変えたゴーレムにガラドは横から素早く近付き、巨大な斧を横つばらに薙ぐ。

先ほどと違い今度はゴーレムが音を立てて崩れる。

両手斧力気技ヴァイト：武器と両手に力気を送り込む事により本来の攻撃より何倍もの威力になる、力気を送り込めば込むほど威力は増加するが、それによって武器が壊れてしまう可能性がある。

その頃鬼華はシルフィー二体の注意を惹きつけ、ネール達と十mほど離れた場所で二体と対峙していた。だが闘気を使えば鬼華の敵ではなく。

「私の剣の錆になれ豪桜花」

足に速気纏わせ速さを増し、そのスピードに乗せ、ガラドよりかは二段階程下がる力気を刀に纏いすれ違いざまにシルフィーを斜めに斬り落とし、もう一体のシルフィーが鋭利な手で薙いだのをしゃがんでかわし、峰を柄を持ってない左手を乗せ刀を頭の上で水平にしてシルフィー目掛けジャンプし、当たった後、左手を突き上げ、シルフィー斬り裂かれ、鬼華はシルフィー二体を倒し、息を吐いた。

片手剣速気力気複合技豪桜花：速気で上がった跳躍力と、両手と刀に力気を纏わせ、突き上げる技。鬼神家では基本技とされ、剣の稽古で最初に教えて貰う闘気技である。

クランツは闘気を使ってもゴーレム二体相手では防戦一方になり、苦戦を強いられていたが、ネールのサポートで何とか持ちこたえ、数分ほどで鬼華とガラドが来てゴーレムを倒した。

「お前等、俺が死ぬ所だったんだぞ。もうちょっと早く来れなかったのか屑が。ファイアンセどうでしょうか僕の力は、貴方を守れるだけで俺は幸せです…って僕をおいてくくなあゝ」

さっさと次の階へと進んでいくネール達を慌てて追いかけるクランツだった。

第二十三話『試練3』

ネールが言う『試練』という言葉は大方合っていた。ソハネは最低限、九十五階で用意したモンスター程度も勝てないようじゃ、闘う資格は無いし、闘っても意味は無いと思っていた。何故なら魔法を使わなくても、今回用意した敵なら楽々倒す事はできる。ソイドに言われなければこのまま到達できずに死んでくれても構わないとソハネは思っていたが、本当に危なくなったら転移魔法で百階に転移させようと思っていた。そして意味の無い戦闘でばこにした後、一階に転移させようと思画している。ソハネの見立てでは九十階までなら九十五階から数が増えただけで、同じモンスターを用意したので何とか倒せると思っており、ここまで倒せば上出来だと思っている。九十九階はネール達の実力では絶対に越えられないとソハネ自身思っている試練でそれまでと違うエンドレス四十六階クラスのモンスターを用意しており、勝てる確率は一%ぐらいだろうと踏んでいる。だがこの計画にも懸念材料は一つある……それは。

く九十八階く

「俺様様の攻撃でくたばりやがれ」

最後に残ったゴーレムにガラドは力を振り絞り、ジャンプし体重と闘気を載せ、頭から真つ二つに両断する。九十五階の敵を倒したネール達は九十六階、九十七階とモンスターの数が増え徐々にきつくなっていたが何とか倒し、九十八階の敵はゴーレム十体とシルフィー五体。熾烈を極めた戦闘もガラドの一撃で最後の敵を倒したが、ネールの防御魔法をもってしても無傷とはいかなく、ネール達は九十六階九十七階は無事だったが、だんだんと疲れが見え、そし

て九十八階、鬼華はシルフィー五体による連携攻撃に色々な箇所を斬られ特に右肩と両太股の傷は深く、残り一体の所で、傷の痛みから転びそうになり絶体絶命だったが、闘気技を使い何とか倒す事が出来た。今は立つこともできず地面に寝そべっている。

本来ガラドは打たれ強さをうりに、肉を切らして骨を断つタイプなので、一番攻撃を受け、見える部分全てがどす黒く染まっっていて肋骨にひびが入り、あばら骨の何本かは折れていて、呼吸するのもやっとの状態。最後の攻撃は火事場の馬鹿力で、今はピクリとも動かず地面に突っ伏し、呼吸で体が上下し生きているのが分かるレベル。

クランツは九十七階辺りから逃げ回っていたので、一番傷が少なく、両腕両太股に少し切り傷ができ、軽い打撲が数か所ある程度で済んだが、ネイル達からは役立たずのレットルを貼られ、逃げ回った事により失望されていた。

最後にネイルだが、九十八階ゴーレムの攻撃で右腕の骨が砕かれ、吹っ飛び壁に激突し、防御魔法を使わなかったら死んでいたかもしれないぐらいのダメージで、後頭部からは血がだらだらと落ち、意識が朦朧としながらも的確に魔法を放ち、今は最後の敵を倒すのを見届けた後、意識を手放した。

一時間程経過し、ネイルは起きる。血を失い軽く貧血状態だったが。

「水よ癒しの性質に変化し、自身に浴びせよ」

水の治癒魔法で直し、その後鬼華とガラドに同じ魔法を放つ。

水魔法エンジェルウォーター：水の治癒魔法で傷や骨、打撲などの異常を直してくれるが、傷の度合いによって使う魔法量は変化する。

「俺も直してくれよ！ さつきから痛くて仕方が無いんだ。ファイアンセ貴方なら分かりでしょこの勇士の傷が」

クランツは騒いでいたがネール達は既に見ない者として相談を行っていた。

「次の階はどこののでしょうか、魔力の方も既に一割を切っていますしこれ以上多くなると対処しきれません」

「私も闘気量がそこを尽きかけております」

「がはは俺もじゃわい、これはさすがに俺様様でもちとやばい」

「とりあえず九十九階の敵をみましょうか、それから決めた方が宜しいですね」

方針が決まりネール達は九十九階に移動する。九十九階に着くと尋常ではないプレッシャーを感じ、その時点でネール達は今までと違う敵だと感じる。

ネールが合図しガラドが恐る恐る扉を開け見た者は、身長百八十センチ銀色の毛並みを持った、ムーアエリア五十階のエリアボスを抜かして、最初のエリアで最強の敵、狼人が五体いる。

ソイドは戦いを見た事が無かったので四十階とよんでいたが、戦った後はアイテム等が揃っていれば四十五階までならいけるだろう

と考えを改めたが、必ず四十六階で負けると思っており、何回もネール達の戦いを見ているソハネも同じ意見だった。

四十六階〜四十九階に出てくるモンスターは一種類のみ……そう、狼人だけだった。

「無理だこんなの、俺達じゃあんな化け物倒せない。おっ俺は逃げるぞ。犬死には御免だ、お前等屑どもだけでやれ、さっファイアンセよ俺達だけで逃げま……がっ」

そこまでいった後、クランツは全員からの一撃でたやすく意識を手放し、三人で終わりの見えない作戦会議を始めた。

第二十四話『試練4』

刻一刻と時は過ぎ、三人で意見を出し合っているがなかなかいい案が出なかった。

気付かれずに、一瞬で勝負を決めないとやられるのはこちらです。ですが現段階では闘気魔力とにもこころもとありませんし、回復道具も持ってきて無いです…こんな事なら持ってくれば良かったですね。

そう考えネールは自嘲気味に笑う。

過ぎた事を振り返っても仕方ありませんね。自然回復に任せても、五割程度回復するのに半日はかかりますし時間的に無理ですね。現状では打つ手は…せめてアーナがいればよかったです。

アーナのパーティーは一つ下のクラスで最強のパーティーだが、アーナの他は、クラス内で中盤辺りと数段劣り、そのせいで八十階辺りで足止めをくらっていたが、十四歳クラスAの平均が三十九階、十五歳クラスのA平均が六十九階十六クラスAの平均が八十九階、卒業資格&冒険者になる資格百階と現時点ではネール達のクラスの一つ上をいていた。それでも普通ならネール達が居る九十九階まで来れるはずは無い…そう普通なら。

「あれっこんなところに居ただけ探したよお姉ちゃん」

初めは幻聴かと思い、誰も声がした方を見なかった。それもそうだろう、現実的にありえないとネール達は思っているからだ。ネー

ル達が入ってから二時間程度経過しており、普段アーナが転移する場所は七十五階、ネール達が入ってから最低二十分は経過している。

学園最強のパーティーと自負しているネール達でさえ七十五階から今居る九十九階ダンジョン前まで、休憩時間を合わせ四限が終わる四時間で行けるかどうか際どいラインの時間。ちなみに一限六十分で休み時間は二十分、昼休みは四限の終わりで一時間ある。

それを僅か百分足らずで来たので俄には信じられないでいた。

「ちよつと聞いてるの、お姉ちゃんも酷いよ無視してさ」

はんば苛けた声のアーナにやっとこれが現実だと分かったネールは振り向く。

そこには……全身血塗れのアーナの姿があり、表情は少し不機嫌だったがいつもと変わらない雰囲気。ネールは酷い違和感を感じ言葉を発せなかった。

「がはは、おちびちゃんどうしたんだその格好、まるでサンタみたいだな」

あつけにとられていたが、いち早く我に返ったガラドが若干ひきつり笑いながら声をかける。

「あれっ真っ赤っか、ちよつと急いでたから全然気付かなかったよ、お姉ちゃん水魔法お願い」

嫌だなーと言いながら、ネールに洗い流してくれるようお願いするアーナは、まるでこんな事が日常茶飯事な物言い。気押されなが

らもネールは水魔法でアーナの上から水を掛け洗いながす。水を出すだけの魔法なので微々たる程しか魔力は使わない。

「アーナ、どうやって来たのですか？」

「そうです。それとネール殿と同じ目的だから急いでたのでありませんか？」

数分立って、綺麗さっぱり血を洗い流したアーナに、幾分冷静になった鬼華とネールは現状把握のため質問した。その質問に対しアーナはにっこりと笑い。

「お姉ちゃん決まってるじゃない、パーティーの人達に無理を言つて、ソロで来て八十階からここまで来たんだよ、途中からモンスターが変わっててびっくりしたけど、よわっちかつたよ、鬼華さん分からないかな。お姉ちゃん達弱すぎて、多分ソハネさんに数分でやられちゃうと思うから、その前に追い付きたかつたんだよ。」

アーナは少し扉を開け、納得したように扉を閉める。

「あはは、エンドレス四十六階から出てくる敵だね。良かったねお姉ちゃん達、戦闘してたら死んじゃってたよ、アッ、ソイドさんがそんな事許さないから、危なくなったら転移させるか。お姉ちゃん達とは違う目的だよ。だってホーネリアお姉ちゃんの事なんて興味無いから。」

第二十五話『試練5』

初めネールは、アーナの行った事が理解できなかった。鬼華やガラドもネールと同じ目的だと思っていたので目を丸くしていた。家族を一番に思うのは当然であるとネール達は思っている。それが難しい父親でも、自分を疎ましく思っている母親でも、自分を生んでくれてここまで育ててくれたのは両親であり、その事に感謝するのは人として当然。まして自分を可愛がってくれた姉のホーネリアの安否を気遣うのは当たり前で、そんなネールの思いに共感し鬼華やガラドは手を貸してくれている。アーナも同じ思いだと思っていた。姉のホーネリアが無事かどうかを一番に知りたくソハネとの戦いに力を貸してくれると…。

「どうして……」

震えるような声で顔を青ざめながら、ネールは言葉が続かなかった。

「私もお姉ちゃんと同じで、家族は大事に思ってるよ。でもホーネリアお姉ちゃんは別。だってあんな……それに例え両親だったとしても私の答えは同じだよ、だって私には何より大切な事があるから、あつでもお姉ちゃん達が先に戦っていいよ、じゃあ私はこの階の敵潰しに行くね」

そう言って、クロスする様に腰鞘にある二本の三日月刀を抜き扉を開け中に入る。

幾らアーナが強くて一人では無理です。

数十秒ほど呆気にとられ、慌ててガラドは扉を開け、ネール達は…ある光景を目にする。

（数十秒前）

中に入ったアーナはこちらに気付き、ムーアのモンスターの中で一番の速さを起こる狼人が襲ってくるが、自身は敵目掛け真っ直ぐ駆け抜ける。

二つの速度は常人では見えない…そんなスピードで、シルフィーの比ではなく、ガラドやクランツでは分かってたとしても避けられず、鬼華で一匹相手なら速気を使いぎりぎりまで避けられる速さ。それを五匹相手にしてもアーナは余裕がある顔で闘気は使わず、両手の剣を左手を逆手、右手を順手で持っている。一匹目が鉄をも斬ると言われている爪を振り下ろしたが、それよりも早く懐に入り左の剣で首を掻き斬る。斜め後ろに居た二匹は、両方から噛みつこうとしたが、狙い澄ましたかのように右手の剣で口を開けた部分から後頭部まで薙ぐ。最後の二匹は、本能的危機感から一旦距離を取ろうとしたが、逃げる者に勝利の女神がほほ笑む事は無い。アーナはそれを許さず、一匹に狙いを定め距離を詰め狼人の股下から頭のとっぺんまで、ジャンプし逆ギロチンの様に真っ二つにした。

これを好機とばかりに、残り一匹はアーナの背後に移動し飛び上がる。爪でアーナの体を貫こうとしたのだが、まるで後ろに目でもあるかのように、爪と爪の間に右手の剣に切っ先を後ろ手で向け防御し、そのまま回転し左手の剣で薙ぎ、最後の一匹の首がごとりと落ちる…これが数十秒間で起こった出来事だった。

これをアーナが、それに剣を使っている所始めてみました…実力

を隠していたのですね…姉としてはちょっと悲しくもありますね。

ネールが考えている通り、アーナは学園では実力を隠し、無手でも手を抜いて戦っていた。腰にある剣は練習中だとアーナが言っていたので、それを信じネール達は疑いもしていなかった。

「アーナ…貴方は…」

ネールが問おうとしたがそれより先に

「そんな事よりお姉ちゃん達行こうよ〜ソハネさんと闘うんでしょ？」

アーナが普段と変わらない元気な声で先頭を歩き、結局聞けずじまいで。

終わったら聞く事にしましょう…ようやくソハネさんと対決ですね。

ネール…鬼華…ガラド、それぞれが何かしらの思いで一歩一歩歩みを進め、ソハネとの戦いを思い描いていた…先ほど居た場所に放置しているクランツの事を忘れて。

第二十六話『試練6』（前書き）

すみませんお待たせしました。

第二十六話『試練6』

一歩一歩歩くごとに、ドクン、ドクンとネールの心臓の鼓動が高鳴る。

もうすぐですね。階段の終わりが見え、ネールは一旦立ち止まり深呼吸する。

今度こそ、後悔しないように最初から全力でいきます。

ソイドと闘った時、最初は本気を出さなかった…そして気付いた時には、実力差もあり何もできないまま終わった。今ではネールも分かっている、どんな事をしてでも勝てなかっただろうと、戦った時ソイドにかなり手加減されて負けただろう…と。だから最後のチャンスだと思っている今回は負けるわけにはいかなかった。

「お姉ちゃん大丈夫？ 震えてるよ」

アーナに言われるまでネールは自身の震えに気付かなかった。

これは武者震いです…そうに違いありません。そう自分に言い聞かせたネールはアーナに大丈夫と言い、ガラドと鬼華に目配せし、三人でドアを開けた。

ただつひろい空間に一人の人間が、座り頼杖をつき退屈そうに待っていた。

「来ましたよソハネさん」

そんな、少し震えた声で言ったネールの言葉を無視し、ソハネはある一点を見つめる。

「久しぶりアーちゃん。元気？」

「久しぶり〜、全然この授業に来なくて会わないから心配したんだよ〜」

この空気と場違いな声色に場違いな会話。ネールや鬼華は、余りの展開に思考がついていけなかったがアーナとソハネの会話は続く。

「ごめん…アーちゃんに会わせる顔が無かった。アーちゃんも戦う？」

「やっぱり何かあったんだね〜もちろん私にも手加減してくれるよね〜」

「冗談。本気で戦わなければ負ける…アーちゃんも手加減なんて嫌い。それは知ってる」

アーナとソハネは長年付き合っていた親友の様に笑いあい、アーナはネール達の後方に引いた。ソハネは半径2mの部分を転移魔法で地面を抉り。

「ここから出ない。いつでもどうぞ」

何処までも私達の力を下に見ているのですね。良いでしょう…後悔させていただきます。

「鬼華さん、ガラドさん、一気に決めます。」

攻撃付与魔法と防御魔法を唱えた後、ネールは自分ができる最大の攻撃魔法を放つべく詠唱を始め鬼華とガラドはじりじりとソハネに近づき闘気を高めている。その間ソハネは欠伸を噛み殺し、だるそうにしていた。

「…ここに降臨し、敵に竜の怒りを与えよ」

ネールは詠唱中に杖の先端をソハネに向け、後ろに出現した水竜リーヴァが口を開く。

固有水魔法リーヴァスストラッシュ：ハイベンベルク家にしか使えない魔法で水竜リーヴァを召喚し、竜の口から出るすさまじい水流が敵を襲う。

「鬼神流桜散花」

鬼華は桜の花を形作る様に力気を載せ斬撃し、素早く中心を速気を載せ突く。

鬼神流闘気技桜散華・鬼神家に代々伝わる闘気技で力気で桜の花を形取りその中心を速気で突く事により、闘気圧が敵を襲う技。

「がはは、ガラド流トマホーク」

ガラドは勢いよく回転し、力気のカも相まって小型の台風のように見える。旋回のスピードを上げ小型台風から徐々に大きい者になりそして…。

「そりゃ！」

ハンマー投げ選手顔負けの投擲でソハネに向け斧を放り投げる。

ガラド流トマホーク：ガラド流とはガラドが勝手に作った我流で、曰く『がはは、自分で作った方がかつこいい』…とか。

鬼華の鬨気の風が追い風となりネールとガラドの、魔法と技の速度と威力が増す。トリプルコンビネーション『暴水の斧彼方』。この技で百階のダンジョンボスを葬った、ネール達が今できる最高の技。

ソハネの目の前には、さながら台風の時の海のような大津波、中心からガラドの斧が勝るとも劣らぬ迫力で迫ってくる。

通常の生徒なら度規模を抜かれるほどの圧倒的な光景に恐怖に駆られるがアーナは準備運動をしながらその光景を見、ソハネはめんどくさそうに手を払った。

第二十七話 『試練7』

それだけで水は逆流し斧はガラドの方向に飛ぶ。防御魔法を打ち破られ、鬼華とネールは、倍返しされた勢いの水流で壁に激突しガラドは水流には歯を食いしばって耐えたが、自身の斧に反応できず腹に直撃し鈍い音が響く。幸い柄部分だったため致命傷にはならなかったが、アバラを数本おりびくびくと白眼向き痙攣しながら倒れた。

鬼華もネールも全身を強く打ち意識が朦朧としている。

やっぱりこの程度だったのですね私達は。おそらくソハネさんは指先一つほどしか…いえ、それすらも出さない実力で負けた…。悔しくて情けなくて横たわり、涙で床を濡らした。プライドも何もかも砕け散り、後に残った物は絶望と諦め。何年後かでも別にいいじゃないか？ 何年後かにはマシーリまできつと行けるから今危険な事をしなくてもいいのではないかと。

「あはは、選手交代。やっぱりお姉ちゃんの覚悟ってその程度だったんだ」

ネールの心を見透かした様に言うアーナは、ネールよりも高位の水魔法を詠唱し、ネール達を元の状態に戻した。アーナが私より高位の魔法を…。今まで一度も自分より強い魔法を使った場面を見てないネールは信じられないといった目でアーナを見つめた。

「仕方ないよアーちゃん。所詮危険の目にあつた事無いお嬢ちゃん達のご遊戯。子供の頃から誰からも心配されたネール。鬼神家唯一の娘鬼華。ガラドは違うけど所詮似たり寄ったり。アーちゃんや私

とは覚悟が違う」

ソハネはアーナの覚悟の度合いは薄々分かっていたが魔法を見た時点で確信に変わった。それは当初ソハネが思っていたよりも強く重い覚悟。そして理解した。

アーちゃんそこまで。それなら私も…殺す気で戦う。ソハネはそう思った。殺す気が無ければどこかしら手加減が出る。それはアーナとソハネは痛いほど分かっていた。

目を瞑り顔を上げた時、だらけたソハネの顔は無く、あるのは張り詰めた真剣勝負時の表情で、ネール達と闘った時とは百八十度違う…そんな表情。

「いいのアーちゃん？」

「あはは。もう家族ごっこ、良い妹を演じるのはおしまいにしようと思ったの。それに、いい加減前に進まなきゃと思って。今日決めたわけじゃないよ、前々から思ってた事、お姉ちゃんの話聞いた時、今日がその日だと確信したの。だから…ソハネちゃん」

分かっているといった表情で頷くソハネ。

どういう事なのですかアーナは一体何を…。家族ごっこ？ 良い妹を演じていた？ 負けたショックとアーナの魔法とソハネとの掛け合いで、ネールは混乱し気が動転。ネールの血液が焼けるように熱く、心臓が破裂するほど高鳴る。過呼吸になり、よろけ倒れそうになったが。

「ネール殿、お気を確かにお持ちください」

「譲チャンしつかりしろ」

鬼華とガラドはネールを支え、背中をさすり、それをアーナとソハネは冷めた目で見ている。

「相変わらず悲劇のヒロインぶっているのねお姉ちゃん、お姉ちゃんのそういう所大っ嫌いだった。お姉ちゃん達に見せてあげるね、口だけじゃない本物の覚悟を…それが最後の姉孝行だから」

最後の方は呟き声で周りの者は聞こえなかったが、ソハネにはしつかりと聞こえていた。

「こんな戦い見れない。だからしつかりと見る…千分の一でもアーちゃんの思いを知れ」

だからだろう珍しく感傷的な声でネール達に助言し、アーナとソハネは十mほど離れ、見つめあい、どちらからともなく戦闘は始まった。それは天空十二神同士が真剣に闘う試合と遜色は無く、死合と呼べるに相応しい激闘でネール達が変わる第一歩となった…そんな戦い。

第二十七話『試練7』（後書き）

次はアーナの外伝にしようかなと思います。

第二十八話 『外伝1』アーナ01』

誰も私を見てくれなかった…あの人が現れるまでは。

（二年前）

「今日も暇だな」

アーナは無駄に広い自室で窓の外を眺め、溜息を吐いた。アルスタイン家の三女、これが忌まわしき私の呼び名で、周りからはその事しか認識されず誰も私自身を見てくれない。

最初に生まれた大姉のホーネリアは、生まれた頃から膨大な魔力と強い加護を持ち、由緒あるアルスタイン家の中でも三本の指に入るほどの潜在能力。有り余る才能と努力で若干十八歳にして天空十二神となった。さらに聖女と呼ばれ周りから愛され母親に溺愛されている。

ホーネリアの強い要望によりつくられた次女であり姉のネール。

生まれつき治らない難病を持っていたがホーネリアを上回る加護を持ち、よわよわしい姿と十五歳までしか生きられない事から、五歳になる頃から求婚（この世界では十二歳から結婚ができる）の話が出るほど貴族達から受けがよく、使用人達や周りから常に心配してもらい、姉から寵愛されていた。

そして、当主を作るため様々な事から男を作るための方法を試し、できたのが三女である私アーナ。生まれた瞬間から落胆され誰から

も相手にされなかった、父は仕事母はホーネリアしか目を向けず愛情を注がず、ホーネリアはネールの事ばかりで、たまに私に言うのが『アーナ、貴方はあまり外に出歩かず、私が居ない時ネールの世話をよろしく…』だ、ふざけているとしか言いようがない。ネールは周りから心配されているせいかすごくアマちゃんで二言目には『疲れた…持ってきて』だ、加護の力で普通に保っているのに、空気に慣れてしまったのか、周りが心配しすぎたせいかな、すごく我儘で自分やホーネリアの事しか考えておらず私の事など見向きもしない。使用人達も優先度は一番低くみられ、同じ年である専属メイド、フィルに任せ、何か用事がある時やフィルが居ない時私が頼むと表面上何も変わらないが、うっとおしく思っているのは私には分かる。

だからアーナはよく一人で出掛け、この日も屋敷を抜け出し、外に出た。この時間とフィルと話している時が私の楽しい時間。最初頃は長時間に亘るお説教をくらっていたが、今では諦めているのかフィル以外の人は誰も何も言わない。家を出ると待ち構えた様にニヤロとワムが姿を現した。初めて家から外出（脱走）した五才の時に会い、以来外に出た時、何をするにも一緒に、今ではアーナの半身のような存在。

「おはよう、ニヤロ、ワム」

「ワン」

「にゃ〜」

毎回アーナの恒例の挨拶に元気良く返すニヤロとワム。次に出るアーナの言葉も決まっていた。

「今日はどこに行く？」

「ワンワンワン」

「ニャーニャー」

ニヤムとワムはアーナの言葉が分かるかのようにぐるぐると駆けまわっていた。

「そっか、じゃあ今日はお散歩にいこお」

「ニャーオ！」

「ウォーン！」

さっきのは何処に行きたいかの合図で、ぐるぐると駆けまわるのはお散歩、アーナの服を引っ張るのは食べ物屋巡り、ポンポンと軽く叩いてくるのがギルドの仕事、飛び跳ねるのはエンドレスに行く事だった。ギルドの登録申請は7歳の頃、アーナは作り、ある条件を満たさなければエンドレス内に動物は連れて行けないが、その条件を満たしていた。

富豪街を抜け、アーナがこの都市で一番好きな活気がある市場や飲食街がある中央部分。そこにいる人達の大部分はアーナを一人の人間として見てくれて、心地良かった。だけどそれは商売上大勢を見ている中の一人であり、心から気を許せるものは居なかった。

今日は他の目的があるため呼び込みや馴染みのある人達と軽く世間話やいなしながら通り過ぎ、向かった先は南西にある大きな公園ホントか嘘か分からないが、精霊が住まう森をモチーフにしたとされ、公園の半分が木で埋め尽くされていて、アーナ達は木と木の間

にある道を進む。三百mほど歩くと、道が開け、地面が芝生で五百m北に歩くと湖があり、所々にベンチが設置されている広場へと到着する。

「あれみんなどこいったんだろ」

いつもなら鳥達やここで放し飼いにされている鹿や兎等の動物達が我先にとアーナの元へ来るのだが、今日に限っては誰も来ない。

「ワンワン」

「ニャーニャ」

「アッ何処行くのニャロ、ワム」

ニャロとワムがいきなり駆け出し慌てて後を追いつつ向かった先で、ある運命的な出会いをする…それがあの人だった。

第二十八話 『外伝1』 『アーナ01』 (後書き)

何話が進んだ後アーナの外伝の続きやります。
次はソハネとアーナの戦闘です。

第二十九話 『絆と裏切りと絶望と01』

「すごい…」

ネールは自分の妹が戦っているのだがそれしか言えなく、唯茫然と戦いを見ていた。

「かろうじて見えますが」

「がはは、全く見えん」

ガラドと鬼華は驚くのを通り越して、違う世界の者を見ているようで実感が無かった。それほどまでにアーナやソハネ達と比べ走攻守全てにおいて大きな開きがあった。

まずアーナが纏っている闘気はプラチナと呼ばれる、固有闘気や刻印闘気を抜きにすれば最高峰の闘気で上にあげた二つをどちらか使え、尚且つプラチナを越える闘気なのは現在三人だけである。名前は闘気の質の変化によって変わり最初は無色の闘気でガラドや鬼華は今この地点に居る。そこから中闘気高闘気と続き、次に属性気と呼ばれる色付きの気に変化する。そこまでいけば中級冒険者と認められる。そこから一流冒険者と認められるシルバー、ゴールドと続きプラチナ、固有闘気と刻印闘気の流れになる。

本来十五歳にも満たないアーナが使える様な気ではないのだが、血反吐を吐き何度も死にそくな目に会い、手足を食い千切られ、燃やされ、氷漬けにされた事は幾度となくあり、体の至る所に傷を負った事がある。無くなった手足や傷は再生屋と呼ばれる現代で言う病院見たいな所で元通りに直してくれるが、大金が必要で一般人は

行く事が出来ない。そんな努力の末に会得した気である。

一方でソハネも負けておらず、当たったと思ったアーナの攻撃も、次の瞬間には無傷で別の所にいる。これこそが本偽多重分身と呼ばれる由縁で倒しても倒しても出てくるので本物が偽物が分からない事から囁かれているが、実際は、転移魔法を使つての短距離高速移動である。普通の転移魔法使いならどんなに短縮しても5秒かかり、歴代の転移魔法使いでも2秒はかかるがソハネの場合息をするより早く使える。

アーナの死角5mほどの所にソハネは転移し、風魔法『ウインド』と呼ばれる三日月のカマイタチを放つが、一瞬後にはアーナはそこにおらず、空中に気で固めた足場を作り、変幻自在の移動スピードで（遅くなつた時でも普通の人には見えない）、瞬く間にソハネの居た所に斬撃を見まうが、転移し死角に移る。

ネール達にしてみれば高度な攻防戦に見えるが、闘っている両者にとつてみればウォーミングアップに過ぎなかった。

あはは、やっぱりソハネちゃんは凄いや。何回目の魔法か数えるのも馬鹿らしい攻撃を避けながら改めてアーナはソハネの凄さを思い知つた。5mと言えば、アーナの一番とする得意技が届くラインで、そのぎりぎり届かないラインにきっかり現れる。それ以上遠くになると今度はアーナに簡単に避けられる為意味な成さないだけでなく、大規模闘気技を使うきっかけを与えてしまう。だが、アーナの方も直ぐに攻撃するにはわけがあり、分裂したかのように別れる中級転移魔法『別移』を使われると厄介であり、ソハネの必勝パターンにはまってしまう可能性があった。それほどまでに両者は手の内を知っており、又手の内を知っているからこそ、両者とも小出しにするだけで動けずいた。

その間も何十何百と攻防が続いている。今ぐらいの攻防なら一日二日と余裕でできるが、そんな時間は無く、動くきつかけもない。現状では二人ともミスが出るのを待っていた。そしてある人物も虎視眈々と両者が弱るのを待っていた。

第三十話 『絆と裏切りと絶望と02』 (前書き)

遅れてすみません
それではどうぞ。

第三十話 『絆と裏切りと絶望と02』

一年前とは大違い…強くなったねアーちゃん。ソハネは小さく笑みを浮かべ闘いながら誇らしげな感情でアーナを見ていた。一年前、アーナとソハネは実はアーナの方が一騎打ちでの勝率が良かった。当時のソハネは簡単な転移魔法でも一秒近くかかり、アーナの方も今よりも速度が遅かったが、結果として6割ほどアーナが勝っていた。だがこの一年間でソハネは何倍も強くなったと思っており、又それを自負するだけの実感もあった。事実そのままのアーナの実力だったなら確実に終わっていた。しかしあの出来事からアーナはいつにもまして努力し得た力だった。

アーナが攻めソハネが転移する。このまま耐久戦になろうかとネール達が思った時、変化は唐突に訪れた。誰かから出たか分からないほんの僅かな汗が額から顎を伝い地面に落ちた。それが本当の死闘の合図。

アーナは弾かれた様に武器を後ろに投げ体操選手顔負けの側転した後、後方に飛び後方宙返りし。

「勇傑の調ケンペア〜！」

いつの間にか一つとなった剣を左手に持ち突きの様に…だが両方の切っ先は横になっている。右手を2刀剣がくっつけてある部分に叩きつけた。

まるで弓矢から出る閃光の矢の様に一瞬にして一直線にアーナの目の前まで飛ぶ…が、ソハネは既に別移を使っており分身の一つに当たったに留まった。

予想はしていたんだけどなく前より多いよ。アーナは内心で愚痴る。昔のソハネだったら一度に3つほどしか分身できなかったが、今では6体まで可能となっている。だけどもまっけないんだからね。歯を強く噛み締め、ひたすらケンパーを放つ。しかも速度は徐々に速くっている。この技は、いわば諸刃の剣で、限界を越えた拳の速さに体の負荷が耐えきれず腕が悲鳴を上げ、腕の数か所から血管が切れ、拳が真っ赤に染まっており、支えている左手も余波と衝撃で肌の色がどす黒く染まっている。足も既に十八人に別れたソハネの全方位攻撃と呼ばれる、分身同士で敵を囲み、逃げる隙間がなく魔法を放つ攻撃の前に、先ほどより四倍以上の速度で気の壁を使い攻撃しながら避けているため痙攣しかかっていた。

くっ…きつい。有利と思われるソハネも実は色々と限界だった。別離の欠点は思考回路を分身に幾分か取られるため、転移魔法のスピードが若干遅れ、そのせいで本物の方に攻撃が向かってきた時、アーナの攻撃スピードの方が転移魔法を使うより早く、数か所に傷が見られる。悟られないよう、さまざま転移した後、情報追加し分身にも同じ所に傷をつける。先ほどのアーナの攻撃でソハネは額の右端を薄く切り、つうーと血が滴り落ちる。

危なかった…でももう終わり。ソハネは勝利を確信する。全方位攻撃は二十四人にならなければ本当の真価は発揮できず、アーナに避けられた様に若干の隙間が存在していたが二十四人になればそれが無くなり、文字通り一部の隙もない陣が完成する。

転移した次の瞬間にはソハネは二十四人になっていた。アーナの方も唯逃げ回り攻撃していたわけではなく、ある策の準備をしていて、それが今完了した。これで私の勝利は間違い無しだよ。アーナも又、勝利を確信し限界ぎりぎりの体に鞭を打ち最後の力を振り

絞り、顔は笑顔で固定し、唇の薄皮が破れるほど歯を噛み締める。ソハネも高揚感を抑える気もなく楽しげな表情をしていた。

皮肉にも両者が同時に実行に移った。観察者には都合の良い展開に。

「…チエックメイト」

「これで終わりだよ」

第三十一話 『絆と裏切りと絶望と03』 (前書き)

だいぶお待たせしました。リアルが異様に忙しくて時間がとれずようやく落ち着いて投稿できました。

その分少しでも文字数が多いですが、それではどうぞ

第三十一話 『絆と裏切りと絶望と03』

こと戦いにおいては、始まりがあれば必ず終わりは存在する。この戦いも終わりを迎えようとしていた。

「…ホーミング・レイ」

ソハネのフィニッシュスタイルであり、絶対不可避攻撃ホーミング・レイ。魔法防御や気の防御を使えばダメージを抑えられるが、ソハネもアーナも使おうとはしない。

ソハネはさきほどまでならウインドを使っていた。元来転移魔法使いは、その特殊性から他の魔法や気の技は使える物が少なく、ランクも低い。しかしソハネは歴代最強と謳われる転移魔法使い。転移魔法師では不可能とされていた聖魔法も使え、ホーミング・レイも聖魔法の一種で、棍棒の様な筒型レーザーが敵に当たるまで追跡する。その威力はアーナを殺すのには充分で、人体はもちろんの事鱗が硬く鉄壁の防御力を持つ竜種でも貫通する威力を持ち、それが二十四発も打たれ、しかも防御手段を使わない状態で対峙すれば大抵の者は生きていられない。

しかし、アーナも歴戦の雄。唯震え死を待っているだけの弱いものでは三流、逃げるだけなら二流、立ち向かうのは一流。相手の出方を予測し自分のやるべき事をやるため動くのは超一流の証。ソハネがホーミング・レイを放つ前、アーナは両刃状態を解除し、クロスさせるよう顔の前で剣を持つ。

ここ一番でアーナ分かっていたのだ、ソハネの本体の位置を。方法は、血を方法は、自分の血を相手の衣服か体に付着させることである。

ソハネも多分分かっていていると思うが、アーナにとって最後は真つ向勝負に行く決めていた…。全ての気の力を足と先ほどの状態から掲げる様に上げた剣に力を込め、擦じる様に回転しソハネ本体に向かつて飛んだ。

「天空の風ヴェルシュ」

速気による爆発的な加速と高速回転し敵に攻撃する技でクロスした剣はまるでドリルの様に当たった部分をえぐり取る。その事からブラッディーロードとも呼ばれている。

一つ…れば私の勝ちだよ」

高速の世界の中、アーナはコマ送りの様にソハネの魔法が見えたが、見えているからといって必ずしも避けれるとは限らない。アーナの速度を考えると二十三本は避けられるが、唯一つ、ソハネ本体からの攻撃は避けられそうもない。

「アアアア~~~~!!!!」

アーナは右肩を抉られ、命に別状はなかったが、気の遠くなりそうな激痛を紛らわす様に、思いの丈をぶつける様に吠え、ソハネをとらえた。

「はあ〜…やった〜、くう〜…紙一重で私の勝ちだね〜」

「……残念」

アーナの剣はソハネの首元でぴたりと制止し、数瞬遅れてソハネのレーザーも、アーナの背後から当たる寸前で消えた。と言う事で勝者はアーナなのだが、この絶好のタイミングを待っていた人物達

がいた。

「豪＋カブレイク」

「鬼神流・桜散花奥義・カルネ涙刈音」

ガラドは狼の遠吠えの様に咆哮し斧を地面に突き刺し、地震が起きたかのように地表が盛り上がり鬼華は桜の形をした気を大量に発生させ剣をアーナの方に向け、標準をセツトし桜気をそこに向かわせた。上の階でも実は克蘭ツが鬼華からアーナの位置情報をもらい地面を壊していた。そうネールをチームに最初誘った時から、鬼華達は今までこの機会をずっと待っていた。

「どうして…ですか？」

先ほどの攻撃で落盤しこの階の半分以上が埋もれ、アーナ達の生死は不明。ネールは虚ろ気な目で茫然と呟いた。ネールにとって信じられない出来事だった。苦しい時も数えきれないピンチの時も、信頼し合い時には笑い、方針の違いなどから時には衝突し、怒り合い、誰かがスランプに陥り、誰かが暗く悲しい時は、共に励まし合ったかけがえの無い仲間だとネールは思っていたし、皆そう思っているのだと信じていた。しかし…現実には残酷だった。

「私の本当の目的はアーナの抹殺でございます。そのためにネール殿を誘ったのでございますよ。…すいませぬネール殿」

「がはは、俺様様は傭兵として雇われたってわけだ。悪いな譲ちゃん」

鬼華は何かに耐えるように、ガラドは気楽に答えた。これは死に

対する認識の差で、鬼華は誰かを殺すのは初めてで、家の中にある道場で訓練するだけだったので、ネールほどではないが余り世間の事は知らず、いわば温室育ち。

一年程前、父から言われた驚きの言葉と、その日から行われた奥義涙刈音の伝授。肩、手、肘、二の腕等々、至る所が裂け、骨が折れたり切断された事は一度や二度じゃなく、一年たつてようやくものにできた。その技を人殺しに使った事による罪悪感と……。

一方ガラドは、小さな頃から傭兵として血生臭い依頼もこなし、裏側の事情も知っているため、いつもと全く変わらない陽気な表情で、ミスをして軽く謝る位の声色。

ここムーアの中心都市以外にも様々な場所で様々な種族が生きしており、ほんの一握りの人達が栄光を求めてやってきて、ガラドも一年前鬼華家からの依頼でここに来た。理由は単純に自分の力を試したかった。唯それだけだった。エンドレスや学園地下迷宮以外にもモンスターは存在するが、ムーアエリア内最強クラスのモンスターでも26階クラスのモンスターと同等のレベルである。又ヒートやウォール等のエリアにもモンスターは存在し、やはり同エリアから登るエンドレスの26階クラスまでとなっている。ちなみに今までの歴史の中で侵略しようとした国はあったが全て返り討ちにあった要因の一つとして挙げられている。

「何故アーナは死ななければならなかったのですか… 教えてください
い」

声や口はわなわなと震え、へなへなとへたり込んでいたが、目だけは明確な意志を持ちキツとガラドと鬼華を睨んでいた。

鬼華は口を開きかけて躊躇し、ぐつと唇を噛み締め、何かを堪えるような表情で、振り切る様に無言でネイルの横を通り過ぎ、階段の方へと向かい。その姿は泣いているように見えた。

一方ガラドの方はと言つと。

「がはは、俺様様から一つ忠告しておくぜ譲ちゃん。んな事ばっか言つてつといつか死ぬぜ。じゃあな、次あつたら容赦しねえぜ」

軽くネイルの肩を叩いた後、鬼華の後を追つた。

「どうすればいいのでしょうか」

妹に縁を切られ、仲間には裏切られ、母親には嫌われ父親には相手にしてもらっていない。体には目立つた傷は無いが、ネイルの心はもうぼろぼろで、二人が去った後、先ほどの目は影も形も無く、あるのは途方に暮れている表情と所在な下げに座っている体を持つ、一人の何もできず呆然として一人の少女だけ…の様に見えるが、だが実際は違っていた。

鬼華達が去つて二分が経過した頃変化は突如として現れた。まるでDVDの巻き戻しのボタンを押しているかのように瓦礫になった物達が元の場所へと戻り、中から出てきたのは、いつの間にか傷が治り闘う前の状態へと治っていたソハネとアーナの二人だった。

「良かった。これでソイドさんとの約束を守れた」

「演技だと言つても負けるのは何かやだったな」

ソハネはソイドとの約束を守れた事で安堵の表情をしており、ア

「ナはわざと鬼華達に負けたとは言え、憤慨しぶんすかと頬を膨らましていた。

ネールは理解できる許容の範囲を越え、金魚の様にパクパクと口を開けているだけだった。

今日一日で目まぐるしくネールの環境が変化し、すぐに対応するのは困難と言えるが、それが合理的考えができなく、一流ではない由縁の一つだった。

「アツ…アーナ」

近距離でないと分からないような小さな声だったが、アーナは反応し、ここで初めてネールの存在に気付いた。

「あーお姉ちゃんまだいたんだあ。もうすぐ終わるからお姉ちゃんは何もなくてもいいよ。と言うか何もできないんだけどね。」

けらけらと笑うアーナに対し、ネールは一瞬背筋がぞつとしたが、妹なら何か教えてくれるだろうと意を決して、回らない頭と傷ついた心を振り絞り、尋ねた。

「アーナ…」

ネールはその先が言えず、代わりに唾をこくりと飲む。理由は、一瞬にして移動したアーナがネールの首元に剣が突きつけたからだった。

「お姉ちゃん、今日これで二回死んだよ。ガラドさんも言った通り、弱いんだからそんな事ばかり言っているとほんとに死んじゃうよ

」

だが怖いもの知らずなのか、大物なのかただの馬鹿なのか、再度アーナに問うた。

「お願いアーナ。何があつたか、何をしようとしているのか教えてください。」

この単純一途さに、さしものアーナも開いた口が塞がらないといった感じだが、当のネールは至って真面目である。変わりにソハネが口を開いた。

「言っていていいよアーちゃん。どうせ何もできないから」

ソハネにとつてみればネールに今回の計画を言うの言わないのは、さして重要ではなく、むしろ時間の方が重要で、このまま時間がかかるのは嫌なので言ってもらおう…という感じだった。

「じゃあ仕方ないな〜言っちゃおうよ〜」

もったいぶった様にアーナはごほんとかげらいをし、話し始めた。

授業が終わった後、先生達がネール達が帰って来ない事を不思議に思い、最深部まで行ったのだが、既にそこはものけの殻だった。

第三十一話 『絆と裏切りと絶望と〇三』 (後書き)

次回からソイド視点になり、第一章後半戦に突入します。
今回はこんなに遅れることがないよう頑張ります。

第三十二話 『絆と裏切りと絶望と04』

一方その頃ソイドはと言うと、豚小屋の様な宿屋で寝ている…訳ではなく、とある場所に来ていた。

「無駄にでかいな」

ソイドは目的の建物を眺める。ここは高級住宅街の中でも一際大きな家でゆうに五百坪以上ある。高さ三m程ある門に、色とりどりの高価な装飾がされている悪趣味な庭。家の外見はまるで城の様だった。そして三十人はくだらない、そこを守っている冒険者や傭兵の姿。それだけでかなりの大物がここにいる事が分かる。

「行くか」

ソイドは気配を消して見ていた二百mほど離れた曲がり角から徐々に歩き、正門の前に立つ。

「怪しい奴めここは通さん」

「即刻帰れ」

門番をしていた二人の冒険者が胡散臭げにソイドを見る。おそらく誰でも今のソイドの格好を見れば似たような感想になるだろう。上半身はよれよれの薄皮のコートに、穴があきそうな擦れてぼろぼろの布製の服とズボン、顔には道化師のマスクをつけており、見るからに怪しく浮浪者と間違われてもおかしくない格好で、高級なものにポツンと現れた異純物が如く場違いだった。

「カーヴァル家当主に会いに来た」

無機質で平坦な声でソイドは言ったが相手にとっては笑いの種に
しかならず、辺り一面に笑い声が鳴り響く。

「寝言は寝てから良いな」

冒険者達一人が鼻で笑いながら言い。

「大道芸やるのなら中央広場に行け」

一人が馬鹿にしたように言い。

「いいぞ、もつと面白い事言え」

一人が囁し立てる。概ねこの三種類の反応の冒険者達だったが、
ソイドからの反応がなく、本気と分かるやいなや、手持ちの武器を
構えた。

「その方が早くて助かる」

仮面の下ソイドの顔はにやりと笑っていた。好都合だと。ソイ
ドは指弾でまじかにいた門番二人を倒した後跳躍し、門を軽々と飛
び越え。

「月下の太刀」

腕を横に振るった。本物の三日月の様に美しく、シルバーを纏っ
たカマイタチは次々と冒険者達を薙ぎ倒し、残ったのは六人ほどだ
った。

中級以上の冒険者は六人程って所か、舐められたものだな。ソイドは心の中で苦笑する。今の攻撃は意図して速度を落とし、中級冒険者、ヒートやウォールで活躍する冒険者達なら避けられるレベルのものであったが、結果はこの通りである。実はこの前の会議で、アーナと天空十二神の一人カーヴァル家当主との入れ替え戦の話が、ソイドの発案で議題に上がり、今日この日ソハネが実力を見て相応しいかどうかを判断するという事で話は纏まり、アーナとソハネの対戦は偶然ではなく必然。ネールとの事はいでにソハネに頼んだ事で、一番重要な事は、裏切り者や邪魔物をあぶりだす事。裏で不穏な動きを見せていて目をつけていたクランツ家は見事に引掛かり、意外だったのは鬼神家もそれに続いた事だった。鬼神家は厳格さと忠誠心は天空十二神の中でも随一で、ここ三百年は誰からも入れ替え戦の指名は無く、信頼も厚かった。現当主とソイドとは親交があり、この前の会議でも顔を合わせ、話をした時には変わった事が無かったのだが。

一年も経てば…人は変わるか…いや裏切りこそが人が本来持っている闇の部分なのかもな。

ここ一年間の中でソイドはそういう事を嫌というほど見てきており、悲しくはあるがそれだけだった。理由はどうあれソイドの頭の中で既に鬼神家は敵として認識されていた。

ソイドは頭を切り替え再び冒険者の方へ眼を向けると、陣形を組んでおり、れんどで言えばこの前の新人冒険者講習会でのネール達の陣形など比べ物にならないが、上級者から見るとまだまだにうつる。

サラマンダーの陣か。そう思考しソイドは構える。攻撃重視の陣で外見からだが、重戦士二人に遊撃士一人に剣士一人僧侶一人に魔術

師一人、おそらくこの陣形をメインで戦っているのは分かるし、このメンバーでは理想的な陣形だが、それは格下か同等か少し強い者にしか通用しなく、ソイドにとっては赤子の手を捻るより簡単に勝てる。だが、簡単に勝ってしまったのは色々と計画に狂いが生じ、彼らのためにもならない。

彼らは、集まった中で唯一ソイドを最初から馬鹿にしていなく、今回は割の良いクエストだったので受けただけであった。そういう人物たちに対してソイドは寛容であり、問題があった場合は、何とかいい形にしてあげたいと常に思っている。又内に入れた者に対しては大甘と評判である。

さてどうするか…。魔術師や僧侶が詠唱を初め、前衛はじりじりと距離を詰める中、ソイドはそんな事を考えていた。

第三十三話 『絆と裏切りと絶望と05』

そうこうしている内に相手の詠唱が終わり。

「ヴィレホール」

「アピイリスト」

魔術師が氷柱の様な氷の刃を複数出現させソイドの方に一直線に飛び、僧侶の方は身体強化を前衛達にかけた。

戦法的にも悪くないな。ソイドは感心しながら目の前の攻撃を見ていた。魔術師が攻撃し、当たればそれでよし、避けた場合や防いだ場合でも身体強化した遊撃士が死角を突き、それも防がれた場合は、さらに後ろから、剣士が遊撃士が作った隙を突き、最後に重戦士が重い一撃を放つ。実に理に敵った戦術で、信頼関係が成り立っていないければここまで息のあった連携はできず、このままいけば上級者、ひいては名を残す固定パーティーになるのでわないかとソイドは感じた。

コミュニティ内で、初心者はまず大手のコミュニティなら教育係が存在するが、中小のコミュニティは人数が空いているパーティーに入り、先輩方に色々教えて貰い、そのままそのパーティーに居る物は居るが、大半は初級者になる頃から、自分のパーティーを見つけるため悪戦苦闘し、中級者辺りから固定のパーティーが増え、上級者になる頃には、大多数が固定パーティーを組んでいる。毎月ムーンアーマシーリまでどこでも読める毎朝発行の新聞『アクチュアリ』でパーティー貢献度ランキングや、今週のパーティーランキングがあり、今日の注目パーティーと言うのもあり、そこに載るのが一

つのステータスとなっている。ちなみに冒険者が持っているリンクでも見る事はでき、マシーリで発見されたパソコンを二回り大きくした伝送装置で各層に転送しており、本部があるのはウォールである。

考えても仕方ないか。とりあえずソイドは氷の刃を右に避け、遊撃士が自慢の足と強化されたスピードで、意図的に作った死角からシミターと呼ばれる短剣の様な小型の曲刀を足を狙って薙ぐが、軽くジャンプした後相手の手首を掴み、武器を地面に突き刺せ、踵落としをくらわし、続いてきた剣士は、顔面目掛け一直線に低空に飛び、突きを放つ、まるで弾丸の様なスピードに慌てることなく、空中に宙返りし避け、後頭部にひざ蹴りをくらわせ、重戦士二人には。

「真空連脚」

両足にシルバーの気を纏い、素早く右足を伸ばしたまま十字に建て横に蹴り、横回転し、勢いよくその中心を左足で蹴り突く。すると突風のように暴力的な風が、重戦士達を襲い、後方に吹っ飛び、木に当たりみしみしっと言う音とともに止まる。

「そろそろ本気を出せ…出さなければ…殺す」

ソイドは無言を言わさぬ口調で苛烈な目をパーティーに向ける。顔を見ると全員が人間の様に見えるが、顔が平坦で何の特徴も無くさらに言えば全身に魔力でコーティングされていた。そこまで分かれば何かしらの方法で姿を変えているのだろうと予測できる。

その言葉を聞き苦笑しながら倒れていた男女達が立ち上がる。

「すみません、こちら名も名が売れてまして、失礼ながら噂どおりか

どうか確かめるため変装していた次第です。やはり、噂なんてものは所詮噂には過ぎない、やはりマスターはマスターでしたね。はあく、まったくもって割の合わない仕事です。この声を聞けば誰か分かると思いますけど、私は人間ですのであしからず」

リーダーと思わしき剣士の女は、立ち上がりそう嘆息する

「はあくあ、とっとと終わらせて眠りたかったのによあく、誰だこんなしちめんどくさい仕事取って来たのは」

遊撃士の女が後頭部をさすりながら憤慨し。

「私です。なんて、うふふ」

僧侶の女が、自分の言葉がつばに入ったのか、小声で腹を抱えて笑い。

「誰でも分かるでしょそんな事ぐらいは。リーダーのフェリよ」

魔術師の女が白けた表情で投げやりに言い。

「分かん」

「知らん」

重戦士の男二人は我関せずだ。

そして…徐々に本来の姿になってゆく。

第三十四話 『絆と裏切りと絶望と06』

剣士でありパーティーのリーダーであるフェリは、髪が緑に変色し、腰ぐらゐまで伸び、淵がシルバーのインテリメガネをかけ、眉を少し寄せ、眉間にしわを作り、トマトのような赤く小さな唇に、人差し指を載せていた。

遊撃士の女は、横についている耳が無くなり、真上に猫耳が出現する。髪は赤に変色し瞳の色が金色に変わり、その姿から女がスピード特化型の種族猫族だと分かる。

僧侶の女は顔全体が髪に覆われ、見えないが、ソイドには心当たりがあった。

目玉族か、厄介だな。ソイドは内心ごちる。目玉族とは、その名の通り目玉が特化した種族で、目が一つしかないが巨大で、種族に伝わる特殊能力森羅の目は、見た者を炭化させる能力があり、その瞳を見た者で生き残った者はいないとされている。

魔術師の女は顔自体変化は無いが、代わりに体全体が縮み、前の身長的一半以下になる。これはホビット族の典型的特徴で、人間の平均身長的一半以下だが、人間の平均魔力と比べ物にならないくらい膨大な魔力を有しており、魔法関係のクラスに非常に適している種族である。

二人の重戦士は、完全武装のフルアーマーを着ているため、顔は窺い知れないが、先ほどより体が大きくなり唯一見える瞳の色は、こげ茶色に変わっていた。

おそらく岩族だろう。ソイドは確信に近い思いでそう結論付ける。岩族の特徴はオーク族より強度な茶色の岩皮膚に頭の形が三角なのが特徴で、その強度な肉体と力は重戦士等に向いている。

それにして運が悪いな。まさかこんな所で自分の弟子に会うとな。ソイドは自分の運の悪さ加減に腹ただしく感じた。フェリはあの日の前に2ヶ月間ほどソイドが弟子にしていた人物で、物凄く理知的で、飲み込みも早く、向日葵の様に笑顔がすごく可愛い子だったが、今では毒を吐き、ほとんど笑う事は無いクールビューティーと化していて、全く性格が変わったかのように見えるフェリを見て、ソイドは少し心苦しく感じた。

俺のせいで変わってしまったんだな。目を閉じあの日からの日々を振り返る。目の前に映るのは幾多の屍、裏切り裏切られ、殺し殺されかけ、それらを乗り越え、ただただ上を目指す事しか考えられなく、待っていたものは…。

地獄だった。

「お久しぶりですマスター深紅。アツ、今は一階のソイドさんですか。別に私としては、どっちでもいいんですけどね。少し性格変わりましたか？ 昔は誰からも好かれる明るく元気で、何者にも恐れる者は無く、私よりも子供っぽい一面がありましたのね。最も私も変わりましたから人の事言えないんですけどね。アツ、コミュニケーション作っただんですよ、名前は『森の宿り木』、第二都市『ウォール』を拠点とする構成員五十名程の中ギルドです。最前線で活躍していたマスターの、冒険者やそれに関わる人達から尊敬や憧れの念を抱

かれ、かくいう私も自慢でいつかは入りたいと思っていた伝説の「ミニニティ」『天空への階段』よりかは、遥かに及びませんけどね」

そこまで喋り、フェリはソイドの方を見る。その瞳は何処か期待している様子だったが、ソイドにしてみれば、その期待にこたえるものは既になく。

「その名は捨てた。今ここにいるのは、唯一つの約束を守るためここにいる、浮浪者同然のただのソイドだ。だから来い、この一年間でお前の成長した様子を見てやる」

フェリ、お前の期待にはこたえられないが、お前をワンランク上に導く事は出きる。それが、俺にできるたった一つの事で、弟子への手向けだ。

目を見開き仮面を外した。これは、ソイドが本気になった時の合図。先ほどまでなら、少し本気を出して、適当な所で倒すつもりであったが、フェリのために考えを変えた。その事により計画は失敗するかも知れない。ソイドはいざという時は奥の手を使うことを決心し。

ソハネ…すまない。

ここまで一緒に計画を進めていたソハネと…に心の中で謝罪し、瞳が徐々に赤みを増し、深紅になる。

「もう言葉は必要なさそうですね。アツ、私一人でやりますので皆さんは適当にくつろいでください。割の合わない仕事でしたが、私にとってはお金には変えれない最高の依頼でした。マスター、弟子から引導を渡してあげます」

そして…戦いは始まった。

第三十五話 『絆と裏切りと絶望と07』

本名フェリ・アルベルト。アルベルト家の長女で、一年と半年前、ソイドの弟子となつてからめきめきと頭角を現し、主に長剣での突きを得意とする事から「トリユースト」と呼ばれ、突きのみならず、当時から天空十二神の一人、剣士「ゾルク」を越えると言われている。

挨拶代りと言わんばかりに、距離を詰めフェリは剣にプラチナのオーラを纏わせ、三連続の高速突き「三月」を頭、喉、腹に狙いを定め放つ。ソイドはそれに合わせるかのように三連続の高速パンチを放ち、普通は串刺しにされるが、全身にプラチナのオーラを纏う事により相殺する。ちなみにプラチナは五十人程しか使えない最高峰の気である事をここに記載しておく。

相殺した後、ソイドの踵落としがフェリの頭上めがけ振り下ろされるが、それは剣でガードされる。そこから這うように滑らせ真っ二つにしようとフェリは画作するが、もう一つの足でそれを防ぎ、その勢いで後方に飛び再び距離を取る。その間わずか三秒。しかも両者とも余力を残していた。

「腕は鈍ってないようだな」

「それはこっちのセリフです。一階ばかりですっかり腕が鈍ったと思います。まあ、それならそれでできたぎたにやっつけて、身の程と実力の差を思い知らせた後、当主に引き渡そうと思っていましたが、良かったです」

「言ってる…直ぐに分かるさ」

そう言い、次はソイドから仕掛ける。

「真空連脚」

速度は先ほどの比ではなく、威力も二倍近くあるが。

「五月雨風月花」

フェリは五点を高速で突き、その点は五角形に見えた。その中心を突き、ジルバーク家特有の刻印である雷気を込める。髪が逆立ち周りの景色が青白く変化し、瞳も蒼に変わる。

暴風が青白い部分に触れた途端爆発したかの様にけたたましい音が鳴り響いたが、二人とも微動だにしていなかった。

フェリは内心嬉しかった。噂で聞くソイドは墮落し落ちぶれてしまったと聞き、すぐにいきたかったが、だがコミュニケーションリーダーとして、なかなかムーアに行く事は出来ず、今日までいたって来たわけだが、今日改めて闘ってみて、昔以上に強いと感じた。最強の天空十二神と謳われた以前より。だから、以前よりも強くなったが、まだまだ足もとにも及ばない自分は、最強の技で持てる力を全てを出し切ろう。うん、そうするしかないですね…まったく踏んだり蹴ったりですね。

久しく笑わなかった笑顔をソイドに向ける。

「これで最後ですマスター。まあ私が勝つでしょうけどね」

「フェリ、弟子が勝つなんて十年早い」

ソイドも微笑する。やっぱり本質は変わって無かったんだな。姿や形は変わっても根っこの部分が変わって無かった事に安堵し、フェリの最後であるう攻撃に対し受けて立つ構えを見せる。

「これで終わりです。ベクシル」

フェリは半径十センチほどの的のような雷を三十個ほど出し、それを一瞬にして付く。一秒間三十二突き、それがフェリの今の限界だった。

突かれた瞬間電磁砲の様な蒼雷がソイドを襲う。

第三十六話 『絆と裏切りと絶望と08』

「紅蓮の嘆き」

右手を前に出し扉ほどの、魔法の紅蓮と気のプラチナを融合した壁を作り、回避せずに受けて立つ。一つ当たることにもしみし…つと音が鳴り、大抵の攻撃ならびくともしないこの壁を少しずつではあるがダメージを与えている事からフェリの攻撃の威力が窺い知れる。

十個目でとうとう壁に小さなひびが入るがソイドは顔色一つ変えない。強くなっている…だがこの壁を壊す事は出来ない。一発のダメージと壁の耐久力を換算し、いけるとふんでいた。二十発目三十発目とクモの巣状にどんどんとひびが大きくなり。最後の三十二発目…もうひびだらけで、前が見えない状態だったが、壁は壊れなかった。

しかし、ここまではフェリの予想どおりだった。やはり止められてしまいましたか、ですが、これで終わりだと思ったら大間違いです、まあ、マスターならそれは分かっていると思いますけど。先ほどの攻撃は時間稼ぎにすぎず、限界までためを作り。

「トリユースト！」

ギシギシと音が鳴りそうなほど弓なりの姿勢から一気に最高速でフェリは放つ。雷と同じような轟音で、5mほどの荒れ狂った巨大なプラズマがソイドを襲う。フェリの代名詞にして、あだ名が付いている程、最強にして絶対の自信を持つ、必殺必中致死攻撃技『ト

リユースト』。かのゲイボルクと同じで、この突きから逃れることはできず、必ず当たると言われている。違うのは、一万ボルトの電流と同じ位プラズマが流れているため、竜族や雷獣族なら体制があつて当たり所が良ければ死ぬ事は無いが人間族なら掠っただけでもショック死する。

バリン……っと紅蓮の壁が音を立てて破壊される。紅蓮の壁は四層構造で最初の一層すら破られなかったが四層すべてが割れ、ソイドは感嘆する。

やるなフェリ、むしろやりすぎな程にな。ソイドならどうにかすると信頼して出した技だが、本人にしてみれば有難迷惑と言っつか、シャレにならないというか、掌に冷たい汗を感じ、ぐっと拳を握る。

「メガトンハンマー（真実のための拳）」

紅蓮の壁が破られたと同時に上から元寸の三十倍はある紅蓮の拳が、巨大なプラズマを叩きつぶした。と同時に来る悪寒。フェリの時にも少し感じたが、今度のは桁が違っていた。

「……くそっ」

できうる限り最高のスピードでフェリを掴んだ後。

「逃げろお前等！」

フェリのパーティーに焼け石に水だが、あらんばかりの叫びで、逃げるよう足す。

突如光の雨、剣聖の大群、黒の血水、そして天使の羽根。ソイド

やギルドの面々など関係なく、無差別に、お構いなく、所構わず地上に乱れ打たれる。そのどれもこれも先ほど放ったフェリの技と同等で、さしものソイドも、攻撃を放った直後の状態で、これを全てを防ぐ手だてはなく、逃げの一手だった。

倒れていた傭兵達は肉片も残らず、文字通り跡形もなく消滅し、中心から徐々に全体に広がり…巨大なクレーターができたかのよう
に原形を止めず消え失せた。

「ぐふふふふ。これで、あのゴキブリは始末できたかのお」

耳に嫌悪感が残る野太い声でこの家の主、フェルマン・カーヴァルは最上階のテラスで肉をかぶりつきながら自慢の巨体を揺らし、笑っていた。

第三十七話『絆と裏切りと絶望と09』（前書き）

一回ちょっとデータが消えて、慌てて作り直して…誤字多かったですいませぬ。

今回も、少ないですけど第一章中盤〜ラストに向けてのカギとなる部分となります。
それではございませぬ。

第三十七話 『絆と裏切りと絶望と09』

……声が聞こえる。

「……スター！ ……きてください……スター！」

俺のからだを揺らし、涙声で叫ぶ声が。

ソイドは紅蓮の壁で頭上からの攻撃を防いでいたが、フェリのパーティーが逃げられないと判断し、今までの5倍ほどあり、パーティー全員がすっぽりと埋まるほどの紅蓮の壁を十層作ったが、自分の守りまで手は届かず、程なく守りは破壊され、一人だけなら全部避けきることも可能なのだが、フェリを抱えている状態の今それは不可能で、致命傷にならないよう、最小限のダメージになるよう走っていたが、肩と踵はざっくりと裂け、脛の肉が一部吹き飛び、背中がぱっくりと割れ、激痛で意識はとうに失い、無意識化でどび込むようにフェリのパーティーの所までたどり着いたのである。

うつすらとソイドは目を開けると、そこには先ほどまでのフェリから想像出来ない位顔をくしゃくしゃにして泣いていた。

僧侶がソイドに治癒魔法をかけ、魔術師がミラー魔法で姿を隠しているのが今の現状だ

又悲しませてしまった。ここに居ない誰かの顔を思い浮かべ、外見は修復したが、内面はまだまだ動ける状態ではない、ぼろぼろな体に鞭を打ち立ち上がる。

「マスターまだ寝てないと」

フェリの制止を手でさえぎる。文字通りもはや一刻の猶予もよこされていなかった。

俺の考えが真実だったなら、容赦は無い相手だろう。

目を閉じ思考を整理してから開く。

「まず六人とも固まって聞いてくれ」

目が真剣で有無を言わせない気迫でソイドは言ったのでフェリのパーティー全員が固まる

「いいかよく聞け。今からお前等を俺の信頼できる相手の元にする。フェリ、会えて嬉しかった……」

ソハネから万が一の時のためにもらった逃走用の転移玉を使い、こちらに来ようとするフェリを他のメンバーが押しとどめ。

最後ぐらいは昔の顔を見せるよう努力しよう・ソイドはそう思い昔みたいに無邪気な笑顔になり。

「じゃあな」

転移玉がフェリ達の近くに落ち、白く発光し、次の瞬間その場に誰も居なくなった。

さてと……。気を引き締め空を見上げる。

上空にいたのは四人。

天空十二神*の一人、漆黒の甲冑を身に纏い黒い気を放っている剣神ゾルク。続いて天空十二神の一人で、整えられた黒髪に、堀の深い威厳に満ちた顔、頭の両端に十センチほどの角が生えている、鬼神家当主鬼神正宗。そして、天空十二神の一人、様々な種族がいる中で最強の種族と言われる竜族で、一mほどの尻尾があり、オーク族や岩族おも一発で粉砕する圧倒的なパワーを持つ龍神ウルベ。ここまでならソイドは予測していた。ゾルクはカーヴァル派で、フエリを異様なまでに敵視しており、師匠であるソイドには、隠す事も無く嫌悪感と憎悪を前々から向けているので、今回の誘いに乗ったのはある意味当然だとソイド自身も思っていた。ウルベは中立派だが、平穩を望み変革や異常を嫌い、二年前の大変革が来る事を恐れ、それならば潰してしまおうとカーヴァルの誘いに乗ったのだとソイドは推測する。正宗については、先ほどまで知らなかったが、戦闘前にソハネの報告で知りある程度整理はついていた。

だが……。

「お前もなんだな………フリーラ」

そこには不適な黒い笑みを浮かべるフリーラの姿があった。

第三十八話 『絆と裏切りと絶望と10』

フーラは昔、ソイドとは仲が良かった。互いにコミュニティは違ったが、何回も一緒に潜った事もあり、フーラも以前は友と呼べる間柄だった。だがあの日8全てが変わってしまった。あの日以来…あの人を失って以来元気が無く、いつも物憂げな表情で空ばかり見ている。そこを突かれ天空十二神交換試合にも負け、コミュニティは解体、精神的に限界で、だけどぎりぎりで繋ぎ止めていたのは、やはりあの人だった。一年後…帰って来たものの中にあの人はいなく、ソイドを問い詰めたが…別人に生まれ変わったソイドからはかわされるばかりで、色よい返事は聞けなく、ギルド職員となり監視していたが何も行動は移さなく、むしろ行動を移したのはソハネの方で、あの日の前に五人もの若者達が一斉に天空十二神を辞めたが、ソハネは交換試合で圧倒的な実力差で天空十二神に返り咲き、前より数倍強くなったソハネを目の前にして自分は何やっているのだろう、アーナやジョシユネの待機組もかなり強くなっている中で自分は後退している。夜そんな事を考え枕を濡らす日々続き…ある日、聞いてしまった…ある日以来ソイドはフーラにとって敵になった。憎悪が力となり以前の力以上になるのにさして時間はかからなく、鬼神家やカーヴァル家が秘密裏に行っていた作戦にも喜んで参加した…一つの条件を約束させて。

そして…今、そのチャンスが目の前にあった。一つの条件それは…。

ソイドをこの手で殺す事だった。

「カミユさんの仇、取らせていただきます」

三人は後方で待機し、フーラを地面に降り立ち対峙する。その言葉だけでソイドは理解した。誰かが仕掛けた罠だと。…やってくれるな。当主のフェルマンは『肉達磨』、『脳味噌フライドチキン』等と陰口で叩かれるほど、無能を絵にかいたような人物で、今も天空十二神で居られるのは、ひとえに優秀な長男と二男の暗躍があったからだ。三男のクラントツは父の血を色濃く受け継いだせいで無能になってしまっていたが。

だが不審な点が二つほどある。一つは長男と二男の不在時に行動を起こした点。今までのフェルマンなら保険として、どちらかが居る場合にしか行動を起こさなく、起こす場合は必ずどちらかを呼び寄せていたが、今回はそういった気配は無い。

理由はソイドは彼らを知っているが、雇った冒険者達を捨て駒の様に扱う人達ではなく、対話で解決できそうならば、対話で妥協点を見出し解決し、武力でしか解決できない者はなるべく相手を傷つけない方法で行う。…そんな人物達で、今回に限って言えば彼らを遠ざけている節があり、しかしソイド達を殺す準備は着々と進めていた。それがもう一つの不審な点で、今回の作戦や仲間集め等、人望や知略が無いフェルマンには到底できないことをやってのけた。裏に誰かが居る事はフェルマンを知る人物なら誰だって分かる事だが、その尻尾がつかめない。あぶりだす為に今回立てた作戦も逆に利用された。

せめて一つだけでも！

逃走防止と転移防止用の結界を張られ満身創痍で三人の天空十二神と元天空十二神に勝てるほど甘くは無く…こつなつた時点で自分の命は諦めていた。

すまない、ソハネ、アーナ、ジョシユネ……。

残されたものために、一人でも多く道ずれにするため最後の攻撃を放つ態勢に入る。

「一つだけ言うがカミュが好きだったのは……」

「さようなら……ソイド」

その言葉を遮り、五人が一斉に攻撃を放った。

第三十九話 『絆と裏切りと絶望と1』

ゾルクは剣を高く掲げ、ソイド目掛け縦横無尽に振り下ろす。その数五十動作。それも目端期するほどの時間でだ。その一つ一つがゾルク特有の契約精霊剣聖『ブレイク』、全長三センチの剣の形をし切っ先に目がある精霊達が予測不可能な不思議な動きをし、小さいなりに一流の鍛冶師が作った剣と同程度の切れ味で、ソイドを襲う。

ウルベは口を開け咆哮する。すると突如として口の中に光が集まり、ソイドに向けて放つ。

ドラゴン族特有の技『ドラゴニックプレス』、ウルベのは、他の竜族の五倍以上のパワーがあり、盾や鎧や防御魔法関係なく文字通り跡形も無く消しさる威力を持っている。

続いて正宗は腕を少し切り、その血に気を使い、一粒一粒が血の弾丸の様に一直線にソイドを襲う。これはノ鬼神流・血粒閃奥義・薔薇莫迦。鬼神家の中でもできるものは歴代を通してほんの一握りで、血の一滴まで操る事はソイドすら不可能で、長年培ってきた鬼神家ならでわである。

最後にフーラが細身の剣『レイピア』を地面に突く。

気が、木の根っこに浸透し、の様に土の中を巡り。

「剥いでろ」

ソイドの五メートル四方を根っここの切っ先が槍の様に突きでる。

本名フリーラ・マインスター。マインスター一族は植物と心を通い合す事が出来る唯一の一族で、刻印が木の精霊「アウラ」なのが要因の一つだとされている。先ほどの技は『ルートノブランチ』で、木に干渉し、気の力によって根つ子を伸ばし、地面を突き破り、相手を串刺しにし、フリーラは特に木との相性が良く、竜種の鱗すら打ち破り串刺しにする事が出来る。

そしてソイドは両親指で人差し指を溜め、でこピンするかのよう
にピンと弾く。

最低限の目標は達した…後は頼んだ…みんな。

4つの攻撃が目前に迫り、回避不能、防御は一斉に放たれた天空十二神の四攻撃全てを防ぐ術は自分の防御を照らし合わせても皆無で無駄の中、ソイドは瞳を閉じ……辺り一面光に包まれた。

「終わりましたね」

フリーラは無機質な目でソイドが居た方向を見る。そこにソイドの姿は無く、辺りを見回しても、ソイドの気配すら無かった。終わってみればあっけなかったですね。フリーラはもうソイドは死んだものと思っており、感傷に浸っていた。

「本当にこれで良かったのか？ あ奴の性格からして、そんな事する様には思えぬがな」

ウルベはフリーラの背後に立ち、そうなげかける。ウルベはフリーラがこの作戦に参加した理由を知っており、同時にその話に違和感を感じ再三に渡って考え直す様に問いかけたがフリーラは聞く耳を持たなかった

「いいも悪いも、ソイドはもうこの世に居ないじゃないですか、それよりウルベさんは何でこの作戦に参加したんですか？」

ソイドを殺す事以外頭に無く、他の人の理由は知らなかったフリーラは、何故中立派のウルベが今回の作戦に参加したのか疑問に思った。するとウルベは何処か遠い所を見つめ。

「我はな、齡二千程経ち、もうこの世界に未練は無い。だからと言ってモンスターなんぞに負けたくは無い。我は心躍る戦いの中で全てを出し…死にたいのだ。だから今回の作戦にのったのだ。最も我の思惑とは違っていたのだが……さすがはソイド殿と言った所だ。あの場面で二人も倒すとわな」

感慨深げにうんうん頷いているウルベを無視し後方を振り向くと……ゾルクが全身を紅蓮の炎に包まれ鎧ごと消し炭にされ、遙か後方のフェルマンは脳天を貫かれ、仰向けに倒れていた。

「……仲間のために全力を尽くす、例え自分が死んだとしても決して後悔はしない…か」

いつか言ったソイドの言葉を呟き、フリーラは唇は噛みしめた。

第三十九話 『絆と裏切りと絶望と11』 (後書き)

今年の更新はこれで終わりです。

ソイドがどうなったか・・・は、来年までお楽しみという事で。

それではよいお年を。

第四十話 『絆と裏切りと絶望と12』 (前書き)

遅くなりましたが、新年明けましておめでとうございます。
今年もよろしくお願ひします。
それではどうぞ。

第四十話 『絆と裏切りと絶望と12』

ソイドは目を開けると辺り一面白一色の空間。そうとしか言い様がないほど、それを遮るものが無く、何も無い世界にポツンと一人置き去りにされた。そんな場所だったが、ソイドは落ち着いていた。また……助けられてしまったな。そう、ソイドは一度ここに来た事があった。今回と同じように絶体絶命の状況で。そして助けてくれた人物も検討がついていた。

「時空の狭間によっこそ」

突然現れたのは、白いふりふりのカチューシャに白と黒のメイド服、黒子の様に真っ黒のベールで顔を隠している以外外見はメイドそのものだった。

「……おかげで助かった……ありがとう」

「嘘突かなくていいよ。死にたかったんだよね」

形だけのお礼は見破られ、まるで全てを見通す様に、ベールの奥がきらりと光っており。ソイドはため息を突く。

あいつに嘘ゆっても仕方ないか。前にあつた時ごとごとくソイドの胸の内を暴かれたのを思い出す。ソイドは誰かの役に立って死にたかったのだ。表向きは、計画の途中で自分が死んでしまうのを心苦しく思っていた。だが、目を閉じ死がまじかに迫った時、ほっとしていた……これで皆の元にいける……と。

「そうだな、俺は死にたかった、死んで仲間の」

「甘ったれるな…と言わせてもらおうかな。一つ教えておくけど、ソイドの死ぬ可能性は低かったよ、例えるなら砂漠のど真ん中で何処にあるのかも分からないオアシスを見つけるぐらいかしら。一番高い可能性はウルベの攻撃が他の攻撃を相殺する。彼は貴方との戦い、そして死ぬ事を望んでいたからね、結果としてあの場で貴方だけが生き残り、友であったフーラを手に掛けた事により貴方の心は修復できないほど傷つく。次に高い可能性がソハネが転移術で助ける…ソハネの命を代償としてね。そしたら貴方の心は完全に壊れてしまう。可能性は無限にあるけど、貴方の心が壊れてしまうのは看過できないからここに呼んだ。本当は時空に歪みができるから、あまりやりたく無かったけどね」

その時その場所で、どういう選択をしたかで、未来は無数に枝分かれし、先ほどの行動一つでも、何百何千との世界がパラレルワールドが存在する。仮に一番高い可能性が十とするなら、二番目に高い可能性が8、他の可能性が2〜4程度でソイドが死ぬ可能性は小数点以下だ。だが高確率でソイドの心が傷つく。だから…は時空に歪みができてここに呼んだのだ。

本来ある選択肢を一切無くし次元の狭間に来る事でソイドが傷つく事は回避できたが、捻じ曲げてしまった事により時空に歪みができ、世界にかかわる様な選択肢だったなら裂け目ができ、誰であるかと修復が不可能となる。

「酷いのか歪みは？」

「今回はあまり時間がかからず修復できるからそれほどでもないわ、それよりもう一度問うわ、貴方は何がしたいの」

「分かっているだろ」

そう逃げようとしたソイドの頬を女は引っ叩く。

「さつきも言ったよね甘ったれるなど。いつまでうじうじしてるの。一年前までの元気は、瞳に宿る輝きは無くしたのか、いまだにあいつを失った事を後悔してているのか、腑抜けになったお前でも信頼してくれる者を裏切るのか？ あいつらはなお前に元に戻って欲しいのが分かんお前でもないだろう」

頬を殴られた痛みよりも、心が痛かった。ほんととは分かっていた、ソハネが見せるさびしげな表情もフーラの憎しみの間にある悲痛な表情も、自暴自棄になった俺を支えてくれた人達やスラム街の皆のために……そろそろ整理をつけるべきかもしれない。

「これだけ教えてくれ……彼女は生きているのか」

これを聞けば……一步を踏み出せる……ソイドはそんな気がしていた。瞳の奥に輝きが戻っていくのを見、先ほどまで女は剣呑な雰囲気だったが、穏やかになり。

「それは貴方の計画が成功したら教えるは。だから早くいきなさい……貴方の待っている人の所へ」

左手をかざし、ソイドの少し後方に扉の様なゲートが現れる。女が様が住んだかのようにソイドに背を向けるが、後ろから暖かな温もりを感じた。

「ありがとう。心の整理がつくまで、皆の前で変わった俺を見てもらうために、しばらくこうさせてくれ」

今後こそ本当のお礼を込めて、ソイドは首に手を回しギュ…と抱きしめる。一年間の自分と決別するために、自分を取り戻すために…すぐにいくには、ほんの少し勇気が足りなかった。

「仕方ないね。全く子供なんだから」

溜息を吐き、何処となく嬉しそうな空気になり、背中から手を回されたソイドの手に自分の手を重ねる。しばらく経ちソイドが体を離し、女が振り向く。うん、もう心配ないね。そこには輝きを取り戻した、一人の男が立っていた。

「計画が終わったら…また会おう」

そう言い残しソイドはゲートを潜った。

第四十一話 『絆と裏切りと絶望と13』

「がはあ」

フェリは壁まで吹き飛ばされ血反吐を吐く。

ここはソハネの家の中で、本当はソイドが来るはずだった。だが来たのは…。そこはまだソハネは己を抑える事が出来、マグマの様に熱い感情を抑え理由を聞き、感情の赴くままフェリに拳を振るった。フェリも罪悪感からか自分の不甲斐なさからか、避けられるソハネの気を纏った拳を甘んじて受け現在の状態となる。

「殺す…貴方にソイドさんの弟子と名乗る資格はない。あの時殺すべきだった」

ソハネには到底許せない事だった。ソハネに取ってソイドは生きる全てだった。一年前のあの時、本当はジョシュネやアーナと同じ待機組だったが、紆余曲折の末強引に参加した。そしてソイドにひつついて全てを見てきた、絶望しかない道を。だけどソハネにとって、帰還不可能、絶体絶命となったあの場所からソイドと共に帰って来た事が嬉しかった。行く前よりも、ソイドの事をもっと好きになっていて、例えソハネの両親やアーナやジョシュネを殺せとソイドに命令されれば、ソハネは躊躇いも無く殺す…それほどまでに崇拜していた。だから許せなかった、ソイドを見殺しにして、帰って来たフェリ達を。

ソハネは明確な殺意を持ってフェリに向け手を翳そうとするが。「ストップストップ、ソハネちゃん落ち着いて、ソイドさんが死

ぬはず無いよ、ちよつと冷静になろう」

そう言つてソハネを落ち着かせようとするアーナさえも、ソイドの生存は絶望的に感じていた。いくらソイドさんだからと言って、天空十二神四人を相手に勝利するのは難しいよね、ソハネちゃんには悪いけど。

遠巻きに見ていたネール達も一様に沈んだ表情だった。

そんなおり、嫌な空気を発し大粒の涙を流しながら笑うソハネに近くにいたアーナも少し距離を取る。ソイドの居ない世界なんて…その前に、ここにいる人達を皆殺しにする。

空間の所々に穴が開き始める。これは、転移魔法の亜種で空間侵食魔法と言われており、その空間にいた物を跡形も無く消滅する事が出来る、ソハネの十八番である。

「ニヤム！ ワロ！」

ソハネの本気を悟り、いち早く危険を察知したアーナは猫のニヤムと犬のワロを召喚する。先ほど雌雄を決していた前と今とでは、意味合いが違つていた。両方とも殺す気でやっていたが、片方は両者とも理性が残つていて、片方は一人が完全に理性が無くなつていた。ソハネちゃん完全に我を失つてるね、私も同じ立場だったらそつなつたと思うけど。おそらくアーナがソハネの立場だったら同じ事をしていた自身があつた。そしてもう片方の役割についても。

現状、ソハネを止められるのはアーナしかおらず、例え手の内を晒しても止める必要があつた。アーナの本来のスタイルはシーベルト一族が作つたとされる動物使役師と呼ばれるもので、契約した動

物達と一緒に戦う。本来の動物は一階にいるゴブリンよりも弱いとされているが、契約する事により、気を身に纏う事が出来るようになり、訓練すれば一流の冒険者にも引けを取らないほど強くなり、契約者との絆が強ければ強いほど、気の質や量が上がる。カミュの指導の元アーナと二年年ほど前に契約したニヤロとワムは文字通りアーナとともに強くなり、街に出かける時、エンドレスに行く時、常に一緒だった。唯一無二の親友であり、家族以上の存在であり、戦闘の時は一蓮托生するパートナーだった。さらにここ一年でアーナとともに格段に強くなっており、アーナとニヤムとワロ、全員が合わされば、まだなつてはいないが、既に現天空十二神の中でも三本の指に入る実力がある。

ソハネも空間の侵食を止め、動けば誰かが死ぬ。息も出来ない位殺伐とした空気の中、ある出来事により束の間の均衡は崩れ去った。

第四十二話『絆と裏切りと絶望と14』（前書き）

名前だけですがようやく第一章の主要人物を書く事が出来ました。
それではどうぞ。

第四十二話 『絆と裏切りと絶望と14』

ソイドが現れた先は修羅場だった。もう少し、早い時間帯に送ってくれても良かったんだけどな。…最もあいつは『あら、修羅場を救う王子様見たいでかっこいいじゃない』とか言うんだろな。心の中で嘆息し、ソイドは辺りを見回す。ソハネはおそらく俺では無くフェリが来た事で、事情を聞き、切れ、アーナはワムとニヤロ…動物達を召喚して、後ろにいる人達を守っていた…って所か。全ては俺のせいだな。ソイドはそう結論付け。

「迷惑かけてすまない」

ソイドは誠意を込めて頭を下げる。一年間不甲斐ない俺を支えてくれたソハネ、こんな俺のために協力してくれたアーナ、そして、圧倒的不利の中ここに集まってくれた仲間達に向けて。

「ソイド、怖かったよお」

即座にソハネは魔法を解除し、いっぱいの涙を服につけソイドに抱きつく。ソハネはソイドを失うのが何よりも怖く、恐ろしかった。

「ごめんなソハネ…もう大丈夫だ」

安心させるためソイドはソハネの頭を優しくなでる。

「お帰り〜ソイドさん。何か変わりました…というか戻ったんですね。良かったです。貴方がうじうじうじうじしているとソハネちゃん悲しむですからね〜」

アーナは前にあった時よりどこかしら違う事、一年前と似たようなに雰囲気気付き、先ほどの死闘など何事も無かったかのように上機嫌でのほほんとしている。ちなみに他の人達は展開についていけずにいた

「うん、やっと…帰って来た」

瞳をうるうるさせ、上目遣いでソハネはソイドを見る。それは二重の意味での言葉で、一つは無事に帰還した事によるもので、もう一つは憑きものが落ちたかのようなソイドの表情を見て思った事だった。

それからフェリヤネールが我に返り、それからソイドの説明に入る。

「知らない奴もいるかもしれないので一応言うが本来の計画は、邪道派と呼ばれる、実力も無いのに天空十二神になりあらゆる手で挑戦しようとした者を止めさせ、それでも駄目なら消し、権力をかさにし他の冒険者や民達に横暴を働いているフェルマン、ゾルク、アリーシャ、ナスカの四人を殺す事だ。傭兵のガラドはソハネ達で引きつけ、同時にアーナの次期挑戦者試験も行い、後日アーシャを落とす。俺はカーヴァル家に乗り込み、護衛を倒しフェルマンを殺す。そしてジョシュネがナスカを殺し計画は成功するはずだった。だがフェリから聞いていると思うが穏健派のウルベや鬼神の裏切りでこの計画は窮地に立たされた」

天空十二神の中でも三つの派閥があり邪道派の四人と民の事を考え、冒険者達をよりいい方向に導こうと日々努力しているウルベ、正宗、オロム、サナの穏健派四人、そして傍観している…というか

政治の事に全く興味が無いジョシユネ、ソハネ、自由王でフェリの父親ガリバーン、オウガの中立派四人。

昨日のあの会議にはソハネ、ソイド、フーラ、オロム、フェルマン、正宗、ウルベ、ジョシユネ、サナ、オウガの十人。カリバーンは放浪の旅に行っており行方知らずで来なかった。

そこで話したのは、アーナの天空十二神入れ替え戦の資格試験と邪道派の排除とそれに代わる候補の名前。ソハネとソイドしか知らない真の計画はマシーリより上の都市に行く事を規制する事だった。個人やパーティーでまだいった人はいないとされているが、一年前の様な事はあつてはならないとソイドは考え、そういう考えに至った。その考えを自分より年上のウルベやオロム、正宗などには最初からお見通しだったと思うが、あえて何も言わなかった…。邪魔さえしなければそれでいいとソイドは思っていた。だからなのか最悪の形で邪道派に加担されたが、計画は……今の所何とか成功していた。

「フェルマンとウルベは俺が殺した。おそらくジョシユネの方はナスを殺している頃だろう。今の所計画は成功だが、今度は俺達が残りの天空十二神に狙われている…。おそらく先導している黒幕は……アーナとネールの父オロムだ」

第四十三話 『それぞれの正義』

それを聞いたアーナとネール、二人の姉妹の印象は対照的だった。姉のネールは動揺し、顔は青褪めそんなことはあり得ない… といった表情をしており、妹のアーナはもうそれしか考えられないと思っていたのでさして動揺も無く、ああやっぱりだ… といった表情だった。

「そんな… ありえません。お父様がそんな事をするなんて」

ネールの心の整理ができるまでソイドは待ち、長い… 長い沈黙の後、呻く様に、縋る様に目元を伏せ独り言の様に呟く。

ネールから見た父オロムは他人に厳しく自分にはもつと厳しい、厳格を絵にかいたような人物だったが、一度信じた人物を裏切る事は無く、午前中に言われた事から見て、ソイドは信頼されていると思っていたので俄には信じがたい事で、それにオロムは家族思いで不器用ながら私とアーナを何かと気にかけているのを知っていた… だからアーナを殺す指示をした事は考えられなかった。

「そうだろうな」

ソイドはネール以上にオロムと接しておりその人となりは知っているつもりでいた。オロムなら絶対裏切らないだろうと。さらに、普通家族なら尚更そんな考えには及ばなく、アーナの方が異常と考えるが、冒険者なら例え心で思ったとしても顔には出さず、悲観するのでわ無く次やるべき事を考えるものだが、なりたての彼女にそれを求めるのは無理な話で、順序を追って説明しようと思頭の中を整理した。

「まず消去法で考えるとフェルマンは人望が無く踊らされているだけの存在で邪道派のメンバーはどれもこれも自分の利益ばかりを優先し、だれも付いてこない。村正やウルベは今回出張って来た事から、黒幕の線は消える。その二人に指示し、フーラを誘導させるだけの説得力や人徳があり、作戦を知っていて、的確に配置できる戦術能力の持ち主となると、オロムしかいない。残念ながら。次の作戦は：明日の朝、ホーネリア家に行きオロムを倒す。相手の戦力はおそらく名立たるコミュニティの上位冒険者や、村正、ウルベ、サナの天空十二神メンバー。さらにフーラなどの天空十二神クラスが複数いると予想され、正直死に行くようなもんだが、無理強いはいしない、一時間の内に考えを纏め参加するかどうか決めてほしい。無論断った場合でも、終わるまで安全な所に匿い、命の保障はする。成功しても何も気害は加えないし失敗してもあいつがどうにかしてくれるから大丈夫だろう」

ソハネはわずかに眉を顰めるが、後は何もなく、ソイドはこの部屋から出て、続く様にソハネも退室した。

〈オロム邸執務室〉

「これで良かったのかオロムよ」

旧知の友人である村正に問われるまでも無く、幾度となく葛藤した上での苦渋の決断だった。

「ソイド君の計画の目的を考えると、成功する事を阻止しなければならぬ。力無いものだったなら夢物語だと失笑する事も出来ただろう。だが彼らは力を持つていた、誰よりも強く何者にも負けない力を。誰かが止めなくてはならないのだ、その暴挙を、冒険者は何よりも自由で、上に行く事を禁止する事などあつてはならぬのだ」

例え、信頼していた者だとしても…。オロムにとって三番目は信頼した者達、二番目は家族、そして一番目は自分達を守るべき存在である、善良な民達や経験の浅い冒険者達だ。

天空十二神である時は、私情は挟まず何事にも公平であるべきだと考えている。だから今回こんな形になったが、心の中ではまさに泣いて馬謖を斬る程の断腸の思いだった。

例えオロム側の計画が成功したとしても、終わった後自害することを心に決めていた。やる事が全て終わった後、残された感情は絶望しかないのだから。

執務室にいるのはオロムを含め村正、サラ、フーラ、ウルベの五人、皆が皆沈痛な面持ちをしていた。仕方ないとは言え被害が多すぎたのである。

「こちらの状況はどうなっている」

思考を切り替え、集まった皆に情報を募る。ソイド討伐部隊の代表としてまず村正が声をあげる。

「まず、雇った冒険者は、予想通りフェリ達を除き全滅した。四対一の状況までソイドを追い込んだが天空十二神であるゾルクとフェルマンの二人が亡くなり、天空十二神クラスの4人同時攻撃を受け、

消失したと思うわれるが、確証は取れておらずソイドの生死は不明だ」

客観的に村雅は説明し、続いてジヨシユネ討伐に向かったサラの出番となる。

腰まであるサラサラの金髪に慈悲深い、見るものを虜にする優しい紫の瞳、背中には、遙か昔何処からともなく来たとされている天使族の証である二つの純白の羽根が生えており、その完璧な顔立ちと姿を見た時誰もが一度はこう呟く…聖母が来た…と。だが今は悲しげな表情で少し下を向いていた。

「私達の方は、ナスカさんを罫に嵌めようとしたジヨシユネさんを逆に罫に嵌め全員で事に当たったのですが、雇った冒険者二十人全てがお亡くなりになり、さらに天空十二神であるアリーシャさんとナスカさんはお亡くなりになりました。二人が命を掛けて作った隙を見逃さず、殺そうとしましたが、突然消えてしまいました何処に行ったのか不明ですがおそらくソハネさんの所でしょう…ね」

報告が終わり、辺り一面重苦しい雰囲気立ち込めた。

第四十四話 『それぞれの明日へ01』

何故なら、今の所完全にソイド側の思惑通りとなっており、さらに天空十二神四人もなくなつたのだ。最終決戦、おそらくこちらに攻めてくると思うが、仮に勝つたとしても、敵味方合わせて一体どれだけの人数が生き残るか分からず、最悪、ここに居ないカリバーン以外の天空十二神全員が死ぬ可能性があつた。そうすると、この都市の民達が混乱し、都市が弱体化し大変な事になる。かといって負けるわけにもいかない。

やはり協力を仰ぐしかないのか。オロムの視線が自分のリンクの方にいく。この方法を使えば、九割程の確率で勝ると踏んでいる。既に、上層都市から、ここに待機してもらい後はリンクで呼ぶだけだが、善処ある若者達を死地に送る込むとなると、躊躇い二の足を踏んでいた。だが、オロムがこの作戦のリーダーであり、彼が決めなければならなかつた。

私が判断しないでどうする。オロムは弱気になつた心を叱咤しリンクを操作する。

周りの者はそんなオロムを見つめ、終わるまで黙っていたが、何をやっているかは理解していた。天空十二神になると、他のコミュニティも登録でき、送つたのは名立たるコミュニティの中でも上位に位置し、その第一パーティー達に送信する。

『時は来た。作戦に参加する者は我が家に来場されたし』

来るまでの間次の議題に映つた。

「フリーラ殿、ソイド君の階数はどうなっていた」

ソイドの情報を見るよう指示したのはオロムであり、ネールが居れば新規冒険者講習依頼を受けるのを見越し冒険者になるのは許したのもそのためだった。

「暗黒エリア四十九階と書いてありました。やはりあの伝承は本当だったようです」

遙か昔最初に来た天使族が書いたとされる書物で、こう記されていた。

この世界には六つの階層が存在する。始まりの大地ムーア、火山と鍛冶の都市ヒート、水と癒しの都市ウォール、機械と発明の都市マシーリ、精霊と森のセイン、闇と終わりの都市アール、天空と楽園の地エス、マシーリ以下の都市からエスまで来た者は、どんな事でも一つだけ願いごとが叶えられる。

お伽噺の様な話なのだが、冒険者にとって、一番上の階層に行くのは夢であり憧れだった。だけど現実には夢の様に甘くなく、約一割が最初の都市で挫折し、約三割が次の都市で諦め、約二割がウォールまで行った事で満足し約二割がマシーリに出てくる敵の強さに絶望し、一割九分九厘が最前線と言われるエンドレス、マシーリエリアで戦っており残り一厘が…。

「そうか…やはり行ったのだな選ばれし所に」

遠い所を見る様な目で込み上げるものを抑える様に呟く。

「どうという事ですか」

村正とウルベはオロムと同じで感慨深げな表情をしており、サラは辛そうな表情をしていた。一人だけ状況が飲み込めないフリーラは少し眉間に皺を寄せ、平坦な声で聞く。

「ああすまぬな、フリーラ殿はしらなんだか。不思議に思わなかった事はないか、新しい精霊と契約するものが現れた事を…の」

逆に村正から問いかけられ、フリーラはむっとするが、気を取り直して考える。正直あまり考えた事無かつただけ…言われてみれば不思議。

フリーラには刻印魔法：精霊魔法は身近にあり、さして深く考えた事はなかったが、いざ考えてみると、なぜ増えるのか答えは出なく、あの書物に書かれているかなと思いついてみるが、残念ながら都合の良い話は無く時間切れとなった。

「オロム殿の水竜は別として、元来刻印の儀式が行われるのが、セインになりおる。ここまで言えばどういう意味か分かりおるの」

答えたウルベに、フリーラは信じられないと言った表情で見る。三年前、まだフリーラが天空十二神だった頃、マシーリを攻略するべく当時としては最多規模百人、内3人は天空十二神でフリーラもそこに含まれている。七人は仏空三十二傑、天空十二神の下にいる存在でこちらも次期挑戦者選定試験などがあるが、一回辞めてからで無いと、上のクラスの挑戦権は与えられず、最低でも止めてから一年間待たなければならぬ事から、歴代の中にはならない者が多いが、それでも他者の冒険者より優遇されている。

そんな百人はマシーリを次々と攻略し、誰一人欠ける事無くマシ

ーリ五十階に到達した。

誰も見た事が無いと思われる上の世界に思いをさせ、当時の私は自分の力に絶対的な自信を持ち、どんなモンスターが来ても負けな
いと思っていた。

けどそこで待ち受けていた者は一方的な虐殺だった。

第四十五話『それぞれの明日へ02』（前書き）

すみません、だいぶ遅れました。なかなかタイミングがつかめず待っていたのですけどそのままスランプにおいいてしまいました。その分少しですけど多めに書きました。それではどうぞ。

第四十五話 『それぞれの明日へ02』

五十階は何処のエリアも一部屋で、四百m四方のスペースがあり高さも五十mほどある。

そこにいるのは一体だけでマシーリエリアも例にもれず、居たのは全長二十m横幅も同程度ある外見は巨大な亀で、普通と違うのは皮膚の部分をダイヤモンドで覆い甲羅の部分はダイヤモンドでできた剣の様に鋭く尖った棘と、直径3m長さ五十センチの大砲が中央並びで六つある。

それだけなら、ヒートやウォールのエリアボスも規格外で、フリー達はそれに勝っているので驚かず、陣形を整え慎重に敵に向かっていたのだが、次の瞬間後方にいて回避できなかった半数近くが、凄まじい速さで回転しながら突進してきたダイヤモンドタートルにぶつかり、棘で冒険者の肉体を破損し、ミンチにされ命を散らされる。

タートルは端まで行った後、冒険者達の方に向き超重力圧縮砲グラビティプレスを放つ。高レベル冒険者でも回避できるスピードでわなく、又半数が跡形も無くぺちゃんこにされた。

対峙して僅か十秒ほどで人数は二十人ほどに減り、退却しようにも、入口はタートルが塞ぎ、倒さなければ、上のエリアには行けない仕組みとなっており、一度倒せば、復活までの一日間は誰でも通れる。

楽勝ムードから一変して絶望の淵にたたき落とされたフリー達は、魔法や遠距離攻撃で何とか現状を打開しようとしたがどういう原理か分からないが壁でもあるかのように阻まれ、砲弾によって人数は

徐々に減り、一人当たりには砲弾も増えると言う悪循環の中、戦ってから一時間経過した頃には五人にまで数は減っており、天空十二神の三人は何とか致重傷の傷は負っていなかったが、残った仏空三十二傑の方は前回の攻撃で、一人は右足、一人は左腕が使い物にならなくなり、既にに出に戦える状況ではなかった。勝てない…。フリーラは死を受け入りつつあり、体全体が鉛の様に重く感じていた。それでも、いちずの望みは捨てきれずにいた。奇跡なんてものはそれこそ何十何百万分の一で起こる事象で、そんなに簡単に起こるものではないのだが、天使の気まぐれか、神に通じたのか定かではないが、それは起こった。突然ターゲットが吹っ飛び、現れた入口から……二人の男女が現れた。

命からがら助けられ、以来フリーラはあそこに入って無いが、一年前の事は分かるとして、他の者があの敵を倒したとは到底思えなかった。

「ありえないといった顔だな。酷な話だがフリーラ殿ほどの実力者は百人ほど知っている。無論我以上のものも50人以上知っている。ソイド然り、ネール然り、ジョシュネ然り、自分の娘にすら恥ずかしい話勝てないのだ……」

「ふむ、まだまだフリーラ殿は世界を知らないと思受けられるのう、長い間生きておるが、天空十二神がそのまま最強の十二人となった事はいまだかつてない。世の中には権力に興味が無いものや、境界の地ですごい力を持っている者もいる。だがのう今から一年前、最強の十二人が同じコミュニティに居たのじゃ」

懐かしむ様な顔で、ウルベは昔に思いを馳せる。フリーラもどのコミュニティの事をいつているのかすぐに分かった。伝説のコミュニティ『天空への階段』インフィニティ アルクテシア』。四年前に結成し一年前に解散したコミュニティで構成人数僅か十四人なが

ら全員が単独でウォールエリアを制覇できる強者で、それぞれが何かしらのあだ名を持ち、噂ではソイドとカリバーンはマシーリエリアを単独で制覇したのだが一方は「何があるか分からんから辞めた。まだあだ時間があるから楽しみはとっとこう」で、もう一方は「けっ、何だこの弱さは腹の足しにもなりやしねえーぜ。興醒めだ、上にいくのは大陸を制覇してからにすつかな。」と。さらに天空への階段の逸話は多々あり、アーナがシーベルトが居なくなった後、一人でマシーリエリアボスと対峙して三時間にも及ぶ激闘の末痛み分けに終わり、なくなると帰って行ったとか、ジョシユネがムーアエリア外にある、千人規模の盗族の村を一時間で壊滅させたとか、他にもまだまだたくさんある。

そんな彼らだからこそ、フーラも本当に伝説と言われているエス（第七階層）にいけるかもしれないと思っただけだし、事実何があったのかは知らないがアール（第六階層）四十九階までクリアしているので、それはあながち的外れでなかったと思っただけ。だが他のものがセイン（第五階層）以上までいけるとわどうしても思えなかった。例え自分よりも強い人間が行ったとしても…だ。

「それは分かります。ですが、あの人達以外であいつを倒せるなんてどうしても思えません」

「強情ものだのフーラ殿よ、でわ少しばかり昔話をするの使用かう、いいかのオロムとウルベよ」

二人が頷くのを確認し、村正は語り始めた。

「ふっ危なかつたぜえ、アーナちゃん久しぶりだな」

ソイドとソハネが出て行って少しした後、何も無い空間から突然

身長百六十センチほどカウボーイハットで頭を覆い、耳元に紅色の三つ網を垂らし、大きな猫目で、上は皮でできたベストと白のワイシャツ、下は皮で出来た、股下位のホットパンツ、両手には銃を持っていて、その格好は西部劇に出てくるガンマンの様だった。

「ジョー、お久しぶり〜、生きてて良かったよ〜。半々の確率で死んだかと思ってたよ〜」

そう、彼女こそが稀代の銃使いジョシュネ・ハートネットだった。

「あははあ、いつに変わらさずきつついねえ〜…まあほんとぎりぎりだったんだけどさ」

ジョシュネは頬を人差し指で搔き、苦笑いの表情になる。それから一つ間を置き。

「そいえば、ソイドとソハネはどこさ、報告したいんだけどさ」

言葉づかいや行動はあれだが、ジョシュネは意外と常識人であり、自分が今しなければいけない事も分かっていた。

「ん、ソイドさんとソーちゃんなら二人で逢引しにいったよ〜、どうせみんなに撃つんだから、先に見せて〜」

アーナの微妙な変化に気付けたのはジョシュネだけだったが、理由を知っている彼女にとってそれは当然かと思えば追及しなかった。代わりに6発入るシリンドラー式の銃に4発入れ、銃口をアーナ達に向ける。何も知らないネールやフェリの仲間達はびくつと身構えたが、後の二人は平然としていた。

「あはは、冗談はさておき」

アーナの冗談にジョシュネがのっただけで、上の壁に銃口を向け直し

「ほなくて、思いを弾に」メモリーボム「記憶閃光弾」

高速で四連射された四つの弾は天井の四隅に命中し、部屋全体が閃光が支配した。

目を開けるとネールはいきなり違う景色に切り替わった事を驚いていた。しかも夢の様に自分ではない誰かの視点の状態でいて、やけに鮮明で、頭もぼんやりとしていなく、まるで誰かの記憶を見ているようだった。そして前後の記憶と照らし合わせネールはすぐに思いついた。

もしかしてジョシュネさんの記憶でしょうか。周りは木に覆われて真っ黒闇、そこから一筋の光をさす様に、道ゆく人達が見えた。ここはとある場所の屋上で、ジョシュネは獣の様に気配を殺し、銃を構えたまま微動だにしていない。そのすさまじいまでの集中力にネールはごくりと喉を鳴らす。

そして、今回の標的である姿が見え斬新も憎しみも悲しみも何の感情も込めず、機械的に唯トリガーを引く。それは少しでも感情も込めれば感づかれるとジョシュネは思っているからだった。

「あーあー、そんな簡単に上手くいくわけないか」

ジョシュネの銃技の中で最も早い音速弾は瞬きする間もなく対象の眉間に命中したが…それはデコイ…罠で、何処かで待機していたのか、二十四人が転移陣と思われるもので、一瞬で姿を現した。

二次元転移移動、都市の端から端まで転移できるものはソハネの他にも多数おり、転移術を使える者の約八割で、三次元転移を使えるものはぐっと減り約二割である。

「今なら、私の力でこちらに引き込み助けの事が出来ます。これが最後通告です…シユネ、私達の所に来ませんか」

忌々しい感情がネールの中に流れ込んできた。

「おいおい、何言ってるんだサラ譲よ、偉く勝ち誇ってるみたいだけど、知らないのかい」

ジヨシユネは銃を上にあげ、慌てて一斉攻撃するが不可視の壁に弾かれる。どうやって防いだのかネールには分からなかった。

「ここは、既に私の領域だぜ」

虎の様に荒々しいほど獰猛な表情となり、口から八重歯をのぞかせる。

ジヨシユネはバトルジャンキー、いわゆる戦闘狂で、とある理由から殺人鬼一步手前までなり下がったが、これまたとある事がきっかけで改心した。だが根っこの部分は変わっておらず、荒々しいほどの感情が、ネールに伝わってきて、それは自分の妹のアーナやソイド、鬼華と対峙した時と似ていて思わず目を背きたくなる。ここで目を背けていたら、何も変わりません…。例えこれからどんな残酷な映像が見えても、目を逸らさないでおこうとネールは自分に言い聞かせた。

「スパイラル・ハート・エッジ」

ジョシユネは引き金を引く。ネールが認識できたのはここまでで、分かったのわ、いつの間にか左胸部分に穴があいている、立ったままの無数の屍だった。

バタバタバタつとドミノ倒しの様に倒れてゆく。そこに驚くべき姿がありネールの眼が大きく見開かれる。アリーシャさんがこんなにあっけなく殺されるのです…か。

アリーシャはシーベルトの後継として天空十二神に入ってきた人物で、闇の動物使いと揶揄される一族の直系、蛇の様な眼と狐の様に裂けた口、黒のローブを身に纏い怪しげな雰囲気醸し出す女で、アーナとは合えば殺し合いに発展する様な間柄である。

一瞬心臓を握り潰されるような強烈な殺気がネールを襲ったが、すぐに影を潜め、その殺気に気を取られている内に残りの敵は二人となっていた。

「あくまで私達と敵対すると言うのですね。分かりました、四肢を切り落として私の家にお持ち帰りします」

「ふん、私は殺す気でいく、あっちの目的は私を殺す事だから、こんな所で死にたくないし」

「あゝあ、目的までばれてりゃ、まあ、殺る事は変わらない、楽しい楽しい殺戮^{ゲーム}開始といこうぜ」

ネールは唾をぐくりと飲み込む。ここからですね…本当の戦いはもしかしたらさっきと同じで何も見えなく、何も分からないまま終わってしまうかもしれない。だが今度は最大限できる事をしよう

リースは思い魔力を目に集めた。

「リスペーション・アイ」

通称魔力眼と呼ばれ。普段の動体視力の三倍の効果と魔力闘気の流れが分かる様になる。

高位のものは無詠唱で相手にばれないよう使うものだが、まだこれを使いながらの戦闘はできないネールだが、見るだけの今ならでき…少し後ろめたさも感じてしまうけども。ちなみにアーナとソハネの時はただ圧倒されて使うのを忘れてしまった。

第四十六話『それぞれの明日へ03』

それはまさに、怪獣大決戦と呼んでもおかしくない位めちゃうちゃだった。まずサラが、翼を使い空に高速飛翔し。

「サキユラム デイスペリア ウィディーゼ」

今ではサラにしか使えない天使魔法と呼ばれる天使族しか使えない魔法。天使魔法は最高6単語からなる魔法で、天使族以外が使うと九十九%の確率で体の内側から暴発する。一説には、天使族は体の内側に聖抗体アルカナを所持しており、それが原因でその魔法が使えると言われている。

一単語ごとに意味がありサラが使ったのは、サキユラム（魔法除去）、デイスペリア（闘気除去）、ウィディーゼ（水なる蛇）。

何故ジョシユネが予備動作も詠唱も無く防ぎ、一発の銃弾で大多数の人間を殺せたのか。理由は前準備にある。準備7本番3という言葉がある様に、ジョシユネはキルポイント（銃の発射地点）付近の防御と攻撃用の罫を数多く設置している。まず銃の弾を粉末状にし、そこに魔法と闘気のゴールドレベルクラスの魔法を防御する魔法薬を混ぜた物を周囲にばら撒き、隠蔽の魔法をかけ隠す。魔法には同じ魔法でも個々によって強さが違うため闘気と同じカテゴリーに分類される場合が多い。つまり一流の魔法使いの最強の魔法攻撃ですら防ぐような代物だった。これの発動は少し魔力を流せば発動する。

次に冒険者達の命を奪ったものは、心臓を好んで食すミミズ型の魔物『ウエコンド』の血を使った特殊弾で、上に掲げた銃はフェイ

クでもう片方の手で五センチ程の短銃を忍ばせており、小さくても一ミリの銃弾をマガジンに三十五発ほど装弾できる優れものだった。

ジョシユネの事をよく知っているサラは、まず罨の除去にかかり、最後にお手並み拝見とばかりに、全長三mほどの水蛇をジョシユネに向かわせた。

一歩遅れてナスカが行動に移す。

「ブリユネの花よかのものを八つ裂きにせよ」

ナスカの外見は身長百八十センチ、骨格も太く強面な顔で短髪。大抵の人達から大柄という印象をもたれるが、彼女の使う『花』魔法とは随分とギャップがあった。

ナスカは腰に巻いてある三十ほどある種袋から種を取りだしジョシユネに投げつける。

種は加速度的に成長を遂げ、薔薇の様な棘と毒々しい色の花の形となり、回転しながら花粉を撒き散らし、ジョシユネに向かう。一歩待ったのはサラが上空に移動するのを待ったからだだった。

それらを余裕の表情でジョシユネは見つめていた。

「グレッグ（少し早めのお遊び）」

ジョシユネは持っていた銃を下に落とし手を後ろにクロスさせ背中から長さ十五センチ、装弾数二十五発、二丁のオートマティク式小銃を取りだし、二人の魔法に照準を合わせ正確無比に打ち抜く。花粉は銃に魔力を込め軽く振りはらう事で、あたる前に消え去る。

ジョシュネは銃毎に役割を違わせており、二丁拳銃『フリーク』の役割は、敵の攻撃の破壊で、弾丸に罠と同じような効果をつけ、当たった敵の攻撃を根こそぎ破壊する。そして魔力を込め振り払う事で、広範囲の魔法も破壊できる。

「おいおいどうしたんだい？ そんなもんじゃないだろう、お前等の力はよ。次はこっちからいくぜ」

ジョシュネのベストは特別聖で裏地にホルスターの様な銃を装備できる場所が六つ存在し、とあるものを一つだけ保管できる構造で、二丁を元の場所に戻し腰にある二丁の内の左にある一つを右手で抜き。

「ブレイジュ（彷徨える剣の嘆き）」

左耳から右腰にかけて勢いよく振り下ろした。

ジョシュネが持っている銃の中で唯一の銃剣で気の量で剣の長さが変わり、切れ味は一流の剣にも勝るとも劣らない。長さは上空にいるサラまで届き、そこらへんにある構造物を巻き添えにしながラスカまで向かってゆく。

速さは魔法を使っていないネールでは見えないほどのスピードだが、サラは上空を旋回し避け、ナスカは鋼鉄の花と呼ばれるチーリップを巨大化したような花『モリス』の種を取りだし防いだ。

それが三人の戦闘開始から僅か十秒程の出来事だった。

第四十七話『それぞれの明日へ04〜フェイク&フェイク〜』

ジョシュネが居る所より高い構造物は軒並み道に落下し、こついう事を予測してか、オロムがここら一帯は避難するよう命じており、人的被害は無かった。踊る様に銃剣を振り下ろすジョシュネに、それを軽々避けるサラと、モリスの花を立ての様にして使い防ぐナスカ。

「どうしたナスカ譲、そんなんじゃいつか壊れちまうぜ」

十回、二十回とジョシュネが振り下ろしていく内に、ナスカの花はひびが入り、どんどんと大きくなる。

「きゃはは。おらおらおらおらおらおらああああ!!!!!!」

ジョシュネの腕を振るう速度が加速度的に上がっていき、サラも額に冷たい汗をかく。

「シュネ、少しばかりハッスルしすぎな気がします、そこが貴方らしくていいですね、貴方の意思を尊重するかのようない瞳に、誰にも囚われない自由な心、だからこそ私の手で貴方を束縛したいのですよシュネ」

例え味方であっても、サラにとってナスカはただの捨て駒程度にしか思わなかった。

天使族は一度恋に落ちればその人の事を中心に物事を考える様になり、例え同姓であっても多聞にもれなかった。

そしてサラがこの戦いで望む瞬間はただ一つで…そのために余力を残していた。

ナスカは防戦一方…の振りをして、虎視眈々と反撃の機会を待っていた。

そしてとうとうモリスの花が割れた時、反撃開始の合図だった。モリスの花の特性として、頑丈さの他に衝撃を掛けた方向に飛び散るというもので。

「はっ、ござかしいわ」

とびついていた破片を、自身の体に一つも到達する事無く破壊するジヨシユネ。

防がれる事は百も承知だったナスカは、その僅かな時間だけで充分で、五種類計五十個の種を一斉にジヨシユネの上空に投げる。

「異界の花よ開きなさい」

ナスカが投げた種は第三階層『ウォール』のエンドレスに潜む魔植物で、人食花、眼花等々、上空が猛花で埋め尽くされたが、いつの間にか入れ替わった『フリーク』でこともなげに破壊する…がこれもナスカの計算の内…。ナスカは顔に小さく笑みを浮かべる。

「根絶やしにしるヴェルゴリア」

何も花が咲く植物だけが花魔法ではない。代表的なものが花型根っ子植物ヴェルゴリアで、鋭く尖った根が相手を死に至らしめる。

根の全長は半径十m、根が手でジョシュネの身長までに達するのに
0.5秒。実は上に投げたのは注意を逸らす為で手を下す時
に指で弾き、隠蔽の魔法をかけジョシュネの周囲にばら撒き…ジョ
シュネがいた付近一帯は下から突き破った根で覆い尽くされた。少
し遅れて鮮血で白い根が赤色に染まる。噴水のように、大量の血液が
床を血で染め上げてゆく。

「ふうーようやくこれで終わった。残念ねサラ、あたしがジョシュ
ネを殺したわ」

勝ち誇った笑みを浮かべるナスカ。

だと言つのにサラは空中で笑っていた

「貴方如きにシュネが負けるはずが無いじゃありませんか。その足
りない頭で理解してくださいナスカ。これから貴方の命を奪う者を
…ね」

第四十八話 『それぞれの明日へ05』

サラの言い分にナスカは鼻で笑う。

「もう死んでる人に何を…」

言い終わる前に悪寒がして、その場から飛びのく。瞬間黒い光が横切り、ナスカの後ろのビルが爆発する。あまりの威力にナスカは呆然としながら撃ってきた方向を見つめた。

「やっぱそうでなくちゃな。もっともっと楽しも（殺しあ）うぜ」

ジョシユネは根っこの上でナスカを見下ろす様に立っていて、手には50センチほどの黒塗りのショットガンを構えていた。

根っこが出る前、実はジョシユネはナスカが種を周りに巻いたのを気付いており、サイレンサーを取りつけ音を立てないように円状に自分の床を破壊いし、頃合いを見計らって跳躍し、ナスカを狙ったが、結果は前述の通りで、根っこの上に立っているのは気を足に溜めているからで、武術家が剣山の上に立っているのと同じ感じである。あの血は死んだ冒険者のものであり、ジョシユネが巧みに移動させた。

「化物め、どうして私を殺そうとする。私はフェルマンやアリーシヤほど欲に手を染めてないし、派閥が同じだけで、誰か殺してないし、自分から誰かを不幸にしたりしていない、何故ソイドは私を殺そうとするんだ！ 答えてくれジョシユネ・ハートネット」

ナスカにとってみれば親の言いつけどおりフェルマンの派閥に入

り、そりゃーいい思いもしたが、悪の道に手を染めた事は今までなかった。なのにどうしてあのソイドは私を殺そうとするのか分からなかった。もちろんナスカは普通の冒険者とは違い、ソイドの本当の正体を知っており、自分なんかよりも強い事は分かっていて。取り巻きにいるジョシユネ、アーナ、ソハネの化け物たちの存在も。だからなるべく穏便に過ごしたかったが、親の意向で対立する立場になってしまった。私が何をしたっていうの、悪いのは全て親なのよ…私は悪くない。

違う方向に憎しみを抱いているナスカをジョシユネは蔑むように、見下す様に見ていた。

「あーあ興醒めだぜ。もうちょっと遊びたかったのによ。シャーないから冥土の土産に、ある人の受け売りだけだよ、良い言葉を教えてやるよ。『てえめーでやった事はてえめー自身で責任を取れ、誰かのせいだと思ふのなら、それはてえめー自身の心の弱さだ。それで死んだとしても、仕方ねえー。だけどよ、最後の最後まで誰かのせいにして死ぬようなくそつたれになるんじゃねーぞ。最後は抗って抗いぬいてから死ね…』ってな。ナスカ譲よ、誰かのせいにするんじゃなくてよ、最後は自分の意思で抗って見やがれ…自分だけの人生だろう」

ジョシユネは八重歯を出しながら清々しいほどの笑みで笑う。

「……そうだね。そうなんだよね…誰かの人生じゃない、自分の人生だよ」

ナスカは遠くを見つめ、瞳を閉じ、これまでの人生を思い浮かべながら…そう呟く。次に目を開けた時はもう迷いはなかった。

「…もう逃げない、次の攻撃で終わりにする…もちろん付き合ってくれよねジヨシユネ」

「…当たり前ーだ、こんなわくわくする事、逃げるはずがねーよ。望み通り、こっちも次の攻撃で終わりにするぜ」

対決の終わりは刻一刻と迫っているのを感じたネールは、映画のラスト前の様にごくりと唾を飲み込んだ。

第四十八話『それぞれの明日へ05』（後書き）

次回で決着します。あと3日〜一週間後の間に頑張って書きます。

第四十九話 『それぞれの明日へ06』 決着』（前書き）

ようやくナスカvsジョシユネの決着がつかまりました。
それではどうぞ。

第四十九話 『それぞれの明日へ06』決着』

ナスカは全ての袋を投げ、とある種を飲み込んだ。

「私の命と引き換えに、全ての花を開花せよ」

何をしてもジョシユネにはきつと勝てないだろうとナスカは思っていた。さっきまでは心のどこかで負けるのも仕方ない事だろうと思っていた。だが今は何もしままま、負けるのは嫌だと思っっている。だからこの技を使う事にした。花魔法の究極にして一回しか使えない禁忌の魔法。条件は違うが各魔法毎に禁忌の魔法が一つあるとされ、花魔法の場合は命と引き換えに持っている種全てを瞬時に開花する事ができ、ナスカが持っていた種は全部で2千程度。さながら緑のオーラを身に纏ったジャングルがそのままジョシユネを襲うような感覚で、同じく緑色オーラに身纏ったナスカもジョシユネに向かって飛びあがる。緑のオーラはナスカ自身の生命力で構成され、それが消えた時、ナスカの最期となる。

一方ジョシユネもショットガンを戻し、今持っている最強の武器バズーカ砲を肩に置き両手を添え根っこから飛び上がる。ジョシユネは血が滾っていた。血管が浮き上がりどうしようもなく血が沸騰するような感覚だった。こういう闘いをまっけてたぜ。

「全てを燃やしくせダルマリオンフレア」

大砲から発射された熱方線が半径三十m眼下全てを焼き尽くす。その威力は核爆弾並である。

轟音と赤い光が辺り一面を覆い尽くし、一瞬にして辺り一面のピ

ルが跡形も無く焼け落ちる。だがジャングルの大半は焼失したがナスカは生きて五メートル付近まで接近していた。だが既に左半身は焼けただれ、緑のオーラも消えかかっていた。別に勝とうなどとはナスカは思っていない。だが一つだけでも、生きた証を残す為に、ジョシユネに傷をつけたかった。おそらく次の言葉で最後になるだろう。発狂するほどの激痛でもナスカは笑みを浮かべ。

「……………^{イネ}射根」

短い言葉を魂のこもった声で呟く。ナスカが直前に飲んだのは、ローズテイルと呼ばれる鞭なんかに使われる茎だけの花科の植物で、種を？む事で、強度は倍増するが、その代わり腹を食い破られる。まさに捨て身の戦法だった。一本の棘茎がうなりあげ、ジョシユネの血走った眼光が見開く。

それはやっとの思いでジョシユネに攻撃が届いた瞬間だった。

心臓を狙った攻撃だったが、そこは歴戦の雄、空中で捻じる様に体を捻り、横っ腹に突き刺さるに留まった。その後、攻撃する気力も無く、受け身態勢も取れないナスカを、ジョシユネが、抱き寄せ地上につくと、優しく下に降ろした。体を覆っていたオーラも両足から順に消えていっており、後数分も経たないうちに消えてゆく。死ぬ間際だというのにナスカの顔は晴れやかだった。

「誇つてもいいぜ、ナスカ譲。お前はこの私に傷をつけた凄いな。だよ。誰でもない、このジョシユネ・ハートネットが認めてやる…お前は立派な天空十二神だ。だからもう安らかに眠りな」

その言葉でようやくナスカは理解する。

そうか私、誰かに認めて貰いたかったんだ。両親には道具の様な

扱いを受け、実力も無いのに家の力で天空十二神になり、プレッシャーに押しつぶされそうになり、周りは利用しようと画策するものばかり。私自身を見てくれるものなど誰もいなかった。だけど最後の最後で…自分の存在を認めて貰えた。だからもういいんだ。

今なら分かる、ソイドは分かっていたのかもしれない、自分が精根とともに疲れ果てていた事も、心の奥底で死を望んでいた事も。

もう声も出さず気力もないナスカは最後の力を振り絞り、口だけ僅かに動かす…『あ・り・が・と・う』…と。

そしてナスカはその生涯を閉じた。悪戯坊主の様な荒っぽい笑顔に見送られて。

第五十話『それぞれの明日へ07』

サラが待っていたのはこの瞬間だった。ジヨシユネがほんの少しでも気がゆるめる瞬間、ナスカとの戦闘中も隙を窺っていたが、後ろに目でもあるかのように隙が無かった。

「ウイ」

ウイは天使魔法では拘束という意味を持っていて、リストバンドやアングルみたいな形状の四本の白いテープがジヨシユネに両手両足に巻きつこうとする。巻きつかれた部分は機能が停止し、気や魔法も使えなくなる。

そんな思惑も突然消えたジヨシユネには通用しなかった。まあ、タッチの差でソハネ特製の転移石を使ったのであったのだが。

「逃げられてしまいましたか。まあいいでしょう、明日チャンスはいくらでもありますからね」

サラのそんな声を聞きながら、光が弾けネール達は現実世界に戻っていった。

「待ってください。今直しますから」

回復魔法を使えるネールは駆けよってきたが、ジヨシユネが手で制した。

「まかり間違っても、直すんじゃねーぞネール嬢。そんな事するとお前を殺す事になるからな。これは勲章みたいなもんなんだ。まあ、

今のお前には理解できないかもしれないけどさ」

ジョシユネにとってネールが起こそうとした行為は、あの戦いを侮辱する様な行動であり、昔の自分なら間違いなく殺していた。どうにか怒りを抑えソイドとソハネを探しに行くといっってジョシユネはその場を去り、いつの間にかアーナの姿も無かった。

ソイドとソハネがいる場所は二階のテラスで、ソイドは手摺に手を掛け、外を眺めていた。

「俺は……酷い男だな。ソーや他の人達に、計画を押しつけ……自分は死んでもいいとさえ思っていた。勝手に絶望し、諦め、エンドレスを憎み、他の人達に強要しようとしていた。オロム達が裏切ったのも分かる気がする……。でも、そんな落ちぶれた俺でも、ついて来てくれた人がいた……。そんな事実にも気付かず、自分の事ばかり考えていた……。ほんとに最低だ」

それはソイドの懺悔の言葉であり、心の中で溜まっていた言葉が溢れ出した。手摺を強く握りしめ、肩はわなわなと震え、いつもよりとても小さく見えた。そんなソイドの肩をそつとソハネは抱きしめた。

「私は何があってもソイドの味方だから。やっと昔の様に、私の声が届いてくれた……それが何よりも嬉しい」

ソハネはソイドが戻ってきた時、昔に近づいた様に感じ、涙が出そうになった。共に戦い、共に生き残り、誰よりもソイドの事を見

てきたソハネだからこそ、その微妙な変化が分かった。ソイドの背中を冷たい雫が円状に広がった。

「ごめんなソー、本当につらい思いをさせてしまった……すぐには無理かもしれないけど、徐々に克服する……そしてもう一度前に進もうと思う……あそこで死んでいったもの達のためにも。だから俺は簡単に死んじゃ駄目だって、逃げちゃ駄目だって気付いたんだ……。明日は必ず生きて帰る……計画は少し変更するが、俺が起こした事へのけじめをつけるためにも。こんな俺でもついて来てくれるか」

手摺から手を放し、ソハネと少し距離をとり、振り返り、手を前に出した、一年間で笑顔を忘れ、模索する様な不器用な笑顔で。

「馬鹿だ……本当に馬鹿だよソイドは……ソイドは私が守るから、例え誰が死んだとしても」

ソハネを知っている者なら信じられないと思うぐらい蕩ける様な満面の笑みで、ソイドの手を握り返した。

「ソイド、ソハネ何とか無事帰ってきたぜ……って、ありゃ……こりゃーお邪魔だったみたいだな……あはは」

雰囲気をぶち壊すように、豪快にテラスの扉を開けたジョシユネは、ソハネの殺気に冷汗を流しながら、乾いた笑い声を上げる。

その後、ソイドとソハネに同じ光景を見せ、答えを聞くべく、集合場所に移動した。

第五十一話 『それぞれの明日へ08』

扉を開いた時、血濡れ姿だったがアーナは帰ってきており、全員がいるのを確認したソイドは緊張感あるこの雰囲気の中、おもむろに喋り出した。

「まず初めに言っておくが、参加しても、明日は天空十二神四人に熟練の冒険者達、全員が全員生きて帰れるような甘い考えは無い…もしかしたら全員が死ぬかもしれない。その場に流されて参加するのなら辞めておいた方がいい…そんな覚悟じゃ死に行く様なものだ。それを踏まえて全員に問いたい、参加するか否か」

全員を見渡しながらソイドは感情をなるべく抑え、冷静な表情で言うが、本音で言えば、ソハネとアーナとジョシユネさえ居れば、良いと思っていた。この四人でいけば死ぬ可能性は少なくなると考えている。仮に全員が来るとして、生存率は前者の四人が80%フエリは50%、その仲間たちは20%ネールに至っては何もしなければ一割にも満たないだろうと思っっている。正直言ってネールには来てほしくない。くれば、あいつとの約束を守らなければならぬ…まあ守る必要も無いけどな。とにかく一人戦力を割かなければならないし、オロムは家族を大切に作る人物なので殺さないと考えられるだろうが、それ同等かそれ以上に国民や冒険者達の事を想っているのです、全体の将来と家族、どちらかを切り捨てるとなれば…言わずもがなだ。だが返答は何となくだが分かっていた。

「参加する」

「参加な、いやー今からうずうずしてきたぜ」

「参加しますよ…あいつとの決着もまだですし、またあいつは…」

ソハネがいの一番に参加表明し続いてジョシュネが陽気に笑い、アーナは憎しみの感情を隠そうともせず参加を表明した。

「マスター、私達も参加します。何処までお力添え出来るか分からないですけど頑張ります」

少し遅れてフェリが、メンバーの総意を言い、その表情は決意に満ちた良い顔だった。

部下ができて成長したみたいだな。昔のフェリなら必ずソイドの意見に反する事はしないし、分からなかったら必ず聞いていたが、今では自分で考え、チームのトップとしての責任感ももっていた。

どんな種族でも時間の差はどうあれ少しずつ成長する。一時期立ち止まったとしても、後退したとしても又前へ向かって歩き出す…人とはそういうものだ。

少し誇らしげな顔でフェリを見た後、ゆっくりと視線をネールに向ける。

「今回の騒動で分かりました。私は弱いです。学校ではちやほやされて、自分の力を過信して…本当に馬鹿でした。でも私には仲間が居ました…私なんかよりもずっと強い仲間が…裏切られちゃいましたですけどね」

そう言ってネールは悲しげな笑みを浮かべ、ソイド達は黙って聞いていた。

「だから私は、取り戻したいと思ってます。鬼華、ガラド：仲間達を。もちろん簡単ではないと思ってます。でも、共に喜びを分かち合い、時には反発し合ったり、些細な事で笑いあったり、失敗したら悲しみを分かち合い、あの日々は嘘ではないと信じたいんです：ソイドさんの計画には足手纏いです。でも明日じゃなきゃ前の様には戻れない：そんな気がします。鬼華やガラドの前までで構いません、どうか連れて行ってください。死んでも後悔はしません」

こういう所が彼女と似ているとソイドは思う。とある魔法を見つげられるまで彼女は本当に力を持たない女だった。だが、一度決めた事はテコでも動かず、自分より圧倒的に強いもの達に立ち向かっていく：そんな所が似ていた。最も彼女はそれだけではなかったのだが。

もうソイドに言える事は一つしかなかった。

「俺達は死に行くためにいくんじゃない、生き残るためにいくんだ。それだけは忘れるなよ」

それから二時間程話し合った後、場を解散し夜は更けていく。明日の決戦が歴史に残る様な戦だという事を誰も知る由は無かった。

第五十一話『それぞれの明日へ08』（後書き）

これedyouやく次で第一章後半に入ります。

後半は戦闘部分が大半を占めるかなと思ってます。

第五十二話 『決戦』序章』 (前書き)

第一章後半始まります。今回は説明会となっております…戦闘を待って
いた方すいません、それではどうぞ。

第五十二話 『決戦〜序章〜』

午前6時、晴れの日には毎朝同じ時間帯で、儀似朝日が出て間もないころ、十人の男女がソハネの家の前にいた。

「行くぞ」

ソイドの掛け声に一同頷き、決戦の場に移動する。誰もが無言で静かに闘志を高め、まるで廃タウンとかしたかのように人っ子ひとりいない道を歩いてゆく。中心エリアに來ると二十四時間やっているギルドも、人の気配はなく、クローズの看板が掛けられていた。当然武器屋や防具屋等のお店も扉を木で打ちつけ入れない様になっている。

「あーあ、そんなに過剰にしなくても大丈夫なんにな」

ジョシュネが頭を掻き、めんどくさそうに言うが、『昨日街の一部を廃墟と化したのは何処のどいつだ』とは、誰かの心の中の代弁。今の空気でそんな事言う人もおらず、そこから北東…学園都市に向けて歩を進める。

「校門付近に多数の反応。多分オロムが雇った冒険者」

校門まで二キロ付近で、ソハネが皆を制止させる。

やはり思った通りか…。

深夜、伝書鳩がオロムからの手紙を届けてくれて……目的の場所

を教えてくれた。オロムの性格から罫は考えていなかったが、それが綿密に人員が配置されたアウェイの様な場所だとしても、ソイド達は行くしかなかった。何故ならこれはオロムからの配慮であり、ソハネの家を攻撃されていれば、その時点で使用人達等何人かは死んでいた。

「マスター私達が囿になります。その隙にソハネさんの転移で行ける所まで行ってください」

「分かった…死ぬなよ」

事前に作戦を決めていたのでソイドはすんなりと送り出した。

「マスターこそ…お気をつけて」

フェリはソイドに薄く笑いを向けた後四人の仲間達と共に校門に向かって走り出した。

「ソハネ、何処までいける」

「目的の建物の手前、中は阻害魔法を使ってる」

やはりか…とソイドは思う。おそらく誰かが待っているだろうが…。

阻害魔法とは、ある一定範囲内に、外からの攻撃や転移魔法等を防ぐ魔法である。

「行くぞ…ソハネ頼む」

ソハネはこくりと頷き、五人は姿を消した。

学園の南方にある一際高い五重塔と呼ばれる、五階建ての均一な塔で、周りは湖に囲まれ、そこまで行くのには、橋を通る必要がある。普段は学生の練習場として開放されており、その最上階にオウムは待っていた…三時間の時間制限付きで。

一瞬のうちに景色が変化すると、門の前には、鬼華とガラドが立っており、他には誰もいなかった。

「ここは行ってください…お願いします」

一歩前へ出て、杖を構えながらネールは鬼華を正面で見つめながらいう。逆に鬼華は、少し目を伏せていた。

「死ぬなよ」

「お姉ちゃんは弱いんだから自覚して危ないと思ったら逃げてね」

「まっ頑張りな」

「………これを持って」

ソハネは転移石をネールに投げ、一同は鬼華の横を通り過ぎ、妨害等は無かった…まるでこうなる事を最初から予測してたかのよう

く一階く

中は柔道コートの二面ほどの広さで、床はフローリング、奥に階段があり一階は無人と思われる、さっさと上の階に行こうとしたソイドたちだったが、突然アーナが立ち止まり。

「先に行つてー。後から追いかけますからー」

アーナの気配から察し、三人は上へと向かう。

三人が上へ上がっていくのを確認した後、憎悪と殺気を全開にし。

「会いたかったよー、必ず殺してあげるから早く出てきてねーアリ
ーシャさん」

く二階く

ここはジグザグに階段があり、部屋を抜けた所に階段があるのだが、真ん中にサラが立っていた。

「オロムさんなら五階にてお待ちしております。ジヨシュネ以外はここをお通りいただいて結構です」

「はあー難儀やな、ソハネ嬢とソイドはさっさと行きな」

うんざりするような様子だったが、それを気にする時間も無く

「お前が死ぬ事は考えられないが、待つてるぞ」

「…五階で待つてる」

そう言い残し、二人は三階に進む。

く三階く

ここには村正が待つており。

「ソイド殿、四階にて待ち人がおる、早く行くがよい」

ソイドに向かって上にいくように足したが、ソイドは少し迷っていた…何かがおかしいと。

三時間の時間制限に、仲間の分断。一見因縁通しに組み合わせられているが、ばらばらになったのは事実であり、このまま踊らされるのは癪だったが。

「問題ない。勝つのは私達。だから安心して上に行つて」

ソハネに促され、それでも少しの間悩んだが、やがて決心し。

「必ず上に来いよ」

ソイドは四階へと駆け上がり、扉を開いた。

第五十二話 『決戦〜序章〜』 (後書き)

今回はフェリの戦闘になるかと思います。

できる限り一章終わるまで3日以内に更新できるよう頑張ります。

第五十三話 『決戦〜フェリ01〜』 (前書き)

すみません遅れてしまいました。それではどうぞ。

第五十三話 『決戦〜フェリ01』

その頃フェリ達五人は唯一の出入り口である正門より五百m手前で、最後に隠られる場所で一旦様子を見ていた。正門付近に見えるだけで数は百五十、気配からおそらく三倍以上の人達が予測され、実に作戦会議で想定していた数値の数倍にも上る。それでもソイド達四人が戦ったのなら、三十分〜一時間程度で問題なく倒せるが、フェリ達では正直言って、勝つのは絶望的で、良くて半数、悪ければ三割ほど削れば良い方だった。誰もが、自分にとって意味のある死を望み、犬死にを嫌う。

それはフェリ達も同じで、動揺し不安そうにしている四人に向けて、冷静になるように足す。

「大丈夫ですよ。まだ策はあります…ですが」

そこでフェリが言い淀む。フェリが言うとおりまだ策があったが、それには数分間フェリが戦列を離れる必要があり、唯でさえ戦力が足りないのに、主軸が抜けたりしたら、早々に打開されてしまう。それだけは避けたかったが、普通に戦っても前者より時間は長くなるが結果は見えている。博打かじり貧か…。

マスターだったらきつところ言うのでしょね、『勝てる可能性があるのなら、そちらに掛けないのは自殺志願者だ』と。

思わず笑いそうになるのを堪え息を吐く。

よし。フェリの心はきまった

「まず作戦通りに行います、その後合図をしたら、五分間時間をください」

四人は息をのむ。それは死と同義の言葉で、死ねと言っている様なものだった。

「必ず殲滅します…ですから皆の命を私に下さい」

思えばこの言葉をいったのはいつ以来だろうか。ヒートエリアボスをチームだけで対戦した時か、はたまた合同でウォールエリアボスに戦いを挑んだ時か。思えばここ一年色々な事があった…とフェリは振り返る。

ソイド達が居なくなつて、フェリの環境は一変した。アーナは誰とも組まず、しつこく来る勧誘を拒否しソロでエンドレスに潜り、ジヨシユネは姿を消し何処にいるか分からず、他に残った人達はあまり交友が無かつたので分からなかつた。私はあのメンバーの中では断トツで一番弱かつたが、それでもいくらかは声を掛けられ、何処かのコミュニティに入るか、自分で作るか一ヶ月ほど悩みに悩み心臓が爆発するくらいドキドキしながら新規コミュニティの登録をするべく、一人で勧誘を行い、最初の人を受諾してくれた時は涙がでそうなくらい嬉しかった。それから五人、十人と増え、メンバー全員で、コミュニティの名前を考えるのに一日使ったり、ムーア、ヒート、ウォールと階層が上がっていく毎に、コミュニティメンバーは増え、その分コミュニティリーダーとしてプレッシャーはかかってくるが、ソイド達の後ろにくっ付いていたあの頃より実感があつた。今のチームは最初にコミュニティに入ってくれた四人。私が次に言う言葉もおそらく分かっているだろう。

「代わりに、生き残ったら、いきつけの店で一晩中酒を飲み明かしましょう。…もちろん私の奢りです」

恐怖や緊張で固まった状態で戦うなど愚の骨頂。それを取り除くのもリーダーとしての仕事だった。

緊張をほぐす様な、穏やかなフェリの表情に場の空気が変わり、それを肌で感じ立ったフェリは深呼吸し。

「いきましよう」

死地へと赴いた。

第五十三話 『決戦〜フェリ01』 (後書き)

次はフェリの続きか、前々から考えていた第零話投稿するか、どちらがいいのか悩んでいます。もし宜しかったら感想でお応えしてください。さるとうれしいです。

第零話の内容はソイドがアール四十九階〜五十階に行った時のお話で、さわり程度で詳しくは書きません。

第五十四話 『決戦！フェリオン』

学園側、オロムに雇われた冒険者達総勢五百人をまとめるのは、コミニティランキングトップ十に入る大手コミュニケーション・ブラッティ・デス」のリーダーを務める、隻眼で左目に眼帯をし、顎に無精ひげを生やし、筋肉隆々、腕には歴戦の傷跡があり、ウォールエリアに出てくる水竜の鱗で作ったプレートを身に纏っていた男が居た。

名はヴォルザック、仏空三十二傑で今は腕を組み、腰に装着している二mほどある曲刀には触れず、悠々と構えていた。

何故ならこれは八割がた勝利が見えている戦いだつたからだ。確かに冒険者として三流ハイアクラスのものも居たが、それは一割ほどで、二流ヒートクラスが四割、一流ウォールクラスが四割、超一流マシールクラスが一割で総数は五百人で八列に並び、一列目は剣や斧等の前衛冒険者、二列目は槍や鉾等の中距離冒険者、三列目は弓や銃等の遠距離冒険者、四列目と五列目は、攻撃魔法冒険者、六列目は補助魔法冒険者、七列目は防御魔法冒険者、最後八列目傷等を直す回復魔法冒険者で構成され、一列辺り五十人である。尚、職業等はまちまちなため一括させてもらう。

ちなみに、単体パーティでエリアボスを倒すとクラスが上がり、フェリは超一流に位置付けられ、仲間達は一流、ソイド達は超一流のさらに上で、クラス順で言うと最弱から、無級、三級、二級、一級、超一級、仏空三十二傑、天空十二神となる。

正直小国同士の小競り合いレベルの布陣で十人程度ならびくともしくなく、到達する前に殲滅される。ではなぜ二割負けるとヴォルザックは思っているのか、それは四人の超越者の存在で、オロムが策

を弄してこちらには来ない様に画策してくれてはいるが、もし一人でも、こちらに来たのなら、戦局を打開され陣は崩されおそらく一時間と持たないだろうと。

見えてきたのは、五人でソイド達四人の姿はおらずヴォルザックはにやりと笑う、これで勝ったと。

「総員戦闘準備、殺してもかまわねえ、ぶっ潰せ」

距離百、陣形は月詠の陣と呼ばれる、防御型の陣で、重戦士二人を間を開かせ左右前に置き、その後ろに、魔術師と僧侶、その中央にフェリを置いた陣形である。

フェリ達の目に飛び込んだのは、赤青紫土黒白、色とりどりのアロー系の攻撃魔法に闘気を付与し威力を増加した弓矢や火矢、水矢、雷矢等魔力を付与した弓矢等々、圧倒的スケールで逃げ場なく襲ってきたが、フェリ達は達は冷静を保っていた。

「あまねく外敵から我達を守れキューブロック」

当たるかに思われた攻撃は、魔術師であるホビットが放ったキューブ状に覆っている防御壁によって、防いでわいるが、数が数だけに、ゲリラ豪雨の中走行している車の様に、砂漠で歩いていると砂嵐に遭遇したかのように視界が悪く、又、そこに止まっているので

はなく、歩いている事から反発し、さらに付与魔術師が威力増加の魔法をかけているため、普通はアロー系魔術や威力の低い弓術では壊れないが、だんだんとひびが目立つようになってきた。

距離五十

フェリの目視で、この視界の中でも第一列目が見え…愕然とする。

そこには仲間であり、唯一朝に姿を現さなかったネコ族の女がすまなさそうに居た。

勝てる方に行くのは当然の理とフェリも理解はしているが感情が追いつかず、幸い他の仲間達には見えておらず、割り切るのに少し時間がかかり、その隙に第一陣と第二陣も攻撃を開始し、合わせたかのように3〜5列目も一斉に発射され、さながら、軍艦に対峙するヨットの様に、全壊させるとする、オーバーダメージ、防御壁など跡形も無く壊れる暴力的な攻撃がフェリ達を襲った。

第五十五話 『決戦（ネール01）』（前書き）

すいません、今更になってネールの事をリリースと書いてあって、ネールで統一し修正しました。それではどうぞ。

第五十五話 『決戦くネール01』

かなり離れたネールと鬼華、ガルドの所にも音が聞こえた。

「あちらも始まり申した…ネール殿、今なら何も見なかった事にします」

横幅三m、長さ四十八mの橋の上で、十mほど離れた所に向かって合っている鬼華とリーす。さながら牛若丸と弁慶の様な感じで、本当の話なら、無法者で勝気な弁慶に負ければ剣を捧げればならぬのだが、弁慶、もとい鬼華の方が何かに脅えている様で早々に立ち去るよう勧める。

あの話ともう一つ決定的に違う部分は、牛若丸がネール弁慶おにはなより弱い事だ。

「引きません。私は決めたんです。もう一度皆で迷宮を目指そうと。だから私は引きません…もう何も失いたくありませんから。もうたくさんなんです」

そういつて一歩前に踏み出す。

鬼華は剣を抜き、構えるが刀身がカタカタと震えていた。

「姉は私に優しくしてくれました…そして私から病魔という呪縛を解きなはってくださいました。でも私は、恩返しはおるか感謝の言葉さえ言っていない…だから私は迷宮の上について会って『ありがとう』と一言言いたいんです。そして紹介したい、私にできた初め

ての友達を」

さらに一步踏み出す。

鬼華の心はぐちゃぐちゃだった。あの後父村正から言われた作戦内容とネールを殺せとの指令。当主である村正の命令は絶対で、それが楔となって鬼華を縛り付ける。

もう一つは自身の心。鬼華はネールに憧れを抱いていた。いつも迷いなく突き進む姿や、学校のダンジョンでモンスターに負けても、学校の対人戦闘や誰に負けても目標を見失わない強い心…どちらとも自分には持っていない、自分の方が強いはずなのにとても大きく見えた…そして初めて友達だと言われて嬉しかった。

だからそんな人を殺したら後にはもう戻れなくなる。あるのは心を壊し命令に忠実な生身人形。逃げたと分かっている…だがこれしか方法はなかった。

だが…どんどんと近づいてくるネール、逃げられない自分、斬る事を拒否している心。

鬼華はもうどうしたらいいのか分からなかった。

「…来ぬな」

「母は、昔から私の事を目の敵にしていました。姉が居なくなっただけから気が触れて、何を放しても反応しません。全ては私のせいです…だから私は上にいって母を直すような頼むつもりです。できれば姉もつれて二人で母の前に立つつもりです。立ったひとりの母ですから分かりあいたいんです」

どんと進んでいくネールに。

「あ~~~~~」

剣筋も動作も何もなつて無い、唯我武者羅に振るっただけのカマイタチを発生させる疾風斬り。無意識のうちに中心部分を避けた攻撃で殺せるはずもなく、頬や脇腹、二の足付近に傷をつける程度に終わり、ネールは構わず前に進む。

「妹は私が守らないといけないと思っておりました。ですが妹は遙か先に居ることを痛感させられました。病気だったとはいえ、さびしい時に一緒にいてあげられなかった事を後悔しています。でもそれはそれで良かったのかもしれませんが、妹にはもう居場所がありませんから。でも、姉妹の絆を直すのには今からでも遅くわないと思つてます」

近づくとつれ傷の量も増え、血の涙の様に、ざつくりと斬れ、手足や体からも血が流れ落ち、血痕というよりも線のように歩いた後は橋に付着し、傷は治さず、あくまで無抵抗な状態で、それでも尚進み続ける。

「父は昔から遠い存在でした。ですから父の事は何も分かりませんが、でももしこれが終わっても生きていたとしたら、分かりあえる努力をしたいと思います。今までの様に委縮し怯えるだけでなく分かりあえる関係に」

今まで述べた言葉は、何ら嘘偽りの無いネール自身の心の声。だから鬼華にも響いていた。

スツ…と手から武器である刀を落とし、橋の下に膝を落とす

「ネール殿、もうどうしたらいいのかわかりませぬ」

距離はゼロとなり、包み込むようにネールは鬼華を抱き締めた。

「今まで聞かなかった事、言えなかった事、何でも話しましょう。辛かったんですね、苦しかったんですね。溜めこまずに話してください、微力ですけど力になります。これからまた新しい関係を気付きましょう…何でも言い合える本当の友達に」

「うううう…」

嗚咽の混じった鬼華の声に背中をさするネール…その背後に今まで沈黙を守っていたガラドの姿があり。

「悪いな讓ちゃん達」

非情にも、ガラドは己の役目を果たすため相棒の斧を振り下ろした。

第五十五話 『決戦〜ネール01』 (後書き)

すいません。次こそフェリの続きに行きまして、その次はアーナに移ろっかなと思います。

第五十六話 『決戦くフェリ03』

結果的にいえば、フェリ達五人は生きていた。

まず、一番最初に起こったのは防壁の決壊だった。

もともとひびが入って壊れそうだったという事もあり、加えて一、二列目の疾風切りや十字突きも加わり、一秒もたず破壊されるが、司祭の女が、重戦士の二人に硬化魔法をかけており、二人自身も硬化術を使っているため、一列目く三列目の攻撃を防ぎ、まだ魔術体制の硬化術は持っていないため、魔術師の女が魔硬化シールドを張り対応する。もう少しレベルが高ければ、三つの技中一つだけで事足りたが、そこには分厚い壁が立ちほだかり、一流と超一流の差でもあった。

それでも、三つを重ね合わせた成果で大量の攻撃を受けているのにいまだに無傷である。それは、相手側が攻撃の反発を恐れ三流冒険者に合わせた、威力の低い攻撃をしているため、幾ら上の冒険者でも、三流冒険者よりは上だが、それでも二、三倍程度で、それ以上増やすと、相殺しあい、位置がずれたり、攻撃力が半減してしまつので、抑えているのも要因の一つである。でわ何故最初からやらなかったかという点、できるだけ余力を残しておくことと、防壁が破壊されるのが皆で決めた合図である。

「我は剣に愛され剣の道に全うし、これより剣の詩を言霊として捧げる、変わりに我に力を貸したまえ、最終剣章、インフィニティアルティメット ソードく道の果ての詩く」

これはかつて、世界でただ一人と言われている、歴代冒険者最強

と謳われていた『歌姫』に教わり、自分なりにアレンジしてようやく出来た、フェリオリジナルの技で、歌姫の様に歌にのせて闘うスタイルは無理だが、詩を試行錯誤して書き、初めは失敗ばかりだったが、歌姫の助言の元、あの日の一週間前に完成した。欠点として平坦な声で一定のリズムを刻むため、少しでもずれると、技は発動しなくなるため、動く事もままならなくなる。最も歌姫の方はこれよりも酷い制限がある中、自由自在に動き回っているのだが……。

今は位置を変え最後方に周り、詠唱を始めた。だがこれこそがヴォルザツクの狙いで、勝利を確信し、寧猛に笑う。

「おめえ達、ぶっ殺せっ」

そう、先ほどから攻撃していたのは、一流以下の冒険者達で、第一陣、第五陣内にいる総勢二十名の超一流冒険者達は闘気を溜めたり、詠唱したりで、今の今まで準備していた。あの攻撃の効果には音で敵に詠唱しているのを悟らせないためと、第一陣の攻撃範囲まで誘導するため、そのためにフェリ達の仲間であり、裏切り者の人物を一番見える位置に配置したのだ。

防壁の強度、敵の攻撃、全体の攻撃範囲、仲間データ、それらから瞬時に判断して的確に指示する事がリーダーの条件でもあり、その点で言えば二人はかなり優秀な部類に入り、今の所両リーダーの思惑通りに事が進んでいた。一つフェリ側に誤算があるとすれば、裏切りに会い予測ポイントから少しずれたという事で、フェリの修正範囲内だが、それがどういう結果を生み出すか、誰もまだ分からない。裏切り者の女はヴォルザツクの合図とともに周りにいた人達から串刺しにされ、一足先に冥府への旅路に進んだ。裏切り者の末路というのは遅かれ早かれこう言う結果になり、それはフェリや遅れて見えた仲間達にもこうなる事は分かっていたため動揺はしておら

ず、かくして決死の五分間が始まりを告げた。

第五十六話 『決戦〜フェリ03〜』 (後書き)

うん、すいません、展開が余りに進まなかったものですからアーナの所に進むか、もう一話フェリ編を続けるか悩み中です。

今の所フェリ編は05までいくかと思えます。その後……。

次の更新は遅くても月曜までにはするつもりです。

後、この前、第零話を初めて割り込み更新したのですが、最終更新日に反映されないのはじめて知りました。まだの人はどうぞ見てってください。

第五十七話 『決戦くアーナ01』

一方その頃アーナは、ニヤムとワロを召喚するが、アリーシャを倒しても倒しても、変化を得意とする狸にすり替わり、その度にアーナに返り血が飛びちる。

動物を犠牲にし、自分が助かる…それがアーナには何よりも許せなかった。

動物使いには、大まかに分けると二つの流派が存在する。

一つは正道派と呼ばれる、シーベルト家を中心とした、『動物と一心同体で自分の命と同等である』を志しとし、パートナーとして扱う。契約も両者の合意のもので成り立ち、アーナもシーベルト家長男のカミュの下に着き、この流派を学んだ。当初縁もゆかりも無いアーナを入れるのに反対も多かったが、カミュの働きかけや、自身の努力により次第に認められ、今ではカミュの次に強いといわれている。

もう一つは邪道派と呼ばれるペングラム家を中心とした『動物とは変えのきく道具で、自分の命と比べるなど論外だ』と教えられ、アイテムと同じように消耗品としか見ておらず、動物達の意思は、闇の契約と呼ばれる強制的に契約を結ばせ、契約者の思うがままになり、その長女アリーシャも例に漏れず、自分の動物達がいくら殺されてもへいきだった。

二つの流派は、長きにわたって対立しており、アーナも又、カミュの後釜として天空十二神となったアリーシャを忌み嫌っていた。そう、殺したい程に。

それでもアリーシャが使役している動物達に罪はなく、アーナは動物を殺すたびに心臓に小さなとげが刺さる様な痛みが襲い、精神が心が張り裂けそうだった。

ニヤムやワロに限らず、アーナは動物が好きだった。学校が無い日は、公園で動物達と一緒に遊んだり、動物は純粋で裏表が無く、カミュに会う前、アーナにとって唯一の友達であり心の癒しであった。そんな動物達は殺すのはアリーシャを殺すためとはいえ何よりも辛い。

アリーシャが現れる。殺す。狸を殺す。又アリーシャが現れる。殺す。狸を殺す。動物を殺す永延のループ、アリーシャのストックは大量にあり、体というより心が壊れそうだった。それがアリーシャの狙いであり、自分の動物を殺させるだけで勝てるのなら安いものだった

「ニヤム」

「わっ」

傍らにいる二匹の犬猫が心配そうに泣き声をあげ、ハッとアーナは我に返る。殺す事に気をとられすぎて、周りが見えていなかった。

「ありがとうー、ニヤム、ワロ」

目の色を変えたアーナにアリーシャは小馬鹿にしたような笑い声をあげる。

「これで壊れてくれればやつすいもんだっただけどね。まあ、次の段階で壊れないようせいぜい努力してね。カミュに捨てられた良い子ちゃん。きゃはははあは！……！」

アリーシャの姿が最初の時と同じようにそこにいなかったかのようにならぬ、現れたのは。

「うそっ………」

目を見開き素の声を出し、嫌々する様に後ずさる。信じたくはない、目を背けたい事実が目の前にあった。

アーナの眼前に現れたもの達、それは公園で一緒になって遊んでいた動物達だった。

相手の弱点を突き、こちらの有利に持っていこうとするのが、アリーシャの真骨頂であり、アーナの弱点は、自分のパートナー以外にも動物に必要以上に依存してる事であり、そこをつくために、公園に出向き、動物達を無理やり支配下に置いた。今日の日のために。

友達ともいえる動物や鳥達が群れをなしてアーナに襲いかかる。

第五十八話 『決戦くフェリ04』

ありがとう皆。残り三十秒、生き残りは、フェリと重戦士二人だけとなり、フェリは音を外さないよう必死に感情をセーブし、詠唱を続けている。

「途方も無い道の中で、ただひたすらに歩み続ける。そこに終わりはあるのか、そこに求めている先はあるのか、分からないが、それしか我は知らない、愚直なまでにただひたすらに歩む」

一方ヴォルザックは焦っていた。本来最初の攻撃で終わる予定だったが、自分が徐々に石化になっていくのを条件とし、一日一回を限度に絶対不可視の壁を張る目玉族の禁忌魔法で、リミットの二分間を越えなければ、一日で直るが、少しでも時間を延ばしたいこの時、フェリからは一分間で止めるよう言われていたが、僧侶の女は二分間使うのを決めており、二分が消費され、高位の冒険者が、チャージに入ってる合間に再度一斉攻撃を掛けるが、三つの防壁は健在で、防がれる。残り一分の所でチャージが完了し、攻撃命令を出し、今度こそヴォルザックは勝利を確信するが、魔術師の女がいつの間にか遙か後方の離れた場所に立っており、制限距離関係なく、自分に相手の攻撃を全て集める魔法を使い、命を散らす。そして現在、再び攻撃を防がれた事で間接ではなく直接攻撃に切り替えよう指示し、第一陣と第二陣が殺到するが、フェリを覆うよう重戦士二人は岩とかし、攻撃を防いでいる。

皆は私の事を信じて命を掛けて時間を作ってくれた。フェリは素晴らしい仲間達に感謝する。残り五秒…。

「人は誰しも願いがある。私の願いは、剣と賭す事、インフィニティアルティメット ソード発動」

それは、囲んでいた両方の岩が破壊されるのと同様だった。

小型戦艦と同じような長さの巨大な剣で、数は九十七、これこそゾルクより総合的には弱い、次期天空十二神と目されるフェリの字『突きの戦乙女』の代名詞にして最強の技で、広範囲攻撃に限れば、三本の部類に入る。

囲んでいた第一陣と第二陣は、現れた剣に串刺しにされ、フェリは一本の剣上に乗る。

「行け！」

絶対に皆の想いを無駄にしないために、どうか私に力を、相手を殲滅する力を！

ヴォルザックはこうなる前に全てを終わらせたかった、最も今となつては無理な話だが。

これで勝敗は五分つてわけか、神さんもおもしれえこそすつぜ。勝てる方法を自分の経験から最善に行い、それをなしたと冒険者生命を掛けてヴォルザックは誓うが、それでも心のどこかでこうなる事を望んでいた。だってよわくわくすっじゃねえか、広範囲攻撃で三本の指に入るっていう技を拝めるチャンスなんてそうそうあるもんじゃねーからよ。

「第六陣までは、攻撃を放ち相手の攻撃を軽減しろ、第七陣は防壁

を張りやがれ」

両方ともできる事は終わり、どちらかが勝つかは神のみぞ知る。

第五十九話 『決戦〜フェリ05〜』 (前書き)

フェリ編決着です。
それではどうぞ。

第五十九話 『決戦くフェリ05』

攻撃を受けてもびくともせず進行速度に変わりはなく巨大な剣の軍勢とその上に乗るフェリは、防壁まであっという間に到達し。

「いけええええ！」

フェリの魂の咆哮をバツクに、五十層の防壁が剣と衝突し火柱を上げ、一枚、又一枚と破壊され、全てを破壊するのに二十秒とかなかった。

「くそがアアア！」

ヴォルザックは唸り声をあげ、闘気を全開にし、迫りくる剣をさばく、もう陣も何もあったものではなく、戦線は崩壊し蹂躪していく。

しかし、裏切りに会って位置がずれた事で、思わぬ誤算があった。フェリは敵の指揮官を位置見て、第二形態を発動させ自身の剣で貫く予定だったが、三mほどずれ、すれ違う。

そこに気を取られ、タイミングを逸し、それが……生と死を分け、勝敗さえも左右する。

第八陣より十m後方で軍勢を消し……途端にフェリが宙を舞う。

「くっ……」

ヴォルザック他二十名程生きており、無防備なフェリの背中に様

々な技や魔法を叩きこむ、

その結果が今で、何処から流れてるのか分からないほど、血だまりができたもはやフェリは指ぐらいしか

満足に動かせなかった。何もしなければ一分の持たず死を迎える…その位の致命傷だった。

どうやら…私も、ここまで…見たいです…皆ごめんなさい…勝つ事ができなかった…マスター、すいません、もう生きて帰ると約束したのに…果たせそうもありません。

目の前が暗くなり、死神が今か今かと鎌首をもたげ待っている。

ぎりぎりの勝利だったな…裏切った女が居なけりゃ、俺も墓場に

いったたぜえ。第一陣一人第二陣二人第三陣〳第八陣三人ずつ、計二十一人が、インフィニティ アルティメット ソードを受けての生還者であり、そのほとんどが一番攻撃が薄かった場所での生還で、約九割が超一流冒険者、その実力があっても半数近くしか生き残れなかった。第一形態でこの威力なので第二形態を発動したら、どうなったか言わずもなだった。

もはや、誰から見ても既に勝敗は決しており、周りの冒険者達が安堵の溜息を吐く中、ヴォルザックはさつきから嫌な予感がしてならなかった。生き残っているのがもはや虫の息のフェリだけで、そんな心配する必要も無いのだが、どんどんと増すばかりで、そしてフェリの方向を見て戦慄する…死神の正体を。

「……………あつたかい」

そんな言葉を呟きフェリは意識を失う。

「よく頑張ったな、さすがは俺の娘だ」

黒の衣装を身に纏い、顔が見えない男はフェリの頭を撫で、ヴォルザック達を見据える。

「全員逃げろっ！」

その男が誰か知っているヴォルザックは、そう言い、無防備な背を向けてでもこの場を後にしようとしたが。

「どこ逃げようとしてんだてめえーら、てめえーらには逃げ場はねえよ、なぜえならここは既に俺の腹中だぜ」

第五十九話 『決戦くフェリ05く』（後書き）

見ていただいております。フェリ編終わりました。大体構想通りに書けたのですが、感想がないのが少し怖いところです。宜しければ感想お願いいたします。

フェリの仲間達は、最初の構想で死ぬ予定でしたので、深い設定はなかったのですが、キャラが余りにも薄く仕上がってしまったので詳細に書いた方が良かったかなと思っております。

現在の計画では一話ジョシユネに移った後、ネール編を終わらせようかなと思っております。

それではこれからも宜しくお願いします。

第六十話 『決戦くジヨシユネ01』

ジヨシユネとサラは戦ってはいるが、何かを待っているかのよう
で、練習みたいに軽く攻撃する程度だった。そもそもサラはジヨシ
ユネをどうこうするつもりはなく、ナスカが亡くなった後の攻撃も
避けるか確信していたからこそ放った。サラは別にオロム側の人間
ではなく、ある条件の元一緒に行動したに過ぎない。

天使族の家族同士では共感と呼ばれる感覚が存在し、意識すれば
相手の見ている場所を見る事ができる。思えば兄も、好きな人がで
きて、あの日その人に着いていき、最後はその人を守って亡くなっ
た。その雄姿を共感で見えていたサラは羨ましく思う。好きな人を守
って死ぬ事は天使族にとって最大の誇りであり名誉で、最期は満足
したかのように惚れ惚れする笑顔だった。まあ、彼女は途中から来
たお茶らけた男に奪われてしまい、彼は生きていますが、どうでも
いい事です。本当にサラにとってどうでもいい事で、彼女の中心は
ジヨシユネが占めていた。性別の差とか関係なく、例え同じ女性で
あったとしても。だからこそ、サラは待っている、多分ジヨシユネ
と同じ人だが違う目的を達成するために。彼は必ず来るだろうとサ
ラは思っている。だって娘をむざむざ殺されるのを黙って見てる親
などいないのだから。

一方ジヨシユネは、仲間に罪悪感を抱きつつも、来るであろう待
ち人を想い心臓をバクバクさせていた。その人は自分を救ってくれ
た恩人であり、親の様であり、恋する人であった。一年前のあの日、
『ちい、面白くねえーな』と言って旅に出るその男に、一緒に行く
とジヨシユネは言ったが、ある条件を達成すれば同行する事を許し
てくれたが、その条件を達成できなかった。悔しくて情けなくて、

この一年腕を磨き、ようやくその男が帰ってくる。

悔しいが彼は娘であるフェリのところを一番気にかけており、フェリがこの作戦に参加する事に内心嬉しく思っていた。彼女がピンチになれば必ず男は出てくると。

はあ、あ、我ながら嫌になってくるな、仲間が死ぬと分かりきつてんのかな。ジヨシユネは自嘲気味に思考する。あの時、ソイドヤソハネやアーナも分かっていたが、四百人位いてフェリの仲間：裏切り者も居ると分かっており、数からみてフェリの仲間達は助からないだろう思っていた。

だがジヨシユネは後悔していない、今度こそ条件を達成し旅に連れて行ってもらうために。

「シユネ、どうやら来たようです」

「そうかそうか、とうとう会えるのな、サラ譲頼むぜ」

「お任せくださいシユネ」

昔コミュニティでコンビを組んでいた事もあり息ぴったりだった。

まずジヨシユネが銃を使い壁をぶちあけ、呼吸を合わせサラ前にして等間隔で二人は走り、ぶち破った所から飛ぶ。サラが天使の翼を広げ、ジヨシユネはサラの足に捕まる。そして下で行われている戦闘など関係なく、目的の場所まで飛んだ。

そこは学園都市だった面影はなく瓦礫の山と化し、倒れているはずのフェリは、男が転移石を使い安全な場所に移動させており、悠

々と立っているその男以外もはや存在していなかった。

ジョシユネとサラはその付近に降り立つ。

「よお、てめえーらか、久しぶりだな。ちったあ成長したかあ」

首をコキコキと鳴らし、一年ぶりとは思えないほど自然体な感じと言う。そこには緊張も不安も虚勢も驕りも嘲りも無かった。自由奔放な振る舞いに、自由気ままな行動力。それこそが自由王と言われるガリバーン・ハートネットの由縁だった。ちなみにフェリはガリバーンと離婚した母親の姓を名乗っている。

変わってないな、それでこそ私が愛した男だ。ジョシユネは誇らしく思いながら単刀直入に言う。

「よお、ガリバーン、約束を果たしてもらいに来たぜ」

「あゝあの約束かあ、まあ前菜がしょーも無かったから、きなあ、てめえーら二人がかりでかまわねえーぜ。条件は前と一緒で、どちらかあ一撃でも当てりゃ、旅に連れてやってもいいぜえ。最も一人は違う目的だろおーがな」

ガリバーンがくいくいと人差し指で挑発し、戦いは始まった。

第六十一話 『決戦！ネール02』 (前書き)

とうとう10万文字の大台突破しました。

まだまだ続きますのでこれからも宜しくお願いします。
それではどうぞ。

第六十一話 『決戦！ネール02』

ガラドが振り下ろした先はネール達に……ではなくやってきた敵にだった。

五m離れた敵を斧圧だけで吹っ飛ばす。

「感動してる所悪いが敵だぜ。まあ、俺様様にかかればちよるいもんだが、せつかく三人揃ったんだ。がはは、前みたいにやるーぜ」

ネール達の方を見てニカッと笑う。

顔を見合わせ頷き合った二人は立ち上がり、ネールが回復魔法をかけ、二人の傷は塞がっていく。

本当に来てよかったとネールは思う。絆を失うばかりかより強くなったと。だから…生きて帰ります…私達三人で。アーナやソイド達の事は気にかかるが、行っても足手纏いだとネールは分かっている。人には不相应という言葉がある。だが人には人の戦いという者があり、それが主役と呼ばれる強者同士の戦いではなく脇役の戦いだとしても、そこには守るべき物、失いたくない物がそこにはあった。

轟音がし後ろの建物の二階部分が吹っ飛び、二人の女が飛び出る頃、橋の向こうから次の六人が向かってきた。

ヴォルザックは百名ほど別働隊に配置し、念の為退避している学生達や正門以外から入ってきた敵が居るか調べる為に配置したもので、見つければヴォルザックに報告が行くよう手配してある。塔の

中に行くのは禁止してあるが、その前まで行くのは禁止しておらず、最後に各々がここに来て、学生服を着ていない冒険者三人をみて、敵と判断し橋の方に駆け付けた。

橋は五人ほど並べば窮屈で戦闘どころではなく、相手の的となるので、二人ずつ、前衛、中衛、後衛の計六人の一チームずつ、橋を渡り、後は待機。渡る順番は最初に来たグループ順である。それには二点理由があり、一つは二グループ三グループと多くいきすぎると、かえって攻撃の妨げになるためと、もう一点は全員来て橋を壊されれば、深さ10mほどある湖に、沈む事になる。

そう言うわけで、最初の六人がネールと鬼華が二人で抱き合い、注意をこちらに向いていない隙に攻撃しようとは向かっていたが、ガラドの斧によって前衛が湖に吹き飛ばされ、後ろにいた人達も落ち込まれて落ちた。別働隊は三流冒険者が多く、簡単にやられてくれて、ガルドが拍子抜けしたほどだった。

そして三人体制となり、配置は前衛をガラドで少し斜め後ろに鬼姫、三mほど後方にネールが立っていた。三流冒険者は、闘気や魔法すらまともに扱えない者が少なくなく、本体に選ばれた者はまだましで、別働隊に選ばれた者三流者は、ヴォルザックに使えないと烙印を押され、はつきり言えば、初心者とドングリの背比べ状態でネールよりも下で、鬼華とガラドだけで十分対処でき、どんどんと湖に斬り飛ばされる。

二グループ、三グループと同じような状態で、幾分か鬼華とネール人の顔に余裕が生まれてくる。これはいけるのではないかと。

だが、ガラドの顔はだんだんと険しいものになっていく。ガラドは傭兵をしていた時の経験から知っていた。そう言う時こそ危険を

知らせる合図だと。

だから、納得がいく。次来たグループが今までのグループとは次元が違う事を。

「譲ちゃん達、気を引き締めろよ。次のグループはちいーとばかり、強いからよ」

「ありがとうガラド。そうですね、明らかに今まで来たグループとは違います」

「感謝いたしまする、ガラド殿。ゆるんだ気を引き締めなければ勝てませぬ」

次のグループは二流冒険者…ムーアエリアを越えた人達で、ネー
ル達より格上の存在だった。

第六十二話 『決戦くネール03』

「鬼神流・桜散花・流れの三・皐月」

「豪力+トマホーク」

距離十m、先手必勝とばかりに鬼華とガラドが、闘気を載せ自身の武器を振るう。

鬼華は鬼神流の中で、唯一桜散花をマスターしており、奥義はリスクが高い事もあり、四つある型の内、直線的だが最も桜の数が多い型で、剣を掲げた状態で一回転し、肩ほどまで振り下ろす、剣先から桜の花びらが風で散るかのように舞い吹雪く。

ガラドは斧を勢いよく投げる。ブーメランと同じ要領で大きく弧を描きながらこちらに返ってくるという技だ。

これで倒せるという事は思っておらず、あわよくば湖に落ちてくると狙った技だ。

しかしそう簡単に上手くいくはずはなく、桜は相手のシールドによって弾かれ、斧は前衛の一人に簡単に弾かれた。

鬼華とガラドは、自分の攻撃が失敗したというのにニヤリと笑う。二人はは足止め役で本命は別にあった。

「水竜リーヴァよ敵を圧する力を我に貸したまえ、ビックウエーブ
(波の鼓動)」

湖があるこの地は水竜の加護を持っているネールの絶対的有利な場所、つまりは独壇場である…実力差を覆すほどに。

大量の波が敵のパーティーを洗い流す。

波が行った後は何も残っていなかった。

その光景を見て冒険者達は誰もが二の足を踏んで、橋の上に行こうとしなかった。

それもそうだろう、先ほど戦ったパーティーは橋の前に屯っている中、一番強かった者達で、それが殲滅されたとなれば足が止まるのはなんら不自然ではなく、しかも魔法なので、橋の何処にいても、流される可能性があるので慎重にもなる。それがネール達の術中にはまっているとは知らずに。冒険者達が制止している時間で次の策は完成していた。

「…湖の中へと誘え、タイタロスウェーブ（誘う波）」

詠唱を終え、ネールが冒険者達の方に杖を向ける。

突如湖から水が飛びだし、二級程度の防壁は、湖全体を味方にした、ネールの魔法の前では紙同然で役に立たず、冒険者達に付着し、湖の中に引っ張られる。その吸引力は、水を張った状態のプールに入り、自分から栓を抜いた時よりも数倍大きく、為す術もなくの湖に飲み込まれていく。

あれから三十分ほどが経過しており、地の利を生かし今まで五十人ほど倒し、あらかた冒険者達を片づけたのだが、ガラドの額にはひあ汗が伝い、先ほど感じた悪寒も健在で、頭の中の警報がガンガンとなつている。ここまでやばいのは、傭兵自体敵の陣地内で瀕死の重傷を負った時以来の感覚で、体中が逃げろと言っている。鬼華も又、さっきから震えが止まらなかった。この感覚は、修行で模擬戦闘を行っている時の父親や兄弟達と対峙した時と同じ様で、震えの正体は殺気だと分かっている。父親達はある程度抑えていたのに対し、こちらは全開で、見えてもいないのに蛇に睨まれた蛙状態でこのままでは戦闘もままならないと分かってはいるが、体が戦闘を拒絶しているかのように抑えられない。ネールはまだ何も感じていなかったが、二人の様子から尋常ではない敵が迫っているのを感じ取り、詠唱も完了し後は名前を呼ぶだけで発動できる状態でじつと来るのを待っていた。

来る。

圧倒的存在感を持って見えてきた六人のパーティは、マシーリエリアを拠点として活躍している、去年の最強パーティ百選にも選ばれた凄腕冒険者達で、今のネール達では次元が違い、逆立ちしても勝てない相手だった。

第六十二話 『決戦くネール03』 (後書き)

次の話でネール編終わりです。

その次はアーナ編に移ろうかなと思います。

第六十三話 『決戦〜ネール04』 (前書き)

ネール編決着です。
それではどうぞ。

第六十三話 『決戦くネール04』

「……タツ…イタロス…ウエーブ」

呼吸するのも苦しいほどの重圧を受け、ネールはかすれた声で咳く。

先ほどと同じように、水が勢いよく冒険者に付着せんと飛び出すが、大剣持った前衛の一人が振り下ろすだけで、モーゼの十戒みに湖が割れ、触手の様に襲ってきた水も露散した。

「ちと加減を間違えたか」

大剣を持っている男は、めんどくさそうに咳く。彼等にとってネール達は敵として認識されない言わば葉虫の様な存在で…約半数がここに来なかったとある理由により、来たくはなかったのだが、誰かが終わらさなければならぬという事もあり、ここに来た。それならヴォルザックの本体にいればいいと思うが、大手コミュニケーションであり、ヴォルザックに意見でき、冷静に判断した一部の実力者は軒並み別働隊にいる。それは、今起こっている結果を予期していたからだった。

「がはは、俺様様でもこれはやばい。譲ちゃん達、俺がここも守るから、二人で塔の中に行ってくれや、ここよりも安全だと思うからよ」

「私もここを守ります、だからネール殿は行ってください」

勝てない戦いだと、分かっており、鬼華など剣を握るのもやつとな状態なのに、二人は安心させるようネイルに笑みを向ける。

思えばここ数日、今の自分なんかでは話にならないほど強い相手と闘ったとネイルは思う。

一回目と二回目は殺されなかった。それは他に目的があったためであり、殺す気は毛頭なかった。むしろ、ネイルを技から第三者から守った。だから自由に動けたし、最大限の力も出せた。今までにない死の恐怖から、足が竦み鉛の様に動かない。

もはや残された道は一つしかなかった。

魔術師が杖を高く上げる。

どうか私に。

今まで感じた事の無い死の予感を前に、涙を流し、心に活を入れ、鬼華たちの方に向かう。

距離にして三mだが途方も無く遠い距離に感じる。だが前に進まなければみんなを助けられない。

皆を守る勇気を！

「エレクスパーク」

鬼華達の頭上から雷が襲い、橋ごと焼失した。

だが間一髪ネイルは転移石を使い、三人は脱出できた。

「がはは、俺様様とした事が又負けてしまったぜ…ネイルの穰ちやん…ありがとよ」

「そつでございますね。ネール殿、ありがとございまする」

言葉とは裏腹に二人の顔は晴れ晴れとしていた。

「私達は仲間ですから、礼には及びませんよ。それに又負けてしまいました。でも私はこれで良かったと思います。勝てないまでも、生き残る事ができました。今ならソイドさん達や妹の言う事が少しだけ分かります。死んでしまつたら、これからの成長はありません。生きていれば誰にだって勝てる可能性は出てきます。これから数多くダンジョンに潜る事になると思います。そこでも惨めでも泥臭くても、必ず生きて帰りましょう。彼等に認めて貰えるぐらい、上を目指せる位強くなるために」

ネールはこの戦いで出来る事はもはや何もないと察していた。だからせめて祈り位はしようと塔の方角に体を向け目を瞑り手を組む。

妹も含め、どうか皆さん無事でありますように。

第六十三話 『決戦〜ネール04』 (後書き)

次話は3日後あたりを予定としてアーナ編に移ろっかなと思ってお
ります。

第六十四話 『決戦くアーナ02』

最初の三十分アーナは逃げに徹していた。例え攻撃を受けたとしても、攻撃する気はなかった。見える攻撃は避け死角等からの致命傷になる攻撃はニヤムやワロが防いでいた。だが傷付けるかもしれない、闘気や防壁も使わず、三十以上もの攻撃をいつまでも避けきれぬはずもなく、アーナはおるかニヤムやワロにまで傷が増えていき、血を失い動きが遅くなり、攻撃を受ける頻度も高くなってきた、そして、ニヤムを狙った鹿の致命傷をおわせる攻撃に、避けきれないと判断し反射的に双剣を抜き、首筋を斬りつける。

びくびくと痙攣し鹿は動かなくなった。殺してしまった：友達を。突如アーナは込み上げてくる嘔吐感に堪え切れず床に手を着き吐く。それは致命的な隙だった。

もういいよ。友達を殺してしまったショックから虚ろな目で、一斉に襲いかかってきた敵を見上げた。

身構えるニヤムとワロだったが、一向に攻撃してこず、途端に動物達は苦しみだした。

「があああ」

「にやあああ」

「うううううう」

動物達も抗っているのだ、アリーシャの強制化でも尚アーナやニ

ヤムとワロを攻撃するのを。飼い主が愛情を持って育てれば懐いてくれるのと同じように、動物達も、よく遊んでいたアーナを攻撃するのは辛かったのだ。

アリーシャの強制力に抗うのは肉体的にも精神的にも相当な労力を要し、抗う分だけ継続的に脳や体に激痛がはしり唸り声をあげる。

命令が実行された後は、例えばアリーシャを殺しても解除されず、解放するのは……一つしかなかった。

このままでは狂い死にする。動物達はもう攻撃する気はなく、苦しみを癒してあげるには。

アーナは双剣を強く握り、唇を噛み締め、とめどなく涙が溢れ、でも楽にしてあげたかった……もうこれ以上私のせいで傷付かないために。

「ニヤムウ…ワロオ」

「ニヤ！」

「ワウ！」

そう、苦しみから解放するには殺すしかなかった。

せめて苦しまないよう、アーナとニヤム、ワロは十秒とかわらず、一撃のもと、全部を殺した。

「ごめんね」皆、辛かったのねえ、苦しかったよねえ、ごめんねえ私のせいでえ」

動物の亡骸を抱きあげ、しゃくりあげるように、懺悔の言葉を口にする。

「ニヤオオ」

「ワオオーン」

ニヤムやワロも、弔いの遠吠えをあげる。

「あららもう死んじゃったのかしらあんがいあつけないわねえー私の命令に抗ってほんとに憎らしい。それより同、友達を殺した気分は、最高だったでしょう、きゃはははははははははははは」

狂った様に笑い声をあげるアリーシャ、耳障りな声に反応せずアリーナは亡骸を丁寧に床に置く。

昔、カミュからある技を教わり、『この技は邪道な動物使いにとって絶対的に効力の持つ技です。しかし、この技を使うのにはリスクがあります』

今でも一字一句間違えずに鮮明に覚えている、リスクの内容も、何故安易に使ってはいけないのかを。最後にカミュは言っていた。『アーナ、貴方が、何に変えても、誰にかえても本当に許せない人が動物使いに出来たのなら、この技が役に立つてくれるでしょう。私が居れば必ず私が守ります。ですけど…私がもし居ない時は、使ってください。最もそんな事が無いのを望みますがね』と。カミュさん、何を捨てても、どういつ結果になっても私は本当に許せない人ができました。

「貴方だけは……許さない」

「にゃー！にゃー！」

「ワウ！ワウ！」

アーナとニヤム、フロからプラチナの鬨気が爆ぜ、あの技を使うのを心に決めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4464i/>

天空への階段

2011年10月19日09時13分発行